

黎明のポケットモンスター

チリラーメン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

超常存在により、現代社会とポケットモンスターが交わる世界に転生させられた主人公。仲間たちと共にポケモン黎明期を駆け抜ける。現代×ポケットモンスター

※作者はダイパからの剣盾復帰勢です。アニメもほとんど見ていません。オリジナル要素マシマシな現実味のない自己満足作品になります。

目次

0話	プロローグ	1
1話	ゆかいな仲間たち	5
2話	急転直下	12
3話	モール	19
4話	モール2	26
5話	逃げるのも勝ち	39
6話	逃げるが勝ち2	47
7話	サバイバル生活	60
8話	サバイバル生活2	66
9話	サバイバル生活3	73
10話	小話	84
11話	配信開始	99

12話	配信開始2	107
13話	配信開始3	117
14話	小さな迷子	127
15話	小さな迷子2	133
16話	激戦	139
17話	激戦2	146
18話	激戦3	149
19話	激戦4	159
20話	訪問者	169
21話	V S 古の巨人	174
22話	V S 古の巨人2	181
23話	月華	188
24話	月華2	193

3 7 話	3 6 話	3 5 話	3 4 話	3 3 話	3 2 話	3 1 話	3 0 話	2 9 話	2 8 話	2 7 話	2 6 話	2 5 話
止龍	至龍	四龍	思龍	次龍	始龍	死龍	クラゲ進軍 3	クラゲ進軍 2	クラゲ進軍	肝試し	月華 4	月華 3
299	292	285	278	270	263	253	244	237	230	219	214	203

0話 プロローグ

突然ですが、私は今どこにいるでしょう？

正解は真白い空間でした。えっ、意味が分からない？大丈夫だ、私もわからない。

誰に言っているのかわからない冗談を考えて落ち着くと、周りを見渡す余裕も出てくる。

見回してみると多くの若い人が立っている。半分くらいは学生ではないだろうか？

立っているだけでは何も起きないので声をかけようとするが、口は開かず、足も動かない。両手は動かせるが手話もできない私では、明確な意思も伝えられない。

身振り手振りでコミュニケーションを取ろうとするが、気が付いたお姉さんに睨まれてしまった。まったく余裕がない。

それにしてもここはどこだろうか？確かにベッドで寝ただけで、明日は仕事なんだがなあ。などといういろいろ考えを巡らせていると、頭の中に声が聞こえてくる。

「ごーも、選ばれし100人の皆さん。お待たせしてしまって申し訳ございません。手続きに時間がかかってしまいました」

？選ばれた？何に？私が？私なんて、しがないオタクサラリーマンでしかないぞ。

混乱する頭の中を謎の声は、透き通るように浸透してくる。

「あ、質問は受け付けませんからね。簡潔に説明します。実はこの世界とは別の世界がこの世界に衝突しようとしています。それを回避するには100人のいけにえ：勇者が必要なのです。安心してください。死ぬわけではなく、新しい世界に転生することになります。選ばれた人は比較的適性のある人を選んでいます」

・・・はあ。意味が分からないのですけど

率直な感想であつた。

それにしてもパニニックにならないな。少なくとも私は何も無い空間に飛ばされれば、慌てふためくはずなんだけどな。謎の声の適性は何かをいじられるのか？

「そしてなんと皆さんが行く世界は現代ポケットモンスターの世界!!!……………になる予定です。いえ、違うんですよ。こういう衝突する軌道の世界は不安定で、その世界はまだポケットモンスターのポの字もない世界ですが、ポケモンが生まれることは決定しています。選ばれた皆さんはポケットモンスターソード・シールドを遊んでいらつしやる方たちです。うれしいですよね」

勝手な押し付けである。そもそも私がソードを買ったのは、コロナの暇な時間をつぶすためである。まあ、ダイパ復帰勢からするとグラフィックの進化に感動してかなりやり込んでいたが。

「その世界はゲームとアニメと現実の混ざった、まったく違った世界になっています。どういいう世界かは実際に体験して感じてください」

つまり、ぜったいれいどは—273℃つてか。無理じゃないかな？ 後ろにいるトレーナー、余波だけで死なない？

「最後にお待ちかねのチートタイムです。まずは皆さん共通の身体能力向上（小）とダブルバトルの才能です。まあ、これがないと一地方を徒歩で踏破するなんて出来っこありませんし、せつかくのポケモンでダブルバトルができないなんて悲しいですからね。現地の人もポケモントレーナーの素質があるのなら、持っている人は多くいます。…さあ、お待ちかねの個別チートタイムです。ちなみに見ることはできませんが、現地の人も一部持っています。が、（小）や（中）程度です。（上）や（特上）なんて現地の人も誰も持っていませんよ。…バグっている人以外」

最後のセリフはなんだ。やっぱり原点にして頂点の人とかいるの？

不意に目の前にキラキラ光るカードが現れる。そこには…

「さあ、受け取って、夢と冒険と！ ポケットモンスターの世界へ！ レッツゴー！」

あなたのチートは「育成（中）」です

確かに、（上）や（特上）が与えられるなんて言っていないませんでしたよね!! しかもバトルではなく、育成。俺 T U E E E E したかったなあ。

そんなことを考えながら、意識は暗闇に落ちていった。

2011年3月11日。福岡県在住の私、神崎ユウ（男）は、いまだポケモンのポの字もない世界で、ゆかいな仲間たちと元気に過ごしています。

誕生日が3/11で今日10歳になります。

それにしても、赤ちゃんからやり直したくなかったなあ。

1話 ゆかいな仲間たち

さて、私の説明をしよう。

え、唐突すぎる？そんなものさ。諦めてくれ。

私は比較的裕福な家庭に生まれたようだ。何せ家は二階建ての一軒家であるが、部屋の数が20を超えている。そんな家に居候もいるが、一人で住んでいる。残念ながら両親は事故で：なんてことはなくお互いに浮気相手と住んでいるらしい。もともと政略結婚だったらしく、残念ながら愛は生まれなかったようだ。

初めはヘルパーさんを雇っていたが、私が早熟だと思ったのか、いつの何かいなくなっていた。今ではお金が振り込まれてくるだけのドライな関係だ。

次はこの世界の歴史について。おおむね流れは前の世界と一緒である。ただ身体能力上昇（小）が付いているからなのか、面白い逸話がたくさんある。現代でも一部の人が戦場で銃の弾丸を切るなんて芸当ができる人がいるくらいだ。とは言っても、身体能力上昇（小）があっても弾丸が当たれば穴が開くし、普通に出血死する。さすがにスーパーマサラ人まではいかないようだ。

そして普段私が何をしているかというと、チートを試しながら、体を鍛え、株で大儲

けている。

チート能力はある人物をプロデュースしているのに使っている。その内紹介することもあるだろう。

体を鍛えるのは、この世界でポケモンが出てきたときに生き残るためだ。特に黎明期はかなりの混乱が予想できる。とはいっても、9歳の体で何ができるのやら。ストレッチとランニングくらいしか行っていない。

株で大儲けはそのままである。私が生きた時代より過去である現在、親の名義を使い聞いたことのある会社に投資すれば、約束された儲けが返ってくる。一応ではあるが、親の許可はもらっている。詳細は教えていない。

「盟友!何している?もうすぐ我々の誕生日パーティーだぞ」

『ロトー』

突然背後から幼い声と電子音声がかえってきた。

それでは、次はゆかいな仲間たちを紹介しよう。

声をかけてきた少女の名は新庄アイ。ゆかいな仲間たちその1。黒髪の日本人形のような同級生で同じ誕生日で同じ転生者だ。ポケモンは、小学生時代に全シリーズ習得済のプロフェッショナルである。

普通にかわいらしい容姿をしているが、その装いは普通じゃない。確かに3月はまだ

寒いがぶかぶかなローブに、杖、尖がり帽子と完全に魔女の姿をしている。俗にいう中二病である。

転生者は精神が転生前に引つ張られるのか、前世で中二病にかかってしまった彼女は今でもこんな姿だ。たまにふと正気に戻って悶えているが、すぐに戻ってしまっている。

かなりの奇行を繰り返したせいで両親とはうまくいかず、一人ポツチで街にいたところを私と出会い、今では行動を共にしている。ただ私の家に専用の部屋を5つも作っているのは遠慮がなさすぎるだろう。

ちなみにチートは「工作マスター（特上）」である。初めて聞いたときに、魔女の姿はチートとは何も関係ないのかよ！といった私は何も悪くない。

先ほどの電子音声は、彼女自作の人工AIである。

彼女のチートはまさしくチートである。

ポケモンとは関係ないが、モノづくりは、すでに大人どころか世界を超えている。ガラケー時代（当時4歳）に自作スマホは意味が分からない（本人は口トフォンと言い張っている）。内気な性格でなかったら、世に名を轟かしていただろう。

「この一年の集大成がもうすぐ起こるんだ。少しくらい大目に見てほしいな」

「盟友は少し背負い込み過ぎだぞ。少々知識のある9歳に何ができるといふのだ？」

この一年、私は儲けたお金を災害対策のためにばらまいていた。なぜなら今日2011/3/11は、東日本大震災の発生日である。一個人としても見過ごすわけにはいかない。匿名だが、巨大な防災施設も建設した。できることはやってきたが、不安は尽きない。

「ふむふむ。証拠は見せてもらって来たけど、ボクとしてはいまだに慣れないけどね。転生なんてね。それはそれとして、やれることはやっただろう？あとは結果を待つだけじゃないか。辛気臭い人がいるとおいしいご飯がますぐなるよ」

待ちきれないのか、もう一人やってきた。ゆかいな仲間たちその2、坂本リラだ。青紫のカラフルな髪をした、ボーイッシュな少女、そう！あのリラさんだ!! エメラルドをやっていた私は知っている。残念ながらそのご尊顔をゲームでは見ることはできなかったが(小学生には難しすぎ)、幼稚園にてアイが気が付き、そのまま仲良くやってきた。

残念ながら孤児であり、この家の居候でもある。一人で生きてきた経験からか、しっかりとしたもののお考え方は、彼女も転生者じゃないかと思わせるときすらある。

そんな彼女の特技は「動物の考え方がなんとなく解る」というものだ。昔はこの特技に悩んでいたようだが、すごい才能(アイ)もいるからか、当たり前のよう過ぎている。動物の中には人も含まれるようだが、私たちは気にしていない。

「まあ、そうだな。もう一人もそろそろ「お邪魔しまーす!!」来たか」

呼び鈴は鳴らさず、勝手知ったる家として普通に上がってきた彼女。ゆかいな仲間たちその3。現役ジュニアアイドル 芸名、ルチア。

エメラルドグリーンな髪をポニーテールで結んだ、元気はつらつな少女である。本名 倉根テルコ。本名で呼ぶと返事すらない。

彼女もポケモンに出てくるらしい。私はダイパでポケモンは終わったが、アイ曰くオメガルビー・アルファサファイアにてアイドルとして登場するそうだ。

その話を聞いて、同じ幼稚園で将来の夢はアイドルになることと宣言していた彼女に、私のチートを試させてもらった。育成(中)が(上)や(特上)に劣るとはいえ、対象は指定されていなかった。人間も対象に行けるんじゃないか？

そんな軽い気持ちで始めた私たちの大手動画サイトの配信生活(出演者ルチア、トレーナー私、機械回りアイ、台本リラ)。もちろんルチアの両親は猛反対だ。

ルチアの両親は俳優であり、めったに家にいないが彼女を愛しており、テレビに出る覚悟があるなら、しっかりとしたトレーナーをつけるべきだと言っている。至極当然と思うが、すでに様々なトレーナーに指導されてきたルチアが、私の軽い指導とその成果に虜になってしまい、家出騒動にまで発展した。最終的にルチアの両親が折れ、ボディーガードと弁護士などプロの方々を雇い、配信生活は始まった。

ルチアの才能と努力、私たちのサポートもあつてか、すぐに人気となり7歳でテレビデビューである。今ではレギュラー番組をいくつも持つ大人気アイドルである。ちなみにすべて断っているが、私たち三人もスカウト依頼がたくさん来ることとなった。

「キラキラ〜！くるくる〜？つて、わたしが登場!!」

「「おー」」

きれいな回転を見せながらルチアが登場する。感心はしたが、家の中は飛んだり跳ねたりするもんじやない。そんな常識を説いてもいつも彼女の登場は派手である。もう諦めた。

「どうやらいつもいるボディーガードは帰ったようだ。いつも通り17時くらいに迎えに来るだろう。」

「全員揃ったことだし、パーティーを始めますか!」

「うむ!」

「やっただね」

「待たせてごめんねー」

不安は忘れて私たちは思いっきりパーティーを楽しんだ。

現在14時。パーティーの余韻もほどほどに、運命の時間が近づいている。このために午前中にパーティーをしたのだ。

やはり直近になると不安になってしまう。そんな空気が伝染してか沈黙が重い。

私がこの空気を作ったとはいえ、さすがに気まずい。空気の入れ替えもかねて、リビングの窓を開ける。

すると庭には30CMもある巨大な体で紫の体色で出歯が特徴的なネズミがいた。

「は?!」

「コラッ!!!」

2話 急転直下

あるーひ、家の中、ネズミさんに、であーた。

「コラ!!」

「危な!!」

庭にいた巨大ネズミ、たぶんコラツタがとびかかって飛び掛かってきた。リアルな鋭さを持つ歯が私めがけて迫ってくる。倒れながら躲すことに成功するが、背中を打ってしまう。

「きゃー!」

「なんだい!」

「コラツタ! コラツタだ!!」

「コラ!! コラ!!」

一人別に意味であるが、全員が混乱している。仮称コラツタもせわしなく警戒している。

そんなコラツタに無防備に近づく馬鹿がいた。アイである。

「よし、わが軍門に下るといい、コラツ 「危ない!!」」

無警戒に近づいたアイを敵だと認識したのか、コラツタが飛びかかる。寸前でリラが腕を引つ張らなければ大けがを負っていただろう。

が、かばったリラが腕に切り傷を負ってしまう。

「痛！」

「ちよー！リラちゃん！あわあわ、血が」

「ルチア落ち着いて、ただの切り傷だから。ボクは大丈夫。それよりもアイ。君たちが言っていたポケモンってやつでいいんだよね」

「…うん」

アイは消沈し混乱している。顔も真っ青だ。

リラにコラツタの攻撃が当たったように見えなかったが、少しかすった程度で血が流れるのか。

私も彼女たちを庇うようにコラツタの前にでる。恐怖もあるが、前世社会人としての意地くらいはある。あと、やはり精神に何かされている。前世でこんな場面に合えば足が震えないなんてなかったはずだ。

そして、この場で一番切り抜けられそうな能力を持つものに問う。

「リラ。君の特技で何とかならないか？」

「…難しいね。すごく興奮している。いきなり知らない場所に連れてこられた動物みた

いな反応だよ。あと戦闘意欲がすごく高い」

「ポケモンは遺伝子レベルで戦うことが刻まれているらしいから…それかも」
「なんでそんな冷静なんですか!!?」

残念ながらリラの力は当てになりそうにない。アイは顔色が少し戻ってきた。そしてルチア! テレビでは100点かもしれないが、今は声を落とせ、これ以上興奮させるな!!

心の中で憤るが、声には出さない。

それでもコラツタは今にも飛び掛かってきそうだ。

「みんな、今すぐ玄関から逃げるんだ。私が殿くらいは務めるから」

「でも!!」

「ルチア、声を荒げるな。っ!! 来るぞ! 玄関の扉は開けといて。行って!!!」

私が大声を出すと3人は急いで玄関に向かう。コラツタも反応して飛び掛かってくる。

ヘイト管理ではないが、大声を出した私に向かってくる。

私は足元の木製のテーブルを蹴り上げる。持っててよかった身体能力上昇(小)。身の丈サイズのテーブルが跳ね上がる。厚みもあるし壁には

メキ!!

「まじかー！」

思わず声に出してしまう。テーブルを突き破り白い歯が見える。机の厚みをもろともしない鋭い歯には、冷や汗が出る。

しかし、好機。歯だけ机を貫通し、すぐには歯を抜けないコラツタごと、テーブルを窓の外に放り投げる。

ガシヤーン

窓を巻き込みながらテーブルが宙を舞う。

ポケモンの持つ戦闘本能が本物ならすぐに復帰するだろう。

事実、ほとんど間を置かずにコラツタは窓から戻ってきた。

私はすでに玄関から逃げ出していたが。

皆との合流は簡単であった。私が心配で玄関先にいたのだから当然か。うれしいやら、心配やら湧き出ていたが、その場を離れることにした。

「マジか」

「うそ」

「そんな」

「ポケモンは友達なのに」

私たちは街の様子に愕然とする。黒い煙はどこでも上がり、人の悲鳴も聞いたことのない生き物の鳴き声も交差している。世紀末とはこういう光景なのだろう。

ただ、立っているだけでは格好の獲物となる。何も知らない人よりかは現状を把握できている私たちは、物陰に隠れると今後の方針を語り合う。

「ポケモンの登場は、あと2年はあるんじゃないよ？」

「ルチア、それは予測にすぎないよ」

「……うん。初期は10歳設定だけど、最新のポケモンはもつと年齢が上だったから」

「起きたことはしょうがない。今後はどう動くかだろ。野生のポケモンには極力出会わず、まずはリラの手当てか」

「なら向こうにあるシヨツピングモールだね。この混乱の中動き回るのは得策じゃない。拠点を作ろう」

「どうやって行くのよ。ポケモンがたくさんいるんでしょ」

ルチアの不安そうな声に、また黙り込む。

ちなみにリラもルチアもポケモンのことは教えてある。信頼してくれているのか、抵抗せずに受け入れてくれたのはありがたい。アイ監修のポケモン講座も習得済みである。

『それなら任せるロトー』

「「うわ!!」」

「つ！て、ロトフォン？」

『イエス！マイスター』

アイお手製のアイフォンが宙に浮いている。プラスチックの外装がコミカルに動いているのはシニールである。

敵対していないポケモンに出会えたのがうれしいのか、アイがロトフォンとくるくる回っている。

とりあえず警戒を解くと会話可能であることから、先ほど真偽を問う。

『地図機能に周りのポケモン情報も取得できるロトー』

高性能だな。一番の懸念は解消された。

ここからがショッピングモール目指して進むだけだ。

「一つだけ。今私たちには余裕はない。私を恨んでくれていい。この4人以外見捨てていくから」

「…了解した盟友」

「ユウ。悪役がらなくてもいいよ。ボクも同意見だ」

「私がいつか絶対みんなを笑顔にして見せるから」

助けを呼ぶ声を見無視しながら、私たちはモールを目指す。たまにある動かない人間や体の一部が取れた人間に、胃の中身を吐き出しながら、それでも進む。生き残る決意を固めながら進んでいく。

私が顔を上げるとそこにはいつもの青空が広がっていた。
「まったく。ポケモンはもつと楽しいコンテンツだろ」

3話 モール

いま私たち、シヨツピングモールの前にいるの

ただし、シャツターどころか防火扉すら降りているけど。

どうしようか。

道中の様子は割愛させてもらった。とりあえず精神ががりがり削れるような道のものであったといわせてもらう。興奮したポケモンたちも逃げ惑う人間に注意が向いており、わざわざ隠密行動をとる私たちに目もくれなかった。

気を紛らわせるために、ロトフォンにポケモンたちの事について聞いてみると、幾つかのことが分かった。

- 一、ポケモンたちはこことは別の場所に住んでおり、突然この世界に移動した。
- 二、人間については、この世界に来た時に、いつの間にか情報が入っていた。
- 三、ポケモンは基本的に強くなることを目指しているが、その近道は認めた人間にしたがう事。

四、ロトフォンはアイをマスターと認めており、従うこと。ただし、戦うには専用チューニングされた電化製品が必要。

五、・伝説、準伝説、幻はやばいである。

一、はもともと自然豊かな場所に住んでいたのに、気が付いたらこの世界にいたらしい。つまりポケモンたちは、突然連れてこられたため興奮しているようだ。時間がたてば、もう少し落ち着いてくれるだろう。

二、三、はいつの間にか頭の中にインプットされていたらしい。私たち転生者と同じ理論なのか、疑問にすら思わないようだ。

四、は元の機械が優秀なため凶鑑機能も地図機能も高性能だ。パソコンもあればボックス機能すら手に入れるらしい。あの四次元ボックスが手に入るとか、やばいとか言いがたない。ただ、ロトムは基本フォームで戦えない。正確には機械から機械には移動できるが、機械から外、外から機械へは移動の仕方が分からないようだ。無理をすれば可能かもしれないが、地図能力を失うわけにはいかず試していない。アイの目がキラキラしていたのは見なかったことにする。

五、は戯れに聞いてみただけであったが、予想以上の情報を得た。なんでも生まれながらに特殊な力を持っているポケモンを伝説、準伝説、幻とするようだ。私が冗談でサンドが陸を創る能力を持ったならグラードンになるといつても否定されなかった（肯定も

されなかったが)ことから、顔がひきつった。あとポケモンは後天的に特殊能力を得るものもいるようだ。そのような個体は異常個体に分類されるらしい。会いたくねえ。

そうやって新しい知識を得ながら、ショッピングモールに到着した。残念ながら完全な要塞と化していたが。

「どうしようか」

「いや、あれを見て」

ルチアが指を指した方向を見ると、モールの窓から警察の人が何やら指をさしている。

「どうやら回り込めば出入口があるようだ。」

「さすがルチアだね。その観察力はボクも見習わないと」

「へへん！アイドルですから」

「さすが我らが歌姫」

「アイちゃん。いつも言っているけどアイドルって言うてほしいな」

「アイ、調子出てきたところ悪いが、知らない人には猫かぶっておけよ」

「行くぞ!!盟友たちよ」

「大丈夫かな」

回り込んだ先には、シヨツピングモールの二階にある家電量販店にモノを運ぶ専用エレベータ。それに付随する階段があった。

なるほど、もともと見づらい位置にあり誘導されなくては分からない。出入りするにいい場所だ。

階段を上った先には先ほどの警察官がいた。

「よくここまで来れたね。ここは安全だから」

「ほんとですよ。日が落ちる前につけてよかったです。一人けがをしているのですが」
「わかった。まずは治療だね」

警察の先導に従って、シヨツピングモールに入っていく。

一つ誤算があったとすれば、家電量販店につながっていたことだろう。入ってきた場所を考えれば当たり前なのだが、反応するアンポンタンが私たちにいる。

「盟友！盟友！！」

「なん「なあ、こんな世になったんだ！あれはもう我が自由にしてもいいよな」…警官さ
さん」

「え…あ…うん。家電なんてこんな状況じゃ」

「うひゃー！！我が聖域なり！！」

どこから取り出したドライバーやペンチなどの工具を持ち、家電の山に突撃していった。

いや、どこからその工具を取り出した。

こつそりロトムもついていることだし、一人でも問題ないだろう。

「あははは、個性的な子だね」

「すいません」

「ごめんなさい」

「ちよーリラちゃんの治療は?! て、聞いてないし」

いたたまれない気持ちのままその場を後にする。

警察官に連れてもらった先には同じように逃げてきた避難民がいた。ただ人数は50人ほどしかおらず、この過酷な環境を表しているように見える。

「早くこの事態を何とかしなさいよ!!」

「いま本部に応援を頼んでいますから、もう少し辛抱してください」

ヒステリックな叫び声に思わずそちらに顔を向けた。よくいる恰幅のいいおばちゃんであったが、自分が安全になったことから不満が噴出したようだ。警察官の人にあったっている。

警察官の人も何とかなだめているが、声に出していないだけで不満に思っている人は多そうだな。思うだけで、自分で改善へ行動に移さない人と今後一緒に動くのは難しいだろう。ここに長居はよくないかもしれない。

「ねえ、ユウ。ここはあんまり」

「リラちゃんのいう通りだよ。たしかいくつか避難場所を考えていたよね」

「私も二人と同意見だ。もう少し先に大きな川の流れたキャンプ場がある。準備をして後日、そっちに行こうか」

その後はあまり他の避難民と関わらないようにし、食事をとり、分かれて今後必要そうなるものをピックアップしていく。

その後は配布された毛布に包まり、他とは距離を取って就寝した。疲れもあり意識はすぐに落ちていった。

あとアイは、食事だけ渡して放置している。普通のドライバーやペンチしか持っていなかったのに、キューインと電動工具の音がしていたこともあり、怖くて近づかなかつた。

あいつは数時間で何を作るつもりなのか。

「ひゃーひゃひゃひゃ!!!」

聞こえない。私には何も聞こえない。

4話 モール2

ショッピングモールで迎えた朝は最悪にだった。

目覚まし時計が仲間の悲鳴なんて最悪すぎる。

「きゃー!!!」

「?!」

包まっていた布団を蹴飛ばし、とにかく悲鳴のあったほうに向かう。

何か考える余裕はなく、体が勝手に動いていた。

「大丈夫か!!」

たどり着いた先には、倒れて呆然としたルチアと血だらけの男とチルツトがいた。

どゆこと？

SIDEルチア

わたしはアイドルとして人一倍気配には敏感であった。ただ極限状態での行動に体は、かなりの疲労を迎えていたようだ。そうでなければこんなことにはならなかったの

に。

臭く生暖かい風が顔にあたり私は目を覚ます。すると目の前には脂ぎったおっさんがいた。

「?!?!」

あまりの事態に声を上げられなかった。いや上げなくて正解だろう。声を上げればおっさんの拳が飛んでくる。そういう危ない雰囲気醸し出していた。

「ぐふぐふ、いやあ。あのルチアちゃんがこんなところにいるなんてね。声は上げないでね。どんなことをするかわかんないから。こんな世界だし、神様は微笑んでくれているのかなあ」

最悪!!こんな変態が紛れ込んでいたなんて。周りを見ると寝た場所とは違っていた。運ばれていたことに気が付かないなんて、わたしの間抜け。

「さあ。痛いのは一瞬だからさ」

「痛いのはあんただけよ!!」

油断だらけで近づくと男にわたしは思いっきり蹴り上げ、男の弱点を直撃した。その隙に離れる。

さらにわたしは大声を上げる。

「きゃー!!!」

声を上げればこのおっさんは何をしでかすかわからない。それでも離れたのなら、他の人が来るまでくらいならなんとかなる。ユウちゃんの提案でわたしたち全員体は鍛え、護身術も会得している。

悲鳴に反応した人が来るまでもってみせる。

「このガキが!!」

「うるさい! 変態」

おっさんが右腕を振りかぶってくる。ただその動きは大きく、簡単に躲すことができず、

むきになったのか、何度も拳を振り下ろすがわたしには当たらない。

いける。

そこで調子に乗ったのがいけなかった。ここはいつも練習しているところではなく、障害物の多い場所であることを失念してしまった。

床に落ちていた布を踏んでしまいそのまま尻もちをつく。

力では勝てない。だから逃げていたのに。

「このガキ!!」

ゆっくりとすら感じる中、拳が振り下ろされる。

そんなわたしを助けたのは白い雲をまとった青い鳥であった。

「チルル」

S I D E ユウ

なるほど、この男はギルティだな。すでに気絶しているので問題ない。

問題は人間を攻撃するこのチルツトだろう。

結果的に助かったが、次の矛先がこちらに向きかねない。

私がどう排除するか考えていると、剣呑な雰囲気を感じたのかルチアが私の腰に飛び掛かってきた。

「違うの!!このチルルちゃんは友達だから」

「…説明。あと重い」

「失礼ね!えっと、昨日自由行動したでしょ。その時窓の外にこの子がいて、ビスケットがあつたから、えっと、その、え、餌付け、しま、した」

その言葉を聞いて私の怒りボルテージも上がっていく。それに伴ってルチアという言葉も力を失っていくが、加減はしない。

「勝手に、一人で、野生のポケモンに、近づくなつて!言っただろうが!!!」

「だって、お腹が空いてそう、痛、ご、ごめんなさい!!!」

私のぐりぐりがルチアに当たった。効果は抜群だ。

私はルチアを説教していたが、ようやく悲鳴を聞きつけた人たちもやってきた。この環境であまりに動きが遅いのではないだろうか。

正座をし、頭を垂れる彼女の上にチルットが丸くなっている。話を聞いた先ほどの勇敢な姿とは打って変わって今はのんきだ。こいつの性格が分からない。ただこちらを害する気持ちはなさそうだ。

やはりポケモンは良き隣人に成れる可能性がある。あとあの男を攻撃して、私の説教はスルーしていることから、予想以上に人間の感情に敏感なのだろう。よかったよかった。

問題は後ろの避難民だろう。状況を理解してか、男を庇うものはいないが、見知らぬ生き物と仲良くしている私たちを警戒している。こんな環境なら当たり前か。これは早くここから離れたほうがいいだろう。

「ちよつと!!なんで化け物がここにいるのよ!!さつきと殺しなさいよ!」

「落ち着いてください。相手は子供ですよ」

声に出す人もいる。声をあげるこのおばちゃんは、昨日も同じようなことをしていた。

警察官の人に止められてもお構いなしだ。ここは、私から切り出すべきだろう。

「では、今日中にここを立ちます。それでいいでしょう」

「いや、それでは君たちが」

「精々するわ!!」

「では失礼します」

頭を下げると、ルチアとリラを連れて離れる。

「よかつたのかい?」

「現実から目を背けている人たちと一緒にいても、大変なだけ。これでいいよ。それよりルチア、こんな状況だ。安定するまでは、できるだけ隠し事は無しで頼むよ。君の観察力は頼りにしているんだから」

「ぐ。わかつているわよ」

おい、視界の端で顔を背けたリラ。お前もなにか隠しているのか。

おう。ブルータス。お前もか。なんて言えばいいのか?

昨日目星は付けていたため、そこまで出発の準備に時間は掛からなかった。

そしてリラの隠し事は1階のペットショップの中にポケモンが混じっていたという情報だ。なにやらポケモンと動物どちらもいたようだ。

ケージの中にいたため、餌と水だけ与えたらしい。お前もか。なぜ餌付けする。そういう情報もすぐに伝えてくれ。それにしてもケージの中にいたということは、ポケモンは動物と入れ替わったりするのか。それも全てではなく、一部だけ。

リラの先導についていき、ペットショップに行くとか何やら騒がしい。

ポケモンが見つかったのかと頭を抱えていると、数人の男たちが何かを蹴っている。なぜかケージの外に出されているポケモンが。

発見したと同時に隣にいたリラが駆け出す。

「おいー！」

リラは私の制止も振り切り男たちの前に飛び出していった。両手を広げポケモンを庇う。

「やめなさい!!」

「邪魔すんな!! 化け物退治をやっているんだよ」

「これじゃあ、ただの弱い者いじめよ!!」

「この!!」

頭に血が上っている男はすぐに腕を振り上げる。躲すわけにもいかず、ルチアは目をつぶり耐えようとする。

まったく、せめて目は開けて防げよ。何のための護身術だ。そんなことを思いなが

ら、男の振り上げた腕に自分の手を伸ばす。

勢いの乗った拳は9歳の体では止められないが、その前なら簡単に止められる。前提に身体能力向上（小）があるが。

「大の男がみつともない」

私はそのまま男を押す。殴るために重心が高くなっている男は簡単に、よろける。

バカにされたと感じたのか、すぐにほかの男たちも殴りかかろうとしてくる。

「やめといたほうがいい。こちらに君たちのいう化け物がいることは、朝の騒ぎで知っているだろう？」

「チツルル!!」

チルットが勇ましく羽を広げる。私たちから見ればかわいらしい仕草だが、男たちには威嚇しているように見えたのだろう。

ポケモンに恐怖を持っている男たちは、悪態をつきながら去っていった。

私のため息を吐きながら、リアに拳骨を落とす。

「勇み足」

「ユウがいるから大丈夫さ」

一切詫びれないリラ。

もう一度ため息をつきながら、今度はポケモンのほうを向く。

憔悴したイーブイが三匹身を寄せ合っている。そして、男たちに殴られていたのは、ガーディであった。正義感のあるこのポケモンらしいものだ。

「リラ」

「わかつているよ」

リラをイーブイたちのところに行かせる。ポケモンの気持ちのわかる彼女しか、あのイーブイたちはダメであろう。

そして私は傷だらけになりながらも、悠然と男たちと戦った小さな勇者に目線を合わせる。ぼろぼろになりながらもイーブイ達を守り切った姿は誇らしげだ。

「よく頑張ったな」

「ガウー」

頭に手をのせれば、モフモフした毛が気持ちいい。ガーディも受け入れて気持ちよさそうにしている。

「わあ、ありがとう！似合う？」

「ブイー！」

リラも問題なかったようだ。何やらイーブイ達からプレゼントを貰っているようだ。髪飾りにしている。私の目にはその髪飾りが虹色に輝いている羽に見える。

このショッピングモールのどこにあつたんだよ！

「今回は本当に済まない」

「気にしないでください、警察官さん。私たちは何とかできます。心強い仲間がいますからね」

「そのようだ。これからはその姿が正しくなるのかもな」

あの後あまり時間を置かず私たちはショッピングモールを後にすることにした。あれだけ騒ぎを起こせば当然だろう。大きな目の荷物を全員が持っている。そして周りにはルチアのバックの上にチルット、私の足元にはガーディ、リラの周りにイーブイ達があった。彼らもついてくれるそうなので、私たちは一気ににぎやかになった。

「ではお元気で」

「ああ、君たち3人の武運を祈る」

敬礼をしながら、警察官さんは私たちを見送ってくれた。

目指すはキャンプ場。まっすぐ進めれば、昼前にはつくだろう。私たちはそろって歩き出した。

「待って、アイは？」

「あ!!」

「盟友の馬鹿野郎!!!」

あ、よかった。アイもちゃんと来た。目の下のクマは一日寝ていないのだろう。

シヨップینگモールの出来事が濃かったのだから、忘れていたのは仕方がない。アイのドロップキックは甘んじて受け「ぐえ」

「みぞおちに入っ…た」

「ふん!!」

「ごめんごめん」

「あははは、で君の後ろの人の紹介もしてほしいんだけど」

そう、アイと一緒に高校生くらいの青年がいた。いかにもなイケメンで、気品からお金持ちの雰囲気を出している。

「聞いていた通り、仲がいいんだね。では自己紹介させてもらおうよ。僕はツワブキダイゴ。趣味は石集め。アイ君にいろいろ聞いているよ。よろしくね」

「大誤算だ」

「…ん？なんかイントネーションが違ったような」

まさかの原作キャラの参戦である。え、でもなんで。

「ああ、君たちと同じく僕もポケモン？と一緒に行動しているからね。あそこは居づらかったのさ」

「バルバル」

ダイゴさんの背後からダンバルが現れる。なるほどまあ、納得のペアである。

強力な助っ人をつれて来たからか、アイが胸を張っている。

素直にすごい。

「やるなあアイ。ついでに背中に背負っているものの説明もお願い。あと、ロトムを冷蔵庫にした理由も」

そうアイは身長よりも大きな箱を背負っている。違和感がすごい。その横にはフロストロトムがいた。

「くくく。さすがの盟友も解らないか！この箱こそはポケモンパソコンver1.02なり!!」

「まじか！たった一日でできたのか!!」

ポケモン界の不思議の一つ。パソコンを完成させたのか。

まともな施設がないのに、原理も解らないものを作り上げるのか。

素直にこいつはチートだわ。

「そして盟友は生鮮食材のコーナーは行ったか？」

「いいや。保存ができないから見てもない」

「甘い。甘すぎるぞ盟友。ここはポケモンの世界、なればきのみがあるとは考えなかったのか？」

「?!でも腐…なるほど!!」

「全ての野菜や果物がきのみになっていたわけではないがな。そしてそのためのフロストロトムよ！パソコン内できのみが腐るかどうかはまだ不明だが、こ奴がいれば保存は問題ない」

「ロトロー!!」

「すごい。すごすぎる。きのみはゲームでも万能であった。現実でも同じ効果は分らないが、期待はできる。それはそれとして」

「で、移動は？今からロトフォンの出番だぞ。このでかい冷蔵庫は誰が持つんだよ」

「くくく。我が考えていないと思ったか。お願いします！大誤算」

「アイ君、君もイントネーションがおかしくないかい？まあそういうことだね」

……………最後は人力かい!!

ダンバルのねんりきは便利すぎた。

5話 逃げるのも勝ち

「けつきよく、ぼくが、いちばん、つよくて、すごいんだよね。…ってなにこれ」

「ダイゴさんと言えよこのセリフですし」

「うむ」

「いや、意味が解らないんだけど」

、原作キャラにあつたら有名なセリフは、言つてほしいじゃん。

キャンプ場を目指す私たちは、順調に進んでいた。パソコンがあるため、寄り道して物資の回収にもいそしむ。

その道中でポケモントレーナーをやつてみた。いやー、ポケモンに指示を出すのは興奮するね。これぞポケモンつて感じだ。

ようやく私の知るポケモンに近づいてきた。

とりあえずこの戦いの中で私のチート能力が一部判明してきた。育成（中）は技マシンがなくても、タマゴ技であってもポケモンがゲームで覚えるは、技を覚えさせることができる。残念ながらゲームのように一瞬で覚えるとまではいかないが、それでも訓練

したら使えるようになった。

そして技を4つ以上覚えさせることが可能であった。まあ、使えるから使いこなす、応用するまでは長い時間がかかりそうだが、楽しみがいっぱいである。

私たちの陣形はガーデイが先頭に立ち、上空にチルツト、中央にダンバル、索敵がイーバイ達となっている。

ガーデイはあさのひざしによる継続戦闘能力。唯一空から攻撃できるチルツトが上空から遊撃、ダンバルがとどめ要因。残念ながらイーバイたちは戦闘には消極的だ。シヨツピングモールでの出来事が尾を引いている。まあ、きっかけがあれば戦えるだろうと、今できる最善を取っているつもりだ。

このフォーメーションがうまく型にはまり、現在負けなしである。野生のポケモン一匹に対して、こちらは3匹掛りは少し卑怯だが、安全には変えられない。群れるポケモンが少ないのもありがたい。先に見つけた群れはこちらで迂回して回避している。

現状は野生のポケモンを殺してはいない。これはかわいそうだとか、倫理観とかではない。血の匂いにつられて他のポケモンを集めなためだ。拠点ができれば、躊躇はない。

順調である。別に油断しているわけでもない。だからこそ、このかすかに聞こえた銃声は私たちの足を止めた。

タタタタタン!!!

「!!!」

銃声が聞こえる。それも連続でだ。ハンドガンなんかじゃない。マシンガンとかの類だろう。

私たちは初めての音に戸惑うポケモンたちを連れて、物陰に隠れた。

「奇想天外？」

「アイちゃん、動揺して変な言葉使っているよ」

「でも、どうするんだい」

「まっすぐ進まないとキャンプにはつかない。ここから別の場所を目指すのはさすがに遠すぎる。行くしかないだろう」

「ユウ君はイケイケだなあ。まあ、自衛隊とかだったら保護してもらえるかもだしね」

手早く相談した私たちは、さらに慎重に進んでいく。

音の現場についても銃声はやむことはなかった。少し離れた位置から覗けば、恐ろしい光景が待っていた。

まず、戦っているのは自衛隊。それも小隊レベルで戦っている。絶えず動きを変えて相手を翻弄する様はまるで一つの生き物のようだ。現状怪我もなく優勢にことを進め

ているようにも見える。

問題は相手だった。三つ首の龍。圧倒的な威圧感。たぶんサザンドラである。しかし、たぶんをつけさせてほしい。なぜなら推定サザンドラの三つの顔はすべて同等に発達しており、口から常に黒い炎が出ている。背には翼が8つも生えており、尻尾は地面につくほど長い。明らかに私の知っているサザンドラではない。

「やばいロト！異常個体だロト」

なるほど、あれが異常個体。ロトムの説明で存在は知っていたが、今までのポケモンとは格が違う。戦うなんてできそうにない。

今もリフレクターのような壁を展開し銃弾を防いでいる。そしてまれに黒いエネルギー弾を放っている。あくのはどうのようだ。建物を豆腐のように壊す技は、当たればひとたまりもない。

サザンドラはゆっくりと自衛隊との距離を詰めていく。やろうと思えば一瞬でけりが付く戦いだ。証拠にサザンドラの顔には愉悅が浮かんでいる。

明らかに自衛隊をもて遊んでいる。それ以前にリフレクターは技マシンだろ。野生がレベル技以外を使うなんて、私が言うのもなんだが、自重しろ。

さらにサザンドラが何やら周りに電気を放つ。これを浴びた自衛隊員たちは、しびれてしまっている。でんじはか！

それでも自衛隊員は銃を構える。もう逃げてもいいだろうにとすら思ってしまう。すると今度は銃が爆発した。

「っ?!」

「銃が爆発!」

「たぶんさっきの電気の攻撃だね。銃は精密機械。内部の金属に電気が流れて磁性を持てば使えなくなる」

「ダイゴさん、詳しいですね」

「くう、防電対策は必須か」

一部別のことを考えているが、私たちの意見は一緒であった。つまり強力なポケモンには銃が効かない。

今後が不安になってくる。なんだかんだ銃というものがあるので、人類がある程度有利に立ち回れると考えていたからだ。

つまりこれからはポケモントレーナーの重要性がさらに上がっていくだろう。

「な!!」

さらに信じられないことが起こった。サザンドラが倒れてしまった自衛隊員の足だけを長い尻尾でたたきつけた。あれでは死ぬことすらできない。サザンドラはそのまま他の自衛隊員に攻撃を開始する。そこからは一方的な蹂躪であった。かえんほう

しやで丸焼きに、りゅうのいぶきで吹き飛ばす。最悪なことに殺しはしないのだ。いたぶってやがる。

自衛隊員たちの断末魔を、私たちは目を背けて耳をふさぐしかなかった。

「最悪としか言いようがないな」

私たちは話し合うが、言葉に力がない。あの場面を見てしまったのだから、仕方がないだろう。

私も考えていなかった。人間だつて千差万別。ならポケモンにも破壊を楽しむやつがいてもおかしくないのかもしれない。

「サザンドラは本来洞窟に住むポケモンロト」

「つまりまだ住処を決めていないってことかな？」

「獲物がこちらに来たから追ってきた可能性もあるぞ？」

「幸い、山があるのはキャンプ地側とは反対。つまり僕たち側というわけだ。一度隠れてやり過ごせれば問題ないかな。ここからキャンプ地までに大きな林もあるし」

「なら隠れて、も無理そうだよ。たぶん気配とか匂いとかで気取られちゃうよ」

自衛隊との戦闘で死角からの攻撃も対応していたことから、何かしらの知覚手段はあるだろう。

いや、最善手は分かっている。誰も口に出さないなら、私が出すしかないだろう。時間は決してこちらに味方しない。日が暮れて獲物がいなければ山に向かうだろう。リミットは日が傾いてくる15時くらいかな。約4時間

「二人がおとりになって逃げる。その間にほかのみんなが抜けるしかない」

「!!」

「…ユウ君の言うとおりでだね。なら僕が行こう。一番の年長者だし」

「いや、私が行きま」盟友!!」…可能性がゼロでないなら全員が生き残る道を探すべきだ。

「この中で私が一番生き残れる」

「しかし!!」

「アイは昨日から寝ていないから、集中力が続かない。ダイゴさんは私たちの予定のキャンプ地の正確な位置を知らない。再び合流は絶望的。ルチアはアイドル活動もあつてこのあたりの地理に詳しくない。残るは私かりだ」

「ならボクだつて!!」

「でもリラのポケモンは戦えない。あんな威圧感のポケモンに今は立ち向かえないだろう。対して私はこの辺も詳しく、相棒は特性もらいび。サザンドラのかえんほうしゃは問題なし。しかも隠れ特性はせいぎのこころ。発現はしていないけど問題なく動ける、よね」

「ガウー」

ガーディが追従してくれる。こいつも死の危険性は分かっているだろう。それでもついてくれるのは、トレーナー冥利に尽きる。まだ出会って1日もたっていないというのに。

まったく最高の相棒だな。

「議論している時間はない。今から作戦と仕込みを考える。手伝ってくれるよね」「くっ」「わかった」「時間がないのはその通りだが」「…ああ」

そんな泣きそうな顔をしなくても、生き残るさ。

私たちの戦いはこれからだ!!

6話 逃げるが勝ち2

時刻は14時30分。仕込みは十分。ルートも問題なし。他の野生ポケモンはサザンドラに恐れをなして逃げている。つまり

「大丈夫だ。問題ない」

「あるわ！バカ!!」

振り返れば全員目元を赤くしている。

少し会えないだけの別れなのに、みんな大げさである。まあ、その少しが本当に少しか、これから続くポケモンの長い歴史の中の少しかは、私の頑張りにかかっているが。

まあ、ここにいるメンバーは一角の人物になるやつしかいない。

私が心配するだけ無駄だろう。

ルチアのツツコミをスルーして、一人一人に声をかける。

「ルチア、君が最高のアイドルになるまでこの目で見るからさ」

「絶対よ。まだチルルと一緒に舞台は見せてないんだから」

「チルル」

「リラ、この先にある林も未知という危険度はそう変わらない。頼むよ」

「ボクにリーダーは押し付けられないでね。必ず帰ってくるんだよ」

「君の作戦だから、生きてまた会えるさ」

「…ぶい」

「はは、今回はダメだったけど、君たちだって前を向いて歩いて行けるさ」

「…ぶい！」

「ダイゴさん、すいません。こんなことになってしまつて。みんなの事お願いします」

「年長者として恥ずかしいね。誰も欠けることなくキャンプ地につくことをここに誓うよ」

「バルバル」

「アイ」

「行つてらっしゃい。…だから、必ずお帰りなさいを言わすがいい！」

「ロトー」

「ああ、行つてきます」

全員に声をかけ、前を向けば相棒が座っている。ガーデイの頭をなでながら、サザンドラが来るのを待つ。

すでにみんなは所定の場所に隠れに行っていることだろう。

10分ほどでやつが来た。向こうもこちらを認識したようだ。まっすぐ向かってくる。

「さてやるか」

サザンドラとの距離が近くなってくる。すでにガーデイは所定の場所に向かったの
で、足元には居なくなった。

サザンドラの巨体がもうすでに目前である

対面で向かい合えばその恐ろしさが肌にしみる。それでも逃げるつもりはない。
すうすうすう

「来いよ！ド三流!!格の違いを見せてやる!!!」

「ガアアアアアアア!!!」

私は手元の防犯ブザーを思いっきり引つ張った。

私は走る。腰に下げた防犯ブザーがうるさいが、これが目印になり、合図となる。道

中やショッピングモールでいろいろ盗ん…拝借しておいてよかった。

広い路地から狭い路地に曲がる。異常個体であるサザンドラはかなりの巨体だ。狭い路地はその行動をかなり制限できる。さらに事前に用意した周りの物を倒して道をふさぐ。

9歳のこの体は相応に小さいため、障害物の隙間を縫うように走る。

残念ながら妨害道具を、サザンドラは意にも介さない。にやつきながら私を追い詰めてくる。

右左右と複雑な路地を進んでいくが、私は行き止まりにたどり着いてしまった。

サザンドラの口が大きくゆがむ。楽しそうに何よりだ。ここで遠距離技である特殊技を使わず、迫ってくる場所にこいつの性格の悪さを示している。

まあ、その油断もリラの作戦のうち。うちの参謀をなめんな!!

私が垂れている紐を引っ張れば小麦粉の袋が落ちてきた。舞った小麦粉は両者の視界をつぶす。そのまま防犯ブザーを投げ捨て、開けてあったマンホールに飛び込んだ。

ここも作戦通り。迷わず進んでいく。目的の梯子にたどり着けばそのまま上がっていく。

もちろん出口のマンホールも開けてある。スムーズに抜け出す。

これで見失つてくれれば

ドゴーン!!

轟音とともにサザンドラが壁を壊しながら現れる。

「ですよねえ！てか早すぎない!!もう少し時間を稼げらと思つたのに」

小麦粉で白くなつたサザンドラの目は汚された怒りが浮かんでいた。

私は新しい防犯ブザーを鳴らして、すぐさま路地に走つた。この路地は狭くサザンドラの体格では通るこすらできない。

「ガアアアア!!」

咆哮とともに黄色い光線が頭上を走る。はかいこうせんか!!

反動ですぐには動けないようだが、空いた空間を悠々進んでくる。

まったく削れた建物が、崩壊したらどうすんだ。

ことごとく時間稼ぎが失敗していく。それでもかなり時間は稼げた。みんなはすでに林に突入していることだろう。最低限の仕事はした。あとは逃げるだけ、それが難しいのだが。

次は先ほどとよりも広いがそれでも狭い路地に入る。ここにもサザンドラにぶつかる障害物はあるが、サザンドラには効果はない。その事実焦つてしまい、私は足元で

つまずき、こけてしまう。倒した障害物がこちらの足元まで転がってきたようだ。

最悪だ。後ろからサザンドラが迫ってくるのを感じる。立ち上がろうとするが、すぐ後ろに尻尾をたたきつけられ、その余波で吹き飛ばされてしまった。

「ガツ!!!…たく。この期に及んでもいたぶるのが楽しいかよ」

サザンドラが近づいてきた。その差は1メートルほど。私が立ち上がったとしても、やつが何をしても躲すことはできない。それを理解してか、さらに凶悪な雰囲気をもせる。

それでも私は立ち上がる。諦めるつもりはないし、何よりも

「てめえの余裕くさった表情が気に食わないんだよ!!」

確かに私はサザンドラに何をされても躲せない距離だろう。つまり、サザンドラも私の攻撃をかわせない。

私は、とっておきのボールを投げつける。

サザンドラは冷静にこのボールを尻尾ではたく。するとボールが割れて中身の赤い粉末が出てくる。

唐辛子爆弾

サザンドラはどうやって相手を知覚しているのか。洞窟に生息しているなら知覚手段は限られてくるだろう。

一度マンホールに逃げ込んだ時に、防犯ブザーと小麦粉で、聴覚と視覚は試した。これでは、サザンドラをまくことはできなかった。で、あるならば嗅覚か更なる器官か。サザンドラが洞窟で生息していることから更なる器官が一番怪しい。そしてサザンドラは爬虫類の姿も持っている。つまり、超高性能なピット器官が最有力候補。

ダイゴさん曰く、ピット器官は高性能な触覚に似ているらしい。優等生の学生はそんなことも勉強するのかと戦慄したが、そんな神経の集まった部分に刺激物なんて当たたら、どうなるか。

「ガアアアアアア!!!」

今まで感じたことのない痛みだろう。きつい匂いの唐辛子により嗅覚もつぶせた。視界も唐辛子が目に入っては使い物にならない。さらに先ほどから鳴っていた2つ目の防犯ブザーも止める。

これでやつは完全な暗闇に取り残される。ただし、やつもバカじゃない。先ほどの位置関係から、攻撃を仕掛けてくるのは目に見えている。

ほら、サザンドラの口に憤怒の炎が集まってくる。

逃げてでも一本道の路地では逃げ場はない。私が防犯ブザーを止めたのは、やつの聴覚をつぶすだけではない。最高の相棒への合図でもある。

「ガーディ!!じゃれつく!!!」

「?!」

「ガウ!!」

圧倒的なレベル差。本来ガーディの攻撃なんて効きもしないのだろう。ただ、やつには明確な弱点が存在する。4倍弱点フェアリー技。そして私のチートにより本来なら覚えない低レベルでも使えるじゃれつく。さらに狭い路地に躲す余裕はない。知覚能力は潰れている。

ガーディのじゃれつくは、連続で急所に入った。

「逃げるぞ!!」

「ガウ!」

「最後にくらえ!!」

私は腰に付けていた残りの防犯ブザーを投げつけ、ガーディを伴って、路地を逃げ出した。

これで足音でも追いかけれない。

一人と一匹は路地を出て逃げる。後ろには様々な光線と暴れる轟音が。周りのビルが崩れていった。擬似いわなだれ。

これでも倒せはしないだろうが、時間は稼げるはず。急いで離れようとする。が。
「ガウー！」

「!!」

正確無比に怒りの炎が飛んできた。

恐るべき狩人の本能。人間の知恵に野生の本能が勝るか。幸い特性もらいびにより、事なきを得たが、ガレキを壊してサザンドラが現れる。その目にすでに遊びはない。

ここから先は賭けしかない。すでに日が落ち暗くなった中を走っていった。

はあはあはあ

私たちは縦に大きな穴の開いたビルに逃げ込んだ。もともと廃ビルだったのか、ポケモンの影響でそうなったのかはわからないが、屋上から一階まで穴が開き、月明かりが差し込んでいる。

ピット器官をもつ生物は視覚が弱い。ポケモンにそんな道理が通じるかわからないが、視力が優れているとは思えない。ピット器官をつぶした今、サザンドラも例には漏れずろくに見えないだろう。

まあ、そんなもの最悪の狩人には関係ないだろう。

暗闇からサザンドラが現れ、月明かりによりその姿を現す。

目にはすさまじい怒りが宿っているが、容易に距離も詰めず、特殊技も使おうとしない。先ほどの特性もらいびも知らなければ、特殊技すべてが効かないと考えても不思議ではない。

本当に嫌になる。なんでこんな格下に本気になっているんだよ。

これが最後の仕掛けになる。タイミングがずれたら一瞬でお陀仏である。ただまあ、ここまでくればやつへの攻撃する瞬間くらいは、感じるさ。

サザンドラがこちらに突撃してきた。

同時に私は半分無意識で最後の仕掛け作動する。

上から降ってくるのは蓋の開いたドラム缶。全身のガソリンがサザンドラに降りかかる。同時にガーディのひのこによりサザンドラの全身が燃え上がる。

それでも気にせず突撃するサザンドラ。ダメーჯ覚悟で殺しに来るのはダメでしょ。

今回の一連の流れで私は徹頭徹尾、サザンドラの五感を奪うことに注視してきた。

ゆえに最後の仕掛けもこれに尽きる。

私が少し後ろに下がれば私が乗っていた鉄骨がテコの原理により持ち上がる。全身を燃え上がる炎により、視覚とピット器官が完全に塞がれたサザンドラに躲すすべはない。

「お前は自衛隊と戦っているとき、銃弾をリフレクターで勢いを減衰させていたよな。

銃は勢いがあるから物を貫く。勢いがなくなれば脅威じゃない。逆に言えば、お前クラスでもポケモンの技以外でもダメージは与えられるってことだ。それが自分の全力の勢いならなおさらな」

「ガアアアアア!!」

全力で距離を詰めてきたサザンドラの体を鉄骨が貫いた。赤い血しぶきが上がる。それでも暴れるサザンドラ。驚異的な生命力の前に鉄骨では即死に届かなかったか。

暴れるサザンドラに廃ビルが耐えられるはずもなく、ビルは崩れていく。

「ガウ?」

「ああ、大丈夫。かすただけだから。やばかったらひのこで焼いて止血してもらおうからさ」

「ガウ!」

例の廃ビルから命からがら逃げだした私たち。ただ、飛んできた破片で左わき腹から血があふれる。

現在大きな橋の上まで来た。かなり深く、冷たい水が月明かりを反射する。この川を下ればキャンプ場につく。

そう、やっとここまで来た。生きてここまで来た。あと少し。だから、

「いいかげん諦めろや!!サザンドラ!!!」

「ガアアアア!!!」

お互い満身創痍。サザンドラに至っては、鉄骨が刺さったままで瀕死であろう。それでもまだ諦めないというのか、この怪物は。

こちらにはもう反撃の手段は残っていない。サザンドラが瀕死であっても、正面から戦えばガーディでは勝つことはできない。それだけのレベル差、種族差がある。

だからどうした。それが諦める理由にはならない。

「行くぞガーディ!」

「ガウ!」

私たちは無謀な戦いに挑む。

それに対して絶対的な覇者は、この小さな勇者たちに切り札を持って迎えるようだ。

「くそが。そんなものまであるのかよ」

りゆうせいぐん。

ドラゴンタイプ最強の技はあまりにも残酷で美しかった。

「ガーディ頼む!」

私はガーディを抱え込む。こんなバカに最後まで付き合ってくれた礼だ。私の体が少しでも盾になればいい。

私たちの視界はすでに光に染まった。

巨大な橋は完全に崩れ去った。

圧倒的な破壊痕を前にしても、サザンドラは気を抜かない。

死体は見つかからない。それが残るような威力ではなかったが。たとえ水に落ちたとしても、あの出血ではすぐに死ぬ。

またこの冷たい水では、体温を保てない。

あの犬の炎であっても体温を保つには弱すぎる。冷えるだけだろう。

自分の知覚は、生き物の気配を感じず、第六感も反応しない。

サザンドラは空に雄たけびを上げると、自身の住処の山に帰っていった。その背中には一抹の寂しさがあつた。

もしサザンドラが、もう少しとどまれば。もし川を下っていれば、少し下流の川の底でわずかに輝いた白い光は、見逃さなかつただろう。

7話 サバイバル生活

知らない天井だ。いや、天井ではなくテントなのだが、見知らぬ場所で目が覚めたら言わなくてはならないだろう。

目が覚めても生き残った実感がわかない。

それにしても本当に怖かった。思い返せば、恐怖しか湧き上がってこない。アドレナリンが出まくっていたのか走り抜けることが出来たが、もう二度とやりたくない。

私がテントにいるということは、作戦の最終段階は成功したのだろう。そう、もし仕掛けが全て不発に終われば、夜の川に飛び込んで死亡偽装をするつもりであった。川は冷たく深く大きく、川の中にどのようなポケモンがいるかもわからない。賭け要素が強かったが、なんとか勝つことが出来た。

安堵とともに、体を起こそうとするが体が重く動かない。川の中でいろいろぶつけた感覚があつたので後遺症でも貰ってしまったか、と頭をよぎつたが小さな寝息が聞こえてきた。

目を向ければリラとルチアが私に覆いかぶさり寝ている。物理的に重かったようだ。心配をかけて申し訳なく思うが、重いのでどいてほしい。起こすつもりもないが。

そんなことを思っていると、顔が舐められる。こいつも心配していたのだろう。

「お前も無事でよかったよ、心配かけたなガード、いやウインディ」

「ガウ」

川の中で意識を失う前に、きれいな光が見えたのは気のせいではなかったようだ。川底に炎の石でもあったのだろうか。大きな巨体にかっこいいたてがみを持つでんせつポケモンウインディ。

正直に言えば、川から岸边に打ち上げられれば生き残れるかも、程度の生存確率だったので、ウインディが川から引き上げてくれなくては、今頃仏様になっていただろう。

「お前のおかげで生き残れた。ありがとう。ついでにこの二人も退かしてくれるとありがたい」

「わふう」

あきれたような声を出しながらも、ウインディが二人をそつと退かしてくれる。わかつている。あとでいろいろ言われるだろうが、今は現状を把握するほうが大切なのだ。

だから、そのジト目はやめてほしい。

テントから出ると、外はもうすぐ太陽が出てくるくらいの明るさであった。

周りを見渡してみると、大きな広場の川側にテントがあり、近くを流れる川には何か

の残骸がある。そして林側にはなにかと戦った跡が残っていた。こちらも激しい戦いがあったのだろう。

焚火の周りで夜番をしている二人を見つけると、安堵しながら近づいていった。とりあえず誰も失わずに生き残れることが出来たようだ。

「みんな無事でよかったよ」

「!!ユウ君。よかった起きたのか」

「……………」

ダイゴさんはすぐに返事が返ってきたが、アイからは無言の返答であった。

手元で何か作業をしているようだが、こいつは意外に律儀だ。返事を返さないということとはそういうことだ。

「はあ、心配かけてすまなかったな。ただいまアイ」

「…まったく次はないぞ。お帰りユウ」

私とアイはお互いの拳を軽く合わせる。この距離が私たちなのだ。その光景を羨ましそうに見つめるダイゴさん。

実は友達がいらない？なんて失礼な考えが浮かんだ。

「現状は？」

「とりあえず安定していると言つていい。ただ、あまり油断はできない。林側にはいく

つかのグループがあるが、全てどくポケモンと嫌な構成だ。川には獯猛なヘイガニが住んでいる」

「川から流れていたら、餌になっていたのか」

「そうだな。盟友を受け止める柵を作ろうとしても邪魔ばかりしてくる。幸い川から出れば問題ないが、いつまでも川の中から出てこないとは考えられない。盟友が上流の岸からウインディに運ばれていなかったら、餌になっていただろうな」

本当に運がよかった。それしか言えないだろう。他の疑問もぶつける。

「あれから何日たった？それと私の体が元気なんだが、どういうことだ？まともに動けないのは覚悟していたんだがな」

「ああ、あれからまだ1日しかたっていない。そのからくりは…盟友はいい実験台になったよ。きのみなのな。オレンのみですらすさまじいな」

「よく悪ぶれるね、アイ君。ウインディに運ばれた血だらけのユウ君を見ていの一番に駆け寄っていったのに」

「…くう」

照れ隠しか。それにしても話を聞く限りきのみのがさがすさまじいな。人間であつても瀕死からまともな状態にまでもっていくのか。

「残念ながら盟友の左わき腹のやけどの跡は治らないがな」

「これはいいさ。水に入るからわざわざウインディに焼いて塞いでもらったものだから」

サザンドラとの最後の決戦の時、ガーディを抱きかかえたときにひのこで焼いてもらったのだ。やらなければ出血死していたため、後悔はないがオレンのみでも持つていれば、なんて思いも出てくる。

ただ焼けど跡が残っていることから、きのみは生物の修復力を強化しているのだろう。外傷は治せても、医者いらずとはいかないようだ。

「林方面は？」

「そつちは僕のほうが詳しいね。簡単に言うと上流側から西方面は一匹の強力なロズレイドが率いるスボミー系列のポケモン。西側が数の多いドクケイルが住んでいる。そこから北側の下流方面はスピアーたちの巣になっているね」

「よく無事で」

「本当だよ。初めにドクケイルのところに入ったら毒技のパラダイスだったね。幸いダンバルが鋼タイプだったから、なんとかかなっただけだよ。その後南に追いやられて行っていると、急に追撃がなくなつたんだ。今思えばこのドクケイルは縄張り意識が高いいだろうね。その後出てきたロズレイドはきのみを渡して通してもらつた形かな。紳士的だったよ。問題はスピアーだね。こちらは攻撃的で野心的だ。餌のためか積極

的にこちらにも攻撃を仕掛けてくる。今は隣接しているドクケイルに集中しているよ
うだけど、いずれは無視できなくなるだろうね。それに川の向こう側の林は未知数だし
ね」

「かなりの激戦でしたね。それでダンバルが進化を？」

「そうなんだよ！まあ、それだけ負担をかけている証拠だから素直に喜べないけどね」
「メタ」

そう、ダイゴさんの傍らにはダンバルが進化した姿メタングが佇んでいた。角ばった
フォルムは男心をくすぐられる。でも私の相棒のほうがカッコいいからな!!

「さて、再会の宴は今度にして、この現状を打破していく方法を考えないとね」

「なら盟友。後ろの二人は任せたぞ」

壊れたブリキのおもちやのようにゆっくり顔を回せば、鬼が二人いた。起きたら心配
していた人物がいなければ、まあ、こうなるだろう。

「……………元氣そうでよかったよ」

「バカー!!!」

アニメみたいなたんこぶが二つできました。

8話 サバイバル生活2

ガミガミガミガミガミガミガミガミガミガミガミ

リラとルチアの説教は日が昇ってから続いた。

別に聞いていないわけじゃないよ。

ただ、頭から煙が出たね。

私たちは今後の動きについて話し合った。とりあえず、生活基盤を作らなくては どうしようもならない。

「さて、今後はここに生活拠点を作っていくことになる。私はきのみの栽培。アイはここで拠点を。ルチアとリラはロズレイドに交渉して木材を分けてもらう。ダイゴさんはスピアーの襲撃に備えつつ、ルチアたちの手伝いをお願いします」

「わははは、我に任せるといい」

「僕たちも頑張ろうか」

「交渉はボクの出番か」

「アイドルにお任せあれ」

「ではみんな、てきぱき動いていこう」

「「おう!!」」

S i d e ユウ

きのみ栽培。きのみの有能性は私自身が証明した。今後の安定した食料になるし、ポケモンたちとの交渉にも使える。つまり、私がやるべきはよりおいしいきのみを作り出すことである。

そして私にはチートがあり、きのみ育成にも補正がかかっている。きのみと土地を見れば最適解がなぜ分かる。くふふ、これはチートさまさまだな。

そう思っていた時期が私にもありました。

「きつこ」

まだ3月の中頃。気温的には生活しやすい気温といえるだろう。私は天高く鍬を振り上げ地面に振り下ろす。キャンプ地は畑ではないため、まずは畑作りからだ。これがきつい。

忘れがちになるが、いまだ9歳の身。どうしても鍬に振り回される。抑えようとすれ

ば余計に体力が持つてかれる。畑仕事を甘く見ていました。

すでに太陽は高く上り、昼食の時間。ほとんど進まない開拓にダイゴさんの力を借りようと、視線を上げれば……ものすごく綺麗な畑が出来ていた。その横には誇らしげな、ほめてほしそうな顔をしているウインデイがいた。あなをほるを応用したのか。

苦笑いしながら、ウインデイの頭をなでるのであった。

きの上に適正値を超える水を与えるとすぐに枯れるだど！しかもかなり厳密なんだが。水がないと味も悪くなるようだし……

手動では限界がある。あとでアイに自動水やり機を作ってもらおう。

S i d e a i

くくく。ここからは私の時間だ！家も防壁も我が作ってしんぜよう。

皆が気が付いているかは知らんが、ここまでくる間に倒壊した家はあまりにも少なかった。ポケモンたちは人知を及ばない力を有しているのである。つまり総体としてポケモンは積極的にものを破壊することは少ないと考えていいはず。

つまり優先順位は雨風をしのげる家、外敵の種類が少ない川方面のヘイガニ対策、その後には林方面への防壁だろう。

私のパソコンには、途中で立ち寄ったホームセンターでの物資も十分ある。

勝ったな!!!

我は勝利ののこぎりを天に掲げる。

おい、ロトムよ何をおびえる。こんなただのポーズではないか。

まあいい。では取り掛かるとしよう。

Sideダイゴ

本当にこの子たちは、小学生なのだろうか。何度目かになる疑問が頭をよぎる。

「フムフム。まあそのくらいならボクらに任せてくれたまえ」

「ローズ」

生物として格上のローズレイド相手に笑顔で交渉するリラ君。彼女には動物の考えが分かるらしいが、それでもこんな簡単に住処の木々を貰えるものなのだろうか？

林の戦いを経験した今では、イーブイ達も戦えるようになり3匹同時に操る彼女の實力は、本人は謙遜するがかなりの実力者だ。

「ルチアア！いつきまーす」

「[[[ミュー!!!]]」

たくさんのスポミーに囲まれながらも、歌と踊りを披露するルチア君。アイドルに興味のない僕でも聞いたことのあるアイドルは、種族の垣根を越えて熱狂させるものらしい。

初めは僕たちを警戒していたはずのロゼリアたちもルチア君の歌と踊りに夢中になっっている。

彼女がいればポケモンと人間の共存が簡単なものに見えてしまう。

ここにいないだけでユウ君は、あのサザンドラに立ち向かえるし、物づくりにおいてアイ君を超える大人はいないだろう。

僕だけが何も無い。大企業の御曹司として人一倍努力してきたはずなのに、半分ほどしか生きていない少年少女に嫉妬していることが、すでに醜く自分に嫌悪感を抱かせ

る。「ダイゴさん、悩み事かい？」

「ただの考え事さ。それよりもリラ君の交渉はうまくいったのかい」

「もちろんさ。有事の際にスポミーを受け入れてくれるのなら、という条件があつたけどそれぐらいならね。あとの力仕事はダイゴさんの出番だよ」

「ああ、わかつてるさ」

余裕が出たからの悩みなのか。こんな少女でも交渉をまとめることが出来る。対し

て僕は力仕事しかできていない。そんなこと誰にだって。

「これはただの独り言だけど、ユウはどんどん先に進もうとしちゃうんだよね。アイは突拍子のない方向に爆進することが多いけど、その速度はユウ以上。でもね、二人とも危なっかしいんだよ。こけたらもう立ち上がれないくらいにさ。だからボクは支えながら走るんだ。たぶんルチアも。悩む暇があつたら走るのさ。じゃないと背中すらすぐに見えなくなる」

「…ありがとう」

「難儀な幼馴染さ」

リラ君は肩をすくめながら歩く。彼女たちも悩んでいるのか。悩みながらも進んでいるんだね。ならば僕も胸を張ってこのメンバーの一員と言えるように頑張らないと。

木々をメタングの念力で拠点まで運ぶ。

スポミーたちが木を切り倒すのを手伝ってくれて、昼過ぎにはアイ君のノルマを終えることが出来た。昼食を取り終え、ロズレイドたちに別れを告げ、拠点に戻る。

予定よりもかなり早く進んだ。これなら二人の手伝いもできるだろう。

そう思い拠点に戻れば、巨大な畑が緑豊かに実らせている。背は低い木々まで生えている。植物学の常識が崩れていくようだ。

一方ひとときわ目立つのは、二階建ての大きなログハウスだろう。しかもアイ君はすでに別の物を作成し始めているようだ。

「…ほら、追いかけていのある幼馴染だろう」

「…ああ」

「家具の配置はアイドルのわたしに任せなさい！」

僕とリラ君の声が震える。元気に走っていったルチア君が唯一の清涼剤だ。

9話 サバイバル生活3

全員がそろったため、一度結果報告をすることになった。

いつの間にか完成していたログハウスに入ると、内装はさすがに殺風景であった。

「内装なんてパソコン内の家具を適当に置けばよからう？」

「アイちゃんは黙ってて」

「むう」

アイには美的センスがかけている。どちらかと言えば機能性重視で、私の家で色が単色の部屋を作り、何も違和感を感じていないところがある。内装はルチアに任せればいいだろう。

大きな円卓の机にいすを並べて報告しあう。

「まずは私から。きのみは適量水を与えると数時間で回収が可能だね。回収後は枯れるけど。水を与えすぎても枯れる。感覚的では水を与えなくても1日で生える感じだね。あと特定のきのみを組み合わせて埋めると木になる。木は枯れることなく一日に複数きののみが実りそうだね。アイ、今度水を引いてもいいかな。何もしなくても適量の水が含まれる畑にしたい」

「任せるがよい。ついでにきのみを自動回収、自動栽培できる仕組みも作ろう」

私の成果について報告する。摩訶不思議きのみは生態も摩訶不思議であった。

リラから質問が上がる。

「ならすべてきのみのみなる木にすればいいと思うけど？ 効率はいいだろう。わざわざ収穫すると枯れるきのみを作る必要があるかい？」

「それも考えたけど、質があまりよくなさそうなんだ。質の高いきのみを作るには枯れる方のきのみ栽培が必須になる。適当に高級きのみって言うけど、こちらは薬などに木に実る方を食用にしたいかな」

あと高級きのみは味が尖りそうなのである。すべてが食用には向かないだろう。その分効果が高そうだ。

「なら次はボクから。交渉はうまくいったよ。緊急時にスポミーを匿うことになったけど、友好関係が築けるのなら安いものだろう」

やはり交渉はリラが一番である。このまま友好関係を深めていって、いずれ仲間に取り込みみたい。戦力も労働力も現状足りなすぎる。

「うむ。では最後は我だな。見ての通りログハウスは完成だ。現在はハイガニ対策にいそしんでいる」

「でも作っているのはパーツ的に水車だよな」

「うむ」

「????」

水車でハイガニ対策？私には訳が分からない。他のみんなも首をかしげている。いや、ダイゴさんは何かに気が付いたようだ。

「もしかしてだけど音かな？水中の生き物は視覚よりも嗅覚や振動による触覚を頼りにしている。うるさいものがあれば生活しづらく離れていく。さらに少し離れば弱い音につられて獲物が寄ってくるかもしれない。安全と食料調達の二つを合わせた策か！！」

「う、うむ。いやそこまでは考えては……ただ音は公害にも指定されるものだ。我が水車の音を水中だけに流れるようにすれば、我々も問題ない」

「「おお」」

なるほど、自信満々に言うだけのことはある。ただ問題が、アイがここまでプレゼンするんだ。何かしらの欠点はあるだろう。問題ないなら勝手につけているはずだ。ホウレンソウは最低限のやつなのだから。

「問題はハイガニたちが逃げるまでに、大勢で襲ってくることだろう」

案の定である。でも、放置できる問題ではない。

「いつからできる？」

「今すぐにでも」

私の問いにやりと返すアイ。時間をかければ何が起こるかわからない。ならば手早く安全を確保したい。

「やろうか」

「今回はスピード勝負の防衛線となる。ゆえにダイゴさんのメタングを貸してほしい念力により一瞬で組み立てて見せよう」

「かといつて電動ドリルでも使えば音でヘイトがそつちに向くよ?」

「参謀よ。誰がそんなものを使うといった。すべてはめ込み式さ」

「ズレがあれば時間がかかりそうだね」

「ダイゴさんよ。我にその心配は無用なり」

「結局何時間かかる?」

「盟友よ、三十分で終わらせて見せよう」

「さすがアイちゃん!!」

「であろう!!」

アイが言うのだから本当に三十分で終わらすのだろう。無茶だろうが無理とは言わなかった。ならばあいつを信じるだけ。

ちなみにダイゴさんはロトムを借りるようだ。

そして全員が所定の位置につく。私はサザンドラ戦以来の戦闘だ。隣のウインディに目を向ければ、信頼のこもった眼で返される。

まったく、私のところが一番激戦区予想なのに困ったものだ。というか、炎タイプに水タイプのヘイガニの激戦区を普通任せるのか？

信頼のあかしと受け取っておこう。

「なあ、ウインディ。今後あさのひざしを常時発動できるようにしないか？」

「わふ？」

「これからあのサザンドラを超える敵が出てくるかもしれない。対抗するにはこちらも異常個体を目指す他ない。ならば特別なことをしないとイケないだろう。私たちは全員の盾で銚でもあるのだから」

「ガウ!!」

無茶を言っている自覚はある。それでも今後生き残るにはどん欲に力を追い求めるしかない。だからこそ

「行くぞ!!」

「ガウ!!!」

私たちは川に飛び込んだ。

「かみなりのキバ。尻尾でアイアンテ、いやしんそくで距離を取れ」

ウインデイはかみなりのキバで噛みついていたハイガニを、攻撃してきた別のハイガニにぶつけて、しんそくで距離を取った。

噛みつきと足と尻尾で器用に戦うウインデイ。ただし多勢に無勢。

ハイガニの群れは数が多かった。群れを相手するときは囲まれないを第一と考えて行動する。危ないときは上空からチルットが助けることになっているとはいえ、余裕は見せない。どうしても体力温存の方針となる。

そうすると今度は殲滅力が足りなくなってくる。一進一退の攻防が続く。

そのまま場面は第二フェーズへ移行する。

「全員、組み立てが完了したぞ!!」

「!!」

アイの言葉に私たちは水車を囲うように防御陣形を取る。そして、ハイガニたちも目の色を変えて迫ってきた。公害音作戦は有効のようだ。

ハイガニの標的が私たちから水車に移る。この瞬間を逃がす手はない。

「ウインデイ! 群れの密集地帯にもえつきる!!」

「ガウ!!」

もえつきる。非常に強力なほのお技だが、代償として一時的に炎タイプを失う。タイプ一致が放てなくなるのは大きなリスクだ。ただしこの場合は違う。水タイプという明確な弱点がなくなるということだ。

さらにもえつきるによって、水面に大きな水しぶきが上がる。標的を見失ったハイガニたちが動きを一瞬止める。このチャンスは逃がせない。

「ウインディー！ワイルドボルト」

大技ゆえに隙も大きく反動もある。しかし、隙は動きが止まった今は問題なく、反動はあさのひざしで補える。

雷の閃光が走ればほとんどのハイガニたちは倒れていった。

このまま押していけるか、などと考えたのがフラグだったのか川底からさらに大きいザリガニが現れる。

ならずものポケモン、シザリガーだ。今の私たちよりも格上の雰囲気を出している。ならば、かみなりパンチ」

シザリガーの雰囲気に当てられたのか、ダイゴさんが指示を出す。いつの間にポケモンを元に戻していたのか？ただ安易に距離を詰めるのはよくない。

シザリガーの振り下ろしの一撃でメタングは川底にたたきつけられた。

たぶんはたきおとす。それにしても威力が高い。こいつの特性適用力じゃないか？

弱点を突けば、メタングすらノックダウンさせる一撃を持つシザリガー。ならばやることは一つ。全員での総攻撃。

「ロトムでんじは!!」

アイから絶妙な支援があった。

ロトムのでんじはがシザリガーに入る。これで動きが鈍くなる。

「ウインデイ！じゃれつく」

ウインデイが距離を詰めるが、シザリガーはまたしてもはたきおとすの構えだ。なるほど、麻痺ついても接近戦のカウンターならあまり意味がない。麻痺によるスピードの半減は問題ないようだ。もっと早く知りたかった。

カウンターの餌食になるぞ。

「チルル！おいかせ」

ここで絶好の手助けが入る。追い風により速度が上がったウインデイを、目測を誤ったシザリガーでは迎撃できない。じゃれつきの直撃が入る。

ただ相手も並みではなかった。じゃれつくを受けながらも今度は逆の手で攻撃しようとしている。今度はクラブハンマーか。

「浮上しろ！メタング!!」

ノックダウンはされていなかったか！タイゴさんの機転により、完全にメタングのこ

とは頭から抜けていただろう。ウインデイの足元からメタングが現れる。

ウインデイごと空へ上り、クラブハンマーをかわす。

「ウインデイ！メタングを足場にさらに空へ。そこからワイルドボルト!!」

ウインデイが私の指示通りにさらに空高く飛ぶ。位置エネルギーの合わさったワイルドボルト。当たれば一撃で落とせるだろう。当たればだが。

シザリガーも当然迎撃の構えだ。麻痺下では躲せないと判断したのだろう。

「おいおい。ボクたちを無視して空なんか見上げていいのかい？三方向からにどげり
！」

三色の一撃がシザリガーに突き刺さる。無防備な体に強烈な一撃が突き刺さる。

これで完全に体制は崩れた。

「いつけええええ!!」

空から雷の一線が落ちてきた。

「ガウー!!」

ウインデイの足元には倒れ伏すシザリガーの姿が。

ウインデイが勝鬨を上げる

ウインデイの一撃がシザリガーを沈めたのだった。

その後は大将のやられたヘイガニたちはちりじりになって逃げていった。

私たちは死体となったシザリガーやヘイガニたちを集める。このご時世、いただいた命を残すわけにはいかない。少々量が多いが、その日の夕食はザリガニパーティーとなった。

「うん、それにしてもなんで進化しているの?!」

「ブーイ?」

「シャー?」

「シー?」

そう、私は最後のにどげりの時しか見ていなかったが、イーブイ達がブースター、シャワーズ、サンダースに進化していたのだ。進化の瞬間見ていないんだけど。

「川で戦っていたら急に光るんだもの。ボクもびっくりしたよ」

「川底には進化の石がたまっているのか?」

「今の川の底にはどんな未知の石が…いこう。今すぐ探しに行こう!!」

「ダイゴさん!!もう日が暮れていますって」

「…なぜ私だけ進化の場に立ち会えないんだ。もう三回目だぞ」

結果として戦力アップになったのだから良しとしよう。

翌朝。

まだ日が上がっていない時間帯に、目が覚めると巨大な水車が三台並んで回っていた。その動力を使って、物を素早く均一に削る旋盤や空気を送り込むことで製鉄するかまどや巨大なガラス瓶に金属の板が入った旧式の電池が繋がっている。電池の先には、まだ製作途中の鉄のタワーが出来ていた。

うん。一晩で何が起きた?!

「おはよう盟友。どうした? 打ち上げられた鯉のような顔をして」

「いや、おま、これ」

「ああ、すまん。この電波塔を完成させてから見せたかったのだが、さすがに眠くて。また起きたら続きをするのでな。我らの第二段階に進む時がもうすぐ来るのさ」

私たちの第二段階。生活基盤が出来たら全国にポケモンの情報をお届けする。

もちろん目標にしてはいたけど、ポケモンパニックが始まってから、まだ5日目なんだけど…。

やっぱりチートだ。チーターや。

10話 小話

ザリガニパーティー

ヘイガニ掃討を完了したところ、私たちは大きな問題に立ち会うことになった。

「どうやって食べよう?」

水から引き上げたヘイガニは数十匹に上る。一匹一匹が大きいため、山のようになっている。こんなご時世である。放置はあり得ないし、全部食べてあげたい。

「ふむ。これだけの量だ。火の問題は我に任せろ」

「そんなこと言つて逃げ…もう居ないんだけど! アイちゃん!!」

ピューなんて擬音語が似合うぐらいの逃走術である。それを見たルチアが憤慨しているが、さもありません。

ただ、このままではいられない。さすがに生では食べられないため、処理が必要となる。

「さて料理やりますか」

「…おー」

今までで一番心のこもっていない返事であった。

幸いというべきか、比較的川がきれいなためかヘイガニそのものが泥を体内に入れないのか泥臭さはなかった。ただ、ポケモンの調理は我々の想像を超えていた。

「ギャー!!目が！デカイ！白い！」

「落ち着けるチア。魚だと思え！魚も目が大きいだろ」

「イヤー！」

「この大きさじゃあ、鍋には入らないな。部位ごとにカットしないと」

「ダイゴさん。領いていないで手伝ってください」

「っう。僕は初めての料理なんだけどなあ」

「ユウ。新しい包丁貸して」

「おう。…て、リラ！目が死んでるんだけど」

「アハハ。ナニヲイツテイルノカナ？」

なんだかんだと、調理が進んでいく。一番の問題は外皮が固く包丁が入りづらいことだろう。結局ポケモンたちの力を借りることで、下処理が完了した。

人の力は無力なり。

「皆の者ども！ご苦労!!」

「ほんとだよ!!」

「おいし〜」

塩ゆでにされたハイガニたちは、さらに鮮やかな赤色になり、その味はエビに近かった。

ハイガニではなく、ハイエビとでも改名するべきだろう。姿もエビだし。

野生動物を狩る経験は、このような状況になると考えていた私たちは獲得している。ただ、本当に命のやりとりをした生き物を食べる経験はない。

何とも言えない感情がこみあげてくる。こうして生きていくんだなあ。

「一匹で十分なんだよね」

リラの言葉に現実に戻される。後ろには山になったゆでられたハイガニたち。これを私たちで消費するのは無謀だろう。

「ご近所に配ろうか」

「それはドクケイルやスパアーにも?」

「良き隣人に成る可能性は捨てたくないからね」

友好的なロズレイドたちにはルチアが、関係の薄いドクケイルたちにはダイゴさんが、敵対的なスピアーには私とリラが配りに行くことになった。アイは居残りで住居の拡張に努めることになった。

「他のみんなは大丈夫かな」

「私たちが一番危険だけどね」

アイ特注のリアカーにヘイガニをのせスピアーの住処に向かう。これで友好的になれば儲けものだろう。そんな期待と不安を感じながら歩いていると、数匹のスピアーが向かってきた。哨戒だろうか。一匹のスピアーが他のスピアーを引き連れている。ずいぶん組織的な動きをする。

私は前に出て交渉する。

「私たちはそこに住んでいる人間だ。食料を手に入れたので分けに来た。君たちとは有効な関係を築けたら嬉しい」

「ブーン」

スピアーたちは警戒を緩めることはなく、それどころか戦意を高めているように見える。それに反応してウインディたちも戦闘態勢に入っている。

結果は分かり切っているが一応、ポケモンの気持ちのわかるリラに聞いてみるとしよう。

「…リラ。なんて？」

「ボクたちも餌に成れってさ」

「残念だなあ!!!ウインディほえる！」

「ガウウ!!」

「ボクたちはスピードスター」

一気に攻めてこようとするスピアーの氣勢をそぐように、ウインディのほえるがささる。そこにブイズのスピードスターが敵全員に当たる。キラキラした星は目くらましにもなる。

「ユウ！殺したらだめだよ！弔い合戦になる」

「わかっている！ウインディ、ほのおのうずで足止めを」

「僕たちもまねっこでほのおのうずを！」

四つのほのおのうずがリーダー格のスピアーたちを包み込む。他のスピアーも動かさない。

「逃げるぞ」

「うん」

荷物は捨てることになるが、命には代えられない。今はまだスピアーに敵対できる準備はできていないのだ。残念だがここで今回は終了のようだ。

うまく退散できた私たちは、他の仲間に合流することが出来た。ダイゴさんも問題なく渡せたようだ。お礼にきのみを貰っている。

問題はルチアだろう。

「なんで一番友好的なところに行つたルチアのチルツトがチルタリスになつていゝんてすかねえ!! 戦つたのか!」

ふわふわな羽をもつ、はみんぐポケモンチルタリス。ルチアは苦笑いをしている。

「いやあ、急に戦いたいつてき。たぶんこちらがもうすぐ進化することが分かつたんじゃないかな。お礼らしいよ」

「すごいね」

「なんでユウは悔しんでいゝるんだい」

「盟友はいまだ直接進化を見れていゝないからだろう」

「チクシヨー!!」

一番進化が見やすいと思っていたのに。私の無意味な叫び声が響いた。

探索

「さあ！みんな!!石探検の時間だ!!!」

ヘイガニたちと撃退して一日たった後。ダイゴさんが元気よく宣言する。朝食の席なので落ち着いてください。

「土産に期待しているぞ」

仮眠をとったアイは無慈悲に宣言する。というか今日も4時間も寝ていないんじゃないか。いつか倒れるぞ。

「アイ君！未知の石が眠っているんだ!!」

「ダイゴさん。もうすぐ完成する電波塔に電気を家具に使えるようにする変圧器。向こう岸にかかる橋づくりと、我は暇ではなんだがな」

「でも「はいはい。大きな子供にはボクが付き合いますよ」リラ君」

進化の石が川底にあると知ってから、たびたび目線が川に行っていたのは知っていた

が。なるほど予想以上の石好きだな。3月の水温は、かなり冷たいぞ。

そしてアイは、相変わらずモノづくり。向こう岸は広い平地にその先は森となつてい
る。何が住んでいるか不明だが、平地に姿を現さないとところを見ると、森にすむポケモ
ンがいるのだろう。平地は私たちが有効利用させてもらう。平地にあるフットサルの
コートはポケモンバトルに最適だと思つていた。

「わたしは新作の歌の練習をするとして、ユウは？」

「私はこのあたりの地理を確認してくるよ。大丈夫無理はしないさ」

現状私はあまり周りを知らない。ポケモン出現前はまだわかるが、ポケモンの影響が
どこまで現れているかわからない。特に私は意識を失つてここにたどり着いている。
今後の事を考えると、直に見ることも大事だろう。

アイ、だからつて無言でバックを押し付けてくるな。いろいろなものを拾つて来いっ
て？え、入れたものがパソコンに繋がるようになってる？

おまえ、いつの間にそんなものを。

「お、青いイチゴだ。チーゴの実だっけ？にが!!!」

ウインディを伴つて、林をめぐる。時々実つているきのみを収穫していく。一応検査

を行っているが、さすがにきのみの味までは覚えていないので、このようにイメージと異なる味に驚くことがしばしば。一応毒対策にももんの実を持ってきているが、甘いももんのみは、もつばら口直しに使っている。

探索のほうも順調であった。中でもスピアーの巣が発見できたのは大きいだろう。遠目から見たらただの木であったが、よく見ればハチの巣ならぬハチの木であった。双眼鏡を覗けば巣をうじやうじやとスピアーが動いていたのは鳥肌が立った。あの数を支える食料はどこから来ているのか。人の頭蓋骨らしきものが転がっていることが答えか。いやになってくる。

ただ、統制が取れすぎているのは気になる。ポケモンは人に友好的や無関心が多い中、あれほどの数が人と敵対している。すべてのポケモンが人間と友好的とは言えないが、人を積極的に襲うのはスピアーのリーダーがそういう性質なのか。スピアー攻略にはそこがカギになりそうだ。

「…」

上流に行けば私たちは無言になった。そこにかかっていた大きな橋は完全にぐずれていた。いやな記憶がよみがえってくる。

あれほどの存在が人を襲っているのだ。今も被害があるのか、傷を癒しているのか。

いずれ雌雄を決さなければいけないだろう。

決意を新たに、崩れた橋を越えていく。

半日ほどかけて、あたり一帯を確認した。残念ながら人の生存者には出会うことはなかった。まあ、いたとしても息をひそめているだろう。そう簡単に出会うことはなかった。

一方廃墟を歩いていると野生のポケモンも少ないように感じた。むしろ自然の多い場所のほうがいるように感じる。少ないだけでいけないわけではないので、相棒を連れて行かないとあつという間に蹂躪されるだろう。

町の中は餌が少ないのか飢えたポケモンが襲ってくる。今のウインディには鎧袖一触であった。きのみが食料としてあるため、積極的に命を狩ることはしない。

こんな世界なので、逃げたポケモンが他の人を襲ってもそこは自己責任で考えている。ドライかもしれないが、関係のない人とポケモンとの関係で比べれば後者に傾く。彼らを殺して別のポケモンが縄張りにするぐらいなら、私に畏怖を持つているポケモンが近くにいたほうがいい。

「ウインディ。かえんぐるま」

今もグラエナが吹き飛ばされる。いくら進化していても骨が浮き出ているポケモン

にウインデイが押し負けることもない。

さつきと立ち去ろうとすると、茂みから数匹のポチエナがグラエナを囲んで威嚇してきた。そのポチエナも痩せている。なるほど、事情は把握した。

私はため息をつきながら近づく。

「ガ!!」

「大丈夫だよ。これでも食べなよ」

私がいくつかきのみを差し出すも警戒心から口にすることはない。口からはすごい涎が出ているが。

「私もリーダーをやっているんだ。仲間を守るのは大変だよな。いずれ何かで助けくれたらいいよ」

私が少し口にして毒がないことを見せて差し出せば、ポチエナたちは群がってきた。そのまま私の顔までなめてくる。

「はいはい。お前も食べなよグラエナ」

ポチエナたちを撫でながら、グラエナに促す。

そうしてグラエナもきのみを口にする。よかった。

おい、ウインデイ。なんだそのあきれた目は。そう、これは、あの……………。

その後近くの空き地にきのみの木をいくつか植える。これで食糧事情も何とかなる

だろう。誰かを守るためには、人もポケモンもどこまでも非情になれる。定期的な食料があれば彼らも人を襲わなくなる。だからこれで正しかったのだろう。そうなのだ。だからいい加減その目をやめてくださいウインディ。

反対側の森にも入ってみた。ここはミツハニーしかいなかったのは印象的だった。ミツハニーたちは友好的で、きのみと蜜を交換までしてくれた。ただ、ボスのピークインは何やら女王体質で、偉そうであった。これではほどほどの関係で収めたほうがいいだろう。

ちなみに持ち帰った蜜は女性陣に没収されました。まる。

帰るときはいつの間にかできていた木の橋を渡った。即興で作ったはずの橋は丈夫で、ちよつとの事では壊れそうにない。

そうやって帰れば何やら外で怪しげな踊りをしている4人を見つけた。何してるの？

「帰ってきたか盟友!!見よダイゴさんのお土産を」

「なんだ、つてこれキーストーンか!」

「こちらにはメガストーンもな!!」

「本当か!? 複数あるぞ! …でもこれ無色だぞ」

「考察するに本当の初めはこういうものなのではないか? 身に着けていればいずれメガシンカに至るとか?」

夢が広がる。メガシンカは絆の力が十分にあれば、リスクを減らして使うことが出来る。

メガストーンもキーストーンも数は十分ある。他にも進化の石が複数そろっている。この川がすごいのか、それともすべての川がこうなのか。これは大発見だ。

「勘違いしないでくれよユウ。ボクはこのリーフの石一つしか見つけてないからおかしいのはダイゴさんらしい。」

日本事情

ついにインターネットに接続することに成功した。やはりアイはチートの塊である。

その日の夜は集まって、一番気になっている現状の情報収集になった。

「さて順番に説明していこう。ポケモンに有効な手立てを打てた場所は無し。あとたまたにポケモンの名前が挙がっていることから、他の転生者が頑張っているところもあるようだ。日本政府は東京から撤退して東北に拠点を置いていているらしい。いち早く逃げたので不信感はずいいな。なぜ東北なのか」

「あー。私が堅牢な拠点を作つたからかな。こういう使い方をされるとは思っていないかつたけど」

「なるほどな。東北にいるポケモンは山を主に生息しているので、人里の被害は今では少ないようだ。反対に食糧不足で関東はかなり混沌としているな。人同士の争いもあるようだ。近畿は何やら転生団とかいう集団が牛耳って好き勝手やっているらしい。まったく。四国中国もあれているな。ここ九州は細かいグループが分かれている現状だ。よく分からないのは北海道だな。常に雪がふぶいて人とポケモンが協力して何とかしているようだ。ある意味一番平和か？」

「わかつていたがかなり混沌としている。早めに何とかしないと人とポケモンの間に溝が出来てしまう。」

「私たちは第二段階に移行し、全国に正しい知識を与えていく。幸い私たちにはロトムという図鑑を内包したしゃべれるポケモンがいる。これで信憑性は上がるだろう。アイ、ホームページの作成と情報のアップデートを」

「問題ない」

「ルチア、君の存在が視聴率に直結すると思って」

「わたしはアイドルだよ！」

「リラ、引き込むような台本をお願い」

「まったく。無茶を言う」

「ダイゴさん。子供の私たちでは信頼性は得られにくいでしょう」

「僕もまだ高校生だけどね。任せてよ」

「みんな、私とアイのわがままに付き合ってくれてありがとう。これからもよろしく」

「二おう!!!」

11話 配信開始

ついにこの時がやってきた。ポケモンパニック7日目。予定よりもいささか早い。昨日一日を準備に当てて今日を迎える。後はやるだけだ。

「さあ！丸太は持ったか！」

「持っているわけではないですよ」

私たちは以前から持っていたアカウントを使い、事前に告知を行っていた。その成果もあり、生放送の待機所では1000万人が待っている。途中で処理落ちしないか、これ。

これはルチアの知名度だけでなく、告知の概要欄に貼ってあったリンク先にある自作サイトで、ポケットモンスターの情報を惜しみなく公開していたからだろう。

ポケモンについてや、ポケモンの種類など今必要不可欠な情報盛りだくさんになっており、わざと具体的な信憑性は書いていない。注目度は抜群である。ちなみにわざと伝説の情報は省いている。今後のことを考えると悪の組織の温床になる事柄はできるだけ省いていきたい。

画面が付けばコメントが一気に流れてきた。しかし、画面には誰も映っていない。

初見は？などコメントしているが、昔の動画を知っているものには見慣れた光景だ。ルチアの登場はいつも派手だからだ。

「キラキラ〜くるくる〜？つて、ルチアが登場!!」

今回はカメラの後ろに台を置き、そこを踏み台に前転を行う。着地もポーズも完璧。これよりハーサルの一回だけで成功させるのだから、さすがの一言だ。

『きちゃ』『ルチアちゃんだ』『生きてた!!』『キラキラ』『くるくる』『また会えた』『うお おおお』

つかみはばつちり。元気はつらつな10歳は友好的に迎えられた。

「元気な人も、そうでない人もルチアが元気にしてあげるから。今日の生放送もよろしくねえ」

ああ、リラが頭を抱えている。確か台本はみんなにまた会えてうれしいみたいな内容だったはず。こんな世の中だ。できるだけ刺激の少ない言葉で台本を書いていたはずだ。

まあ、ルチアが台本通りにしないなんていつものことだ。いい加減なればいいのに。

「さあ、飛ばしていくよ！みんなも気になっているメンバーも紹介だ！まずは 우리가

リーダー」

ギユイイイン

ギターを鳴らしながら私が入っていく。こんな世の中で実名を隠す必要はないと思うが、前の雰囲気を残すためにあえてリーダー呼びだ。最初に投稿した動画では、私の呼び名はトレーナーだったはずなのに、いつの間にかリーダー呼びに代わっていたのは、いまだよくわからない。インターネットの闇である。

「続いて我らが技術屋！魔女っ娘」

『閣下！』『閣下来た！』『オールハイル閣下！！』

「閣下違うわー！」

憤慨しながら、アイが入ってくる。なにやら口上を考えていたらしいが、視聴者の反応にいちいち突つかかるアイはこの登場がデフォルトになっている。尊大な物言いが原因で閣下などと言われているが、悪意はないためじゃれ合いですんでいる。

アイが後方に陣取り、バックからそれ以上の大きさのピアノを取り出す。コメント欄は何やら騒がしい。

「まだまだ行くよー！我らが参謀!!」

『いや』『え？ピアノが』『お前ら平伏しろ！』『ははー』『ハハー』『hahaー』

「なんでボクの時はこのようになるんだい」

頭を振りながらギターを背負いリラも入ってくる。過去に暴走するルチアとアイを何度も止めていたら、こんな反応に落ち着いた

「続いて新メンバーのストーンだ」

「よろしくね」

『イケメンだ』『もげろ』『高校生くらいか、ロリコンか?』『ロリコン?!』『ルチアちゃん
は渡さない』『リーダーは渡さない』『シヨタコンか』『ストーンは閣下』

「誰のどこがストーンだ!!」

「ロリコン呼びは勘弁してほしいな」

さわやかな笑顔でダイゴさんの登場だ。大きなドラムを運びながらコメントは軽く流す。むしろ憤慨するアイに焦点が集まっていく。配信慣れしていないダイゴさんを庇う立ち回り。いや、素か。ちなみにストーンは石から来ている。

新メンバーも増えたが昔の雰囲気というか流れが色濃く出ている。過去にこだわっても仕方がないが、少しは安心感が出ただろうか。

「じゃれ合いはその辺でね閣下「参謀よ!誰が閣下か!!」ルチア」

「うん!みんな気になることはいっぱいあると思うけど、まずは聞いてください新曲『a
cacia』!!」

『新曲ギター』『待っていました』

アイドルとして大成したルチアの原動力の一つ。私たちの前世の曲である。これだけでなくも大成したと思うがインパクトはあった。前世の名曲ばかりでデビュー曲は紅蓮華である。アニソン中心は仕方がない。私はしがないオタクなのだ。

かなりズルをしているが、いずれ起こるポケモンパニックで消えるくらいならと自重なしで行っている。

コメントもおおむね好意的だ。中にはこんな時に歌うんじゃないなどと批判的なコメントもあるが、すぐに消えていく。

『oooooooooooo』『oooo』『感動した』『いい曲』『さすがリーダー作詞作曲』

最後のコメントに罪悪感がマシマシになる。それでもこういう時に元気づける曲としてあたためた甲斐があった。

「それではルチアたちが手に入れた情報を公開していくよー！概要欄から飛べるサイトに詳しく載っているからみんな見てね！」

『早速来た！』『そうだよポケモンって？』

「うんうん。さあ来てロトム」

「ロトー」

いきなり現れたロトムにコメント欄が阿鼻叫喚だ。ポケモンに対する恐怖感は一週間程度では消えない。過激なコメントは今すぐ殺せなどもある。

「この子はなんと日本語がしゃべれます。理由は閣下のスパ―技術です」

「閣下言うな!! まあ、我にかかれれば、造作もない」

「ちなみにこのロトムっていうポケモンの能力が大半だからね。みんなもできるかも? じゃあお願いロトム」

「任せるロト―」

ちなみに今回の配信はできるだけ女性陣が司会進行を務める。安心感の差というやつだ。

そしてそこから語られるのはポケモン側から見た現状の説明だ。私たちからしたら既存の事実だが、世間一般からは初情報の連続だろう。後でサイトを見れば見返せるので、まずは情報の波で視聴者を飲み込む。理解できない化け物と理解できるポケモンとは恐怖度が違う。できるだけだけ出せないような流れにしていく。反対意見はできるだけ出せないような流れにしていく。

『ふざけんな化け物ども! 今すぐ消えろ』

まあこういうコメントは必ず来る。あの恐怖は簡単に拭えるものではない。

だからこそ、わざと陰に徹していた私が大きな音を両手で上げて画面の中央に移動する。

これで注目は集まった。女性陣もスウッと画面から抜けてくれる。ここからは私の

出番だ。

「いまのロトムの話は聞いていたと思う。彼らにも原因は分からないのだ。もしかしたら人間が変な実験をしたのかもしれない。ポケモン側が何か力行使したのかもしれない」

まあ実際はただの天変地異なのだが。それを理解できるのは転生者以外居ない。だからこそ勝手な推測も許される。

「原因の所在なんて誰にも分らないんだ。起こったことに何か言っても、どうしようもない。重要なのはこれからだろ。家の中にこもって日常が返ってくるのを願うだけなのか？彼らは認めてくれれば良き隣人に成ってくれるぞ」

私の合図でウインディが私に近づく。ウインディの頭を撫でれば気持ちよさそうに鳴いてくれる。

ウインディの体は大人に匹敵する。はまだ10歳の私の倍はあるのだ。顔もいかつい。そんな存在が仲良くしている。印象に残るだろう。

「確かに私たちの出会いは最悪だった。だからと言って迫害が正解なのか？戦争が正解なのか？私たち人間は考えられる生き物だ。ここで思考停止するのが正解なのか？違うだろう。私たちはこれからポケモンたちと仲良くしていく。たとえば道半ばで倒れることがあっても」

「はいはいー！いったん休憩ねー」

一拍おいてルチアがカメラにドアップで映り、笑顔で手を振る。
映像は待機画面になる。

『すごい小学生だ』『小学生なんだよな』『かつこいいな』

コメントは好意的な意見が多い。否定的な意見がないわけではないが、口に出しづらい空気になった。ここから第二部に入る。野生のポケモンとの付き合い方など私たちが実践してきたことを見せる予定だ。サイトの投稿欄に情報共有を求めている場所もあるし、これから様々なポケモンとの付き合い方が生まれるだろう。良くも悪くもこの配信で大きく変わることになるはずだ。

ちなみに、ロトムの説明の終わりに否定してきた意見と最後の待機画面の初めに私を称賛した意見は自作自演である。さすがリラである。わざと目立つようにして、さらに小学生が中心になっているように見せることで裏がないように見せる。汚い。

12話 配信開始2

「はいはい。休憩終了！じゃあ早速行ってみよう」

リーダーのコーナー

「いきなり私か。あんなことがあった後だというのに。まあ、台本を逆らう必要もないか」

「こちら！メタいこと言うな」

いきなり私の出番となる。休憩中にグダグダして離れそうになる視聴者を引き留めるには、インパクトが必要だ。

「さて、食料確保のために歩き回った者たちは見るからに色の悪いきのみを見つけたと思う。これもポケモン世界に由来するもので、そのまま《きのみ》と呼んでいる。私たちが発見したものは概要欄のリンク先に載っているので、詳しくはそちらを見るとして今回は重要な効力の物をピックアップしていこう」

そうして机の上いきのみを並べていく。カラフルな色にコメントの勢いも減少気味だ。まあ、見るからに食用ではない。

「右からオボンの実、オレンの実、カゴの実、キーの実、クラボの実、チーゴの実、ナナシの実、ヒメリの実、モモンの実、ラムの実だ」

『まずそう』『明らかに毒物』『え、食べるの?』『見たことある』『食べ物?』

コメントはほとんど半信半疑である。

「もちろんすべて食べたとも。ここに見せていないものはかなり尖ったものもあるので気を付けてほしい。味はオボン、オレン、キー、ヒメリ、モモン、ラムあたりが無難だろう」

『つまりリーダーはこれを食料にすべきと?』

「ああ、今コメントに合った通りきのみ力は素晴らしい。水を与えずとも1日で収穫可能である。水を与えると収穫が早くなるが、水を与えすぎると枯れるよくわからない植物だ。最適水量は載せてあるので確認するように」

『さすがリーダー』『この短期間で水の量まで』『これで食糧問題がなくなる』

「栄養などは学者さんが調べるだろう。安全性はよくわからない。少なくとも短期的には問題ないと思う。学者さんお願いします」

たぶん安全だろうが。混乱するものもあるが、すぐに回復したし。その混乱も歩けなくなるほどではない。少し酔った感覚だ。

この世界の人の体は意外と丈夫だ。最強クラスの毒キノコ：カエンタケを丸呑みし

て、腹痛ですむのがこの世界の住人である。

「それより注目すべきは効果だ。特にこのオボンの実は複雑骨折を治すほどの回復能力を与える。まさに医者いらずだ」

「リーダー。君の複雑骨折は添え木したりと最低限の知識は使ったからね」

「だそうだ。私は気絶していたからな」

『やば』『さらつと流したけどリーダー大げがじゃん』『え、大丈夫?』

心配のコメントが流れていく。何があつたかを聞くコメントもあるが、そこは今は無視させてもらおう。

「私たちも平穏とはいかなかつただけだ。さて次は……………」

参謀のコナー

「ボクはポケモンと仲良くなる方法と行こうかな。一番手つ取り早いのは力の差を見せることだね。従えば強くなると認めさせれば、仲間になつてくれる。ただ人知を超えた力に生身で挑むのは無謀だろう。だからまずは友達になる方法かな」

『…友達』『…人間強度が下がるから』『ボ、ボツチじゃないし』

「君たち、わざわざ点々をつけるあたり、実は余裕がないかい?ごほん。最初は小さなポケモンをお勧めするよ。大きなポケモンは力を求めることが多いけど、小さなポケモン

は餌を取ることにも一苦労さ」

そういつてリラは足元にいるブースターに目線を合わせる。

「ポケモンは確かに人間以上の力を持っている。かといって自分の何倍も大きな生き物に無警戒とはいかないのさ。それが彼らの生存戦略だからね」

リラはオボンの実をかじり、残りをブースターの足元にきのみを置く。そのまま少し離れる。

「直接渡すのはNG。まず自分で食べて安全なことを見せる。食事時は無防備になるからちよつと離れる。ここからは我慢の時間だね。食べてくれれば少しは信頼してくれる証さ。後はスキンシップなどで距離を近づけていけばいい。あーたべていいよ」

「ブー」

ブースターがきのみにかじりつく。そのブースターを愛おしそうにリラが撫でる。

「ポケモンは賢い。だからこちらが誠意を見せれば誠意で返してくれることが多い。例外もあるけどそれは人間も同じだろう？だから「シャー！」「シー！」ちよ！今配信中！顔舐め「ブー！」こらブースターも」

『ぱんつが』『見え』『見え…ない』『変態どもが』

こらえきれなかったようでシャワーズもサンダースもリラに飛び込んで行った。事前のリハーサルでは一番我慢強かったブースターに決定したが、我慢できなかったよう

だ。もともと彼らはリラが大好きだ。きれいな画面映えを気にしたリラの負けだろう。結局わちやわちやしている。

コメントも小動物と子供の戯れとして、微笑ましそうにしている。

「リーダー助けて」

「さて、次行ってみよう」

「裏切者ー!」

ストーンのコナー

「僕のコナーは摩訶不思議な石たちを紹介しよう。きのみと違ってすぐ必要なものではないけどね」

ダイゴさんはそう言って袋から進化の石を取り出す。

「ポケモンたちには進化と呼ばれるパワーアップ方法があるんだ。この石たちはその進化を起こさせるものだね。ただし、進化条件が石ではないポケモンのほうが多いから、詳しくは僕たちのホームページを見てね。」

『進化?』『一世代で進化とは?』『成長では?』

「当たり前前の疑問だね。例えば僕のメタング。一度進化しているけど、進化前はこんなんだったよ」

ダイゴさんのセリフと共にダンバルの写真が写される。

『別物じゃん』『これは進化』『変身だね』

「全く別物なのさ。ちなみに進化したては、体が大きく変わるから満足に動けない。でも進化出来たらその戦闘力は大きく向上する。戦闘経験で進化するものはいいけど、知識がないと石進化はできないからね。これを教えていこうと思う。まずは……」

閣下のコーナー

「おい誰だ勝手にテロップを書き換えたのは!!」

「わたしだよー。閣下って呼ばれるのわかっていたじゃん。こういう運命だよ」

『閣下来たー』『どんな摩訶不思議を見せてくれるんだ』

昔からアイはいろいろやらかしている。謎の安心感がある。

「ツチ。ではまずは刃物一本でできる簡単工作からだ。ナイフがないものは後日見返すんだな。では早速、人類に最も大きな英知を与えたものは何だと思う？ 答えは火である。ゆえに簡単に火が出せるファイヤーピストンを教えよう」

火があれば食糧事情は大きく変わる。生肉を食すほど人の体は強くない。

「まずは木の棒を用意して、こうして、こうして、ここを切って、完成だ。後は木くずを入れて押せば火種ができる」

『できるかー!!』『早すぎる』『なんて早い手さばき、俺でも見逃しちゃうね』『暗殺者い
て草』

ほんの数秒で出来上がる。これをまねしろは無理だろう。やり直し。

「むう。ではもう少しゆっくと………」

ルチアのコーナー

「わたしのコーナーは少し違うんだ。これはみんなにお願い。ポケモンには後天的に特別な力を得た通常種とは違う異常個体が現れることがある。その情報をホームページから教えてほしい。写真だけでもいい。オンリーワンのポケモンはわたしたちもまったく情報がないから」

『希少種か』『一狩り行こうぜ!』

「絶対やめてよ!わたしたちが会った異常個体は本当に恐ろしかったんだから。あれが特別なのか、異常個体がすべてそうなのかはわかんないけど。自衛隊の人たちが一蹴されてたんだから」

『マジ?』『しよ…証拠は?』『銃があるでしょ』『私の避難所。ポケモンを銃で追い返しているんだけど』

「映像あるけど見る?けっこうグロいよ。今からは自己責任ね」

最後のサザンドラの残虐性はカットしたが、まあOUTだろう。あいつはヤバすぎる。

『ヤバ』『なんていうか、生物として格が違う』『銃効かないじゃん』『自衛隊が情けないなんて言えない』『むしろよく戦った』『家から出られないじゃん』

「情報がないことが一番ヤバイ。わたしたちはこいつの住処も大体の行動範囲もすでに把握している。決して入らないようにしているから安全なんだ」

所詮大体の場所であるが、間違っていないだろう。一定範囲から一切生物の気配がなくなるのだから。怖くてそれ以上進めていないが。

『むしろルチアちゃんはどうやって助かったの？逃げれたの？』『バカ、逃げれなかったら配信していないんだよ』『隙ついて逃げたんだよ』

「そんなわけないじゃん。こんなヤバいのからただで逃げれると思う？リーダーが困ったんだよ」

『さすがリーダー』『そこにしびれる』『あこがれる』

「あんまり茶化さないですよ。本当にぎりぎりだったんだから。さつきリーダーが複雑骨折したか言ってたけど、そんなレベルじゃないからね。ウインディに背負われてきたとき、両手両足は変な方向に曲がっていたし、頭から血を流していたし、本当にヤバかったんだから」

コメント欄が絶句している。正直意識がなくてわからないんだけど。

「きのみ利点が実感できたと言っているけど、生きた心地がしなかったんだ。だから情報が欲しい。本当にお願ひします」

真摯にルチアが頭を下げる。誠意は伝わるだろう。

この配信の裏の目的。異常個体の発見。ホームページには伝説などは情報に入れないが、彼らの位置情報が分かるだけでもいい。とにかく情報が足りてないのだ。

『任せろ』『ちょっと行ってくる』『先を越されるな』

「でも慎重にね！本当に……もう会えないなんて寂しいんだから」

『『『イエスサー!!』』』

あの時の私の状態を思い出して、涙目のままそんなことを言えば、イチコロだろう。

私も不覚にもときめいてしまった。

あつ、目薬もってやがる。

「さてさて、濃密な時間をみんなと過ごしてきたね。役立つことも役立たないこともあったけど「おい！チラ見するな歌姫！」みんなが精いっぱい生きてくれる手助けにな

ればいいな！名残惜しいけど最後のコーナーにして最大の企画！ポケモンバトル!!」

コメント欄が？で埋め尽くされるが、ここは勢いで行く。子供が戦うという拒否感を与えたくない。

「ポケモンが戦闘本能を持っていることはロトムの説明であつたけど、それを解消しつつコミュニケーションを取れるのがポケモンバトル！さあ！時間も押しているし早速レッツゴー」

笑顔のルチアがアップで指をさす。そのまま橋を渡るとフットサル場が現れる。事前にゴールはどけてあるので、ある程度の広さが確保されている。

私とダイゴさんがそれぞれゴール跡地に歩いていく。お互いに振りむけば準備完了だ。

「映像に残るのは初でしょう！ポケモントレーナー同士によるポケモンバトル。あなたは歴史の証明者になる!!審判は参謀！実況は私ルチア。解説は閣下がお送りします」「おい」では審判!!」

「バトル開始」

「ウインディ！君に決めた！」

「メタング！行け！」

13話 配信開始3

「ウインディ！かえんぐるま」

「メタングー！しねんのずつき」

お互いの技がフィールド中央で炸裂する。炎が念の力により散る姿は、地上に現れた花火のようだ。派手である。

さて、この開幕だけは派手な激突として直接相手にぶつけないように練習した。これ以降はお互い真剣勝負だ。

『さて始まりました、ポケモンバトル。開幕派手な一撃がぶつかり合うも両者消耗した様子は無し。むしろ審判の参謀が危険では』

『問題ないだろう。彼女の周りには護衛が三匹いる。特にシャワーズは防御能力に秀でている』

『なるほど』

ちゃんと解説しているようだ。それにしてもマイクがなぜある。増音機は木製だから手作りか？

おっと、試合に集中せねば。

「ウインディ。メタングの周りをまわりながらかえんほうしやを散発的に」

「サイコキネシスで迎撃」

素早さはこちらが勝っているので、攪乱と牽制行う。お互い物理よりな為、決定打にはならない。ただメタングは嫌だろう。この世界、効果抜群は精神的にも負荷をかける。

『さー！早速地味な展開だぞ！取れ高早く！』

『一概に責めるな。タイプ相性を考えればこうなる』

『と言いますと？』

『先ほどからウインディ、犬のポケモンは炎ばかりで攻撃している。これがメタングには苦手でな。通常の倍はダメージが入る』

『えー！そしたらリーダー有利じゃん。卑怯者！』

『詳しくはタイプ相性を見てほしい。ただ、卑怯とは言えない。あのメタングはウインディに対して相性のいい技を習得している。ただどちらのポケモンも接近戦が得意だ。隙を作る牽制は必要だろう。お互いに試合を決めうる切り札を持っているんだから』

『同じ絵面じゃ面白くない！』

まったく見ている側は気楽でいいな。こっちはじしんが来たらダメージ大で、さらに足元が不安定になり次の一撃を貰う可能性があるんだぞ。

ただ画面映えないのも確か。こちらから動きますか。

「ウインディ、だいもんじ」

「メタング迎撃を」

大技を使う。ただだいもんじは命中不安技だ。ゲームで大事な場面で何度外したとか。ただここはゲームじゃない。練習すれば必中も夢じゃないが、私はあえて相手の前に広がるように指導している。これなら外れても思惑は達成できる。

面全に大きく広がっただいもんじをメタングのサイコキネシスが散らす。ただ炎が視界いっぱい広がったためメタングはウインディを見失った。

「フレアドライブ!!」

「メタング!」

だいもんじの陰に隠れて接近したウインディの一撃が直撃する。ゲームセットか? いや、違う。

「ウインディ! しんそくで離れろ」

「メタングがんせきふうじ!」

がんせきふうじは躲せたが、距離が離れてしまった。

煙が晴れば、無傷のメタングが姿を現す。その周りにはうつつすらとエネルギーがメタングを守っている。

まもるは間に合わないと思っただけだな。

「一体どうやって」

「説明は負けフラグだけど。無駄にサイコキネシスを連発したわけじゃないのさ。おかげでこのあたりにサイコパワーというべきものが充満している。こうなれば僕のメタングは通常よりも素早く大きな力が出せるのさ!」

なるほど向こうも謎の理論を振りかざしているのか。するとメタングの頭上にいくつもの岩が浮かびだす。

「メタング! がんせきふうじ連打!!」

「落ち着け! 右! 左! 前! 後ろ! 後ろ!」

離れて見れる分、ウインディに当たるがんせきふうじが分かりやすい。躲すことは可能だった。それに向こうもこれで当てる気はないようだ。

フィールドには岩が転がり、ウインディの自慢の足が使いにくい。

『怒涛の展開だ! 激しすぎて実況を忘れてしまいました』

『実況が忘れたらだめだろう。それにしてもまもるか。エスパータイプのまもるは、出が遅いが強力というイメージだったが考え直さないとな』

現実になったまもるはゲームと違いポケモンによって異なる。ウインディであれば体を丸めてショックに耐える方法を取るが、出は早いけどダメージが0とはならない。一

方メタングは念力のシールドのようで完璧に貼ればほとんどの技を防げるだろう。

「いくよ！メタングじしん!!」

「ウインデイ！もえつきる！」

ウインデイの一撃がじしんを迎撃するが、衝撃は完全にはつぶせない。大きな衝撃がウインデイを襲う。

『もえつきるか』

『どのような技なんですか？』

『簡単に言うと自分のほのおタイプを一時的に消すことで大きな力を得る技だな。使用後はほのおタイプの技の威力が減ると考えればいい』

『決定打がなくなるのでは？』

『普通はな。ここで重要なのは自身のタイプを消すことでダメージを抑えることだ』

だからこそじしんでも致命傷にはならなかった。

「でもじしんによつて不安定になった地面では素早く動けない。止めのがんせきふうじ!!」

周りに散らばった岩が一斉に向かってくる。このために岩をばらまいたのか。一気に向かってくる岩に通れる隙間はない。しんそくでは逃げれない。

「勝った!!」

『決まったか!!』

『いや』

「そう、まださー！」

メタングの下が不意に盛り上がる。

そこからウインデイが飛びあがり、あなをほるが直撃する。

不意を突かれたメタングは急所に入る。

「ウインデイ決めろー！」

「メタング！弾き飛ばせ」

飛び上がった体制から放たれるかえんぐるま。技の連結としては申し分なかったが、少し距離があった。メタングのねんりきに吹き飛ばされる。

苦し紛れのねんりきではダメージはないが、距離がまた広がった。ただ形勢は逆転した。

「負けない！負けるもんか！行くぞメタング!!」

「メター」

ここでダイゴさんの気合の一声が入る。戦いにおいて精神力は大事だ。私もウインデイに声をかけようとするが、突然メタングが光り輝く。

『さ、この光は！』

『進化の光だー！すごい漫画みたいな覚醒だー!!』

メタングの姿が変わっていく。宙に浮いていたのが、四足歩行の鉄壁要塞に。てつあしポケモン、メタグロス。それにしても

『あれなんかリーダー感動してない?』

『大方初めて見る進化だろう。何の因果かいままで直接見れなかったからな』

うるさい解説陣。それでもこの状況。流れはイーブンになったが依然こちらが有利。

なぜなら進化したては体の変化についていけず大技になりやすい。ルチアのチルタリスがそうだった。

「行けるな」

「メッター！」

「ウインデイ、準備を」

「ガウ!!」

一瞬、間が開く。ただ技を出すのは同時だった。

「メタグロス！じしん」

「ウインデイ！だいもんじ」

こちらはもえつきるによりタイプを失っている。向こうもじしんはタイプ不一致。両者の技はお互いに打ち消し合った。

派手な爆発の中からメタグロスが突撃してきた。メタグロスにあるまじき素早さ。バレットパンチか。

不意を突かれたウインディにメタグロスの拳が当たり、そのまま突き抜ける。

「な!!」

『これは！ウインディが消えたぞ！』

『みがわりだ!!いつの間』

もちろんメタグロスが進化していた時だ。あれほどの隙を逃す手はない。

技を出した後のメタグロスは明確な隙を見せる。

「フレアドライブ!!」

今度こそ大技がメタグロスに直撃する。

爆炎から出てきたのは、倒れたメタグロスと雄たけびを上げるウインディだった。

「メタグロス戦闘不能！よって勝者リーダーとウインディ!!」

「わおーん！」

勝利がうれしいのかウインディが飛び掛かってくる。そのまま押し倒され、顔をなめられる。ブイズがすればかわいらしいが、こいつは重い。まあ、激戦だったし、なされるがままにするが。

満足したのかウインディがどけば、ダイゴさんとメタグロスが待っていた。きのみを

食べさせて回復したようだ。

「負けたよ。さすがリーダー。でも次は勝つからね」

「ははは。勘弁してください。当分はこりごりですよ」

私とダイゴさんはお互いに握手を交わす。

『名戦闘！それしかいうことがありません。激戦を制したのは我らがリーダーだー！』

『見事な戦いだった。個人的にはもう少し補助技を見たかったが、それはいずれ』

『最後はたがいに握手してポケモンバトルは終了となります！視聴者の皆さん盛大な拍手でお願いします!!』

『oooooooooooo』『oooooooooooo』『感動した』『スゲー』『かつこよかった』

コメントは後で見返そう。疲れた体に鞭を打って、エンディングに備える。

『これにて今回のすべての項目が終了しました。多くは語りません。ただまた皆さんと会えるように私たちも頑張りますので、決して希望は捨てないでください』

ルチアを中心として私たちも所定の場所につく。そしてギターをつける。今回はポケモンたちも参加だ。

『それではエンディングです！新曲《躍動》聞いてください!!』

これからも大変なことは起こり続けるだろう。それでも前を向くにはこの曲が一番合っていると思う。

だから私はオタクなのだ。

ちなみにこんな感動的な最期で閉めたが、次の日も普通に配信しました。
コメントのツツコミがすごかったです。まる。

14話 小さな迷子

迷子の迷子の子蜂さん。あなたのおうちはどこですか？

え、迷子じゃない？痛ッ、ごめん。

謝るから、だからたいあたりはやめてー！

あいぼうのあきれたしせん

ユウは連続攻撃でこうかバツグンだ。

それは配信生活が始まって1週間ほどしたところであった。その間は毎日配信を行っている。配信は順調であるが、視聴者はあまり増えていない。動画を見ることができるほど、余裕のある生活ができるものがあまり増えていないのかもしれない。それでもホームページへの閲覧数は増えているため、情報は広まっているようだ。

残念ながら私たちの生活圏の近くには視聴者はおらず、この拠点に集まる人はいなかった。このメンバーだけでは、いづれ限界が来るのは目に見えている。もう少し住民が欲しい。

また、情報も集まっている。都市圏も含めてポケモンと人との戦闘はかなり減ってい

るようだ。食料の奪い合いなどを除けば、ポケモンの縄張りも分かり、静かな環境のようだ。

一方ポケモントレーナーも増えているようだ。トレーナーを中心にグループが大きくなってきているようだ。ただ、トレーナーの中には自分の欲望を中心に動く者もあり、人の多い首都圏は様々なグループ同士でいがみ合っているようだ。こんな時でも人と人のいさかいはなくならないらしい。

伝説のポケモンの情報はいまだ集まっていないが、異常個体や好戦的なポケモンの情報は集まっている。例えば、大阪の通天閣に巨大円盤のようなイオルブ、京都上空を飛ぶ七色に輝くバタフリー、名古屋城を守る爪が異様に発達したキリキザンなどなど。異常個体は人間に友好的であったり、無関心であったり、好戦的であったりと様々だ。名古屋城を守るキリキザンは戦闘能力のないものには優しく、子供たちと遊ぶ姿も報告されている。

まだ山や深い林、大きな河川、海などポケモンたちの魔境となつていそうな場所は、危険性の観点から探索がされていない。勇気あるものが軒並み音信不通になっていることから、慎重に進めている。

唯一情報が集まらないのは猛吹雪に包まれている北海道だ。ポケモンと人間が協力し合つて、何とか生き残っている程度しか情報がない。一番融和に近いのがここだろ

う。その分環境が大変だが。

そんな人とポケモンのすみわけが出来始めたこの頃、配信中に小さな乱入者が現れた。

「なるほど、オコリザルだね。このポケモンは怒ることがないことに怒っているといわれているようだ。ならば、なだめるよりも、怒りの先を作る方が建設的かもしれない。布を拳で貫くなどほぼ不可能な難題でも挑発させれば、少なくとも人に危害を与えることはないだろう」

『なるほど、ありがとうございます』『さすが参謀汚い』『略してさすさん』『ん、橋から』『ボクが汚いって！知略と言うんだ。まったく、で、橋？…!!』

橋から傷だらけのポケモンが一匹。ミツハニーが飛んでくる。ミツハニーは橋の向こう側に住んでいるポケモンだ。リーダーはともかく他はかなり友好的であったため、私たちも橋の向こう側の警戒はおろそかであった。好戦的なスピアーの方に警戒していたのだ。

今は配信中であっても、今すぐ動く必要がある。

「ルチア！今すぐチルタリスを上空で哨戒させて」

「りよ、了解！」

「アイはすぐに傷の手当てを！リラは付き添って事情を聴いて」

「任せろ」「わかった」

「ダイゴさんは私と一緒に橋の向こうの警戒を、敵対ポケモンがミツハニーを襲っているかも」

「分かった！だけど配信はどうする！」

「このままで、今はどんな情報でも残すことが先決。特にこういう緊急事態は！気を引き締めていくぞ」

「了解！！」

『さすがリーダー、迅速だ』『いや、それよりもやばい？』『何が起きている？』

結果としては、群れの中での反乱であった。向こう側の群れでは女王気質のピークインのいじめが起きており、それに耐えかねたミツハニーの一匹が自らのボスに挑んだようだ。ただ、腐ってもものボス。叩き潰されて終わったようだ。

群れにいられなくなったミツハニーは、きのみをくれた私を頼ってこちらに逃げてきたようだ。何やっているんだと言うみんなの視線を無視する。ピークインからの追撃もないようだ。警戒態勢を解いた。

話を聞く限り、かなり陰湿ないじめがあったようだ。詳細を聞けば聞くほど、私たち

もコメント欄も同情的になる。みんなの視線が私に集まる。まあ、利点もあるし今は余裕もあるか。

「隣の勢力が友好的であることに越したことはない。やるか！下剋上作戦！」

「さすがリーダー！」「盟友なら言ってくれと思うたぞ！」「まったくもう」「まあまあ、リラ君も反対はしないだろう」

コメント欄も応援の言葉で溢れえる。

「明日からの配信はミツハニー育成で決定！では今日は解散」

「了解！」

「？」

ミツハニーだけがきよんとしている。まあ、私たちのノリなんてこんなものだ。配信のネタは多い方がいい。

そうして今日の配信は終わった。まったく、本当に刺激的なことが起こる。少しは落ちかせてくれないのか。まあ、それでも少しは楽しめる余裕も出てきたのかもしれない。

「おわり、なんていうわけないよね。説明してくれるよね？なんでミツハニーたちに勝手にきのみを」

「はい。リラ……さん」

リラのせつきよう攻撃
ユウは目の前が真っ暗になった。

15話 小さな迷子2

「さあ皆！修行の時間だー！」「おー！」

ミツハニーが私たちの拠点に来てから一晩が経った。その間にミツハニーは傷を回復させている。きのみの助けがあったとはいえ、恐るべき回復能力だ。これで超強化されればスーパーミツハニーになるのか？

「なるわけないだろう。それにしても動物なら傷ついた後はその部分が強化されることが多いのに、ポケモンにはないようだ。そもそも動物ですらないのかもな」

「アイは乗ってくれてもいいんじゃないか？返事してくれたのはルチアだけだし」

「そうはいつでもねユウ。あいにくのこの雨じゃあ修業はねえ」
そう、外は生憎の雨であった。このポケモンパンデミックが起きてからの初の雨である。

川の増水は対策してあるし、きのみに過剰の水が行かないようにもしてあるため、いまさら慌てることもない。

「ユウ君。川の水は濁るし、生態系もどんな影響が起こるかわからない。油断はできない」
「あー」

「分かっています。しかし、家の中でしんみりしても仕方がないでしょう」
「なら盟友はどうするつもりだ？」

ミツハニーはレベル技も貧弱で種族値もよくはない。しかし、ビークインに対して素早さは勝っている。勝機を見出すならここしかないだろう。

「勝利には相手の攻撃は一切当たらず、こちらは攻撃を続けるしかない。外の広い空間で修行するよりも室内で機動力を鍛える方が勝率が高いんだ」

「まあ、育てる分野でユウに勝てる人はいないだろうけど」

「それでいいの？」

「ビーン」

「我は何か作っている。終わったら声をかけると言い」

「アイ君も何か手伝うんだよ」

こうして修業は始まった。一応修行風景は生放送しているが、修行内容よりもしつかりとした作りの手作りログハウスの内装の方が注目度が高かった。

ユウの場合

「まず覚える技は、いとをかく、どろかけの二つだ」

「えー、攻撃技ないじゃん」

「ルチアは黙っているように。さつき言った通りスペックで適うところは素早さしかありません。しかし、たとえこちらが1ダメージしか与えられなくても、被ダメージがなければいつかは勝てます。現実には時間制限なんてないから」

「ビー」

あまりきれいな勝ち方とは言えないだろう。しかし、ミツハニーはやる気を出してくれている。こちらも力が入るつてもんだ。

「いくら汚しても構いません。今回役に立たないアイが片づけるんで」

「盟友?! 我も内職したいんだが!!」

いいだろう。早々に逃げた罰だ。

リラ&ダイゴの場合

リラが人差し指を立てて説明をする。その後ろにはダイゴさんとメタグロスがいる。

「いいかい。すべて物には重心というものが存在する。さつき教えてもらった、いとを
はく、どころかけも効率的な場所に当てなくては意味がない」

「ビー」

リラは理論的な説明をまず行う。どんな訓練も目的を理解しているかどうかは成果に直結する。その代わり、発展的な発想を受ける側は行いづらい。ここが指導者として、参謀としての腕の見せ所だろう。

「僕のメタグロスはかなりの巨体でパワーもある。メタグロスの動きを瞬時に妨害できれば、ビークインなんて簡単さ」

「ボク達が効率的に教えるから、物にしていってくれよ」

「ビー！」

ルチアの場合

木でできた杭のたくさんあるルチア専用の練習場。彼女は表に出ていないだけでかなりの努力家である。自分をキレよく、素早く動かす特訓を欠かすことはない。

「全ての生き物は事前の動きから、ある程度次の動きを予測するんだ。これを使ってきれいに魅せる動きもできる。逆に言えば相手を惑わす動きも可能なんだ」

そう言って、ルチアは踊りだす。ただその動きはいつもと違う。右に動くように見せながら左に、回転するように見せてジャンプする。見る側としては気持ちが悪くなるような動きだ。離れてみれば、その仕組みも見えてくる。身振り手振りを大きく動かし注

目させ、つま先やひざの使い方方で、予想外の動きを行う。これに杭などで動き始めを隠せば、遠くからでも予測することはできない。

これを数十万以上の観客相手でもステージの上で行うことが出来るのがルチアだ。伊達や酔狂でトップアイドルと言われているわけではない。

「ねーユウ！なんかすごく速く、強くなっただけだ」

「ちようちのまい、じゃねえか!!!」

え、なんで！ミツハニーは覚えるわけないだろう。

アイの場合

寝静まったログハウス内で動く二つの影。アイとミツハニーだ。

「よしよし。みんな寝たようだ」

「びー」

「こんなことを教えていたと知ったら、怒られるだろうからな。これはすぐには使えないことだ。だが、いずれ長として必要になるだろう」

「びー！」

「まずは魚鱗の陣と言ってだな……」

何やら怪しげな密談が、ひそかに行われていた。

16話 激戦

ミツハニーが来てから三日。この三日間、雨は降り続けている。

そんな雨を窓から憂鬱気味にルチアが見つめている。

「はあ、大丈夫かな。ミツハニー」

「歌姫、心配するな。しっかりと指導したのだろう?」

そう、つい先ほど雨に紛れてミツハニーは、ビークインに挑みに行つた。雨がビークインのスペックを落とし、こちらは雨の中でも動ける修業を積んできた。

少しでも勝率を上げるためである。

「もうボク達にできることはないさ。後は祈ることぐらいだね」

「これ以上野生のポケモンに肩入れすれば、その後の群れの世話もする義務が生まれるだろう。ルチア君、自分の力で勝ち取ることに意味はあるんだよ」

「むう!分かつているけどさ」

コンコン。

唐突に起こるノック。しかし、ミツハニーが戻ってくるには早すぎる。それ以前に彼女は、勝つたとしても負けたとしても、今後自分の群れを率いて生きていくだろう。こ

ここに戻ってくることはない。

ならばこのノックは誰なのか。ノックはドアの下の方で起こった。つまり人間の可能性は少ない。ポケモンだろう。

私たちの間に緊張が生まれる。私はダイゴさんに目配せをすると、向こうもうなずいてくれた。ウインディとメタグロスを伴って、ドアに向かう。他のみんなも窓や、裏口にポケモンを伴って監視する。これが襲撃の可能性もあるのだ。

準備が出来たら、意を決してドアを開ける。

そこには傷だらけのスボミーがいた。

スボミーはほとんど瀕死であったが、事情を聴くことはできた。

スピアーの襲撃だ。

「!!すぐに助けに行かなくちゃ!」

「ルチア!!」

慌てて飛び出そうとするルチアを私が呼び止める。

ルチアは私を責める目で見つめる。ここで助けないかと。しかし、冷静になるべきだ。

助ける判断はもう遅すぎる。

「あのロズレイドが伝令として非力なスポミーを送る。そんなことはあり得ない。群れの長として伝令ならロゼリアの方がいいはず。それでもスポミーが来たということは」

「…すでにロズレイドたちは壊滅している」

「見る限り外にスピアーの姿はない。なのにスポミーたちは一匹しかこちらに来ていない。森ですべて止められている戦力を持っている。楽観できる状況ではない、か」

「じゃあ、見捨てろっていうの！」

「ユウ君もアイ君もそうは言っていないよ。ただ落ち着いて行動するべきなのは変わらない」

「ダイゴさんの言葉によくルチアも落ち着きます。ただ、何かあれば動くのは変わらない。」

私は黙っているリラに視線を向ける。彼女の頭の中では様々な策とリスクがめぐっているはず。リラから頷き返される。

「アイ。ミツハニーが勝利したとき用に花火作っていたよね。防水性の」

「うむ。ただ、他のポケモンを刺激しすぎるからと却下を食らったがな」

「うん。いつでも打てる？」

「我を誰だと思っている」

「ユウとダイゴさんは、ドクケイルの林を燃やしてきて。林の外にスピーアールが居なところを見ると、ドクケイル達はもうやられている可能性の方が高い。ならば補給線をぶつた切る。ルチアはチルルと共にロズレイドの林に暴風を。地面は狙わないように。木々を倒していいから。アイは林を攻撃したタイミングで花火を打ち上げて。ここまですべてで隠密に徹底しているんだ。私たち人間の何かを警戒しているはず」

リラから指示が飛ぶ。ここで意見を言う余裕はない。失敗すれば一蓮托生。全員仏になるが、そんなこと前からである。

作戦開始だ。

「はい!!」

「ウインディー! だいもんじ」

「ガウ!」

「メタグロス、サイコキネシスで雨をはじいて」

「メッター!」

ドクケイル達がいいたはずの林は、すでに生物の気配はない。たった三日である。私たちが別のことに集中していたとはいえ、この行動力は脅威しかない。

林は火に包まれる。ポケモンの火力は強力だ。雨の日でも火をつけることが出来るのだから。

突然、あたりをプレッシャーが襲う。あのサザンドラを経験していなければ動けないほどの殺気だ。

炎の中から一匹のスピアーが現れる。

「あれはスピアーなのかい？」

ダイゴさんが困惑するのは無理もない。スピアーの持つ両手と下腹部にあった毒針は大きく成長し、両足が毒針に変化している。

「いえ、あれはメガスピアーです」

メガシンカ。ゲームでは一時的に強力な進化を行うものである。ただ、ゲームの図鑑説明には、人間を介さないメガシンカには多大なリスクがあつたはず。それが現実になつたのなら、スピアーの凶暴性にも説明が付く。一番上が暴走しているのだ。従う部下も暴れるのだろう。

メガスピアーは、こちらに向けて突撃する。その速度は、進化前とは比べ物にならない。私とダイゴさんは左右に避ける。分断されるが、四の五の言っていられない。

手早く方針だけ伝える。

「ダイゴさん！メガスピアーの特性は適応力。虫タイプ毒タイプの威力が上がります。

どちらも受けられるメタグロスが守備を私たちが攻撃を」

「ああ！メタグロス！バレットパンチ」

優先度の高い技が、本来の素早さを逆転し、不自然な加速でメガスピアーに当たる。

急な緩急に、メガスピアーは目を白黒させる。やはり野生は突発的な動きに弱い。ここで畳みかける。

「ウインディー！神速」

「メタグロス、アイアンヘッドからのしねんのずつき」

こちらの連続攻撃にメガスピアーに怯みが生まれる。そこにしねんのずつきが入り、大ダメージが入る。ただ、ここで正気に戻ったようだ。毒針を紫に染め上げ、連続でメタグロスに攻撃をする。しかし、ポケモンにはタイプ相性が存在する。鋼タイプに毒タイプの攻撃は無効だ。

自慢の攻撃が利かず、明らかな隙が生まれる。

「ウインディー！あなをほる、続けてかえんぐるま。離れ際におにび!!」

大ダメージを与えたメタグロスに集中していたメガスピアーは、この一連の攻撃を無防備に受ける。急所にあたった。たまらず下がるメガスピアーにメタグロスの一撃が襲う。

「サイコキネシスで地面に叩きつけるんだ」

「動きを止めたところに、もえつきる！」

「よし！ウインディごと、じしんで攻撃！」

メタグロスのじしんによりウインディもダメージを負うが、もえつきるにより炎タイプを失っているウインディは、元気にこちらに戻ってくる。

かなりの連続攻撃。しかし、土煙からは悠然とメガスピアーが現れる。

「確かに、強いけど」

「そうですね。巨大な力を振るっているだけ。力に振り回されている印象ですね。このまま畳みかければ、っ!!」

唐突に炎の壁から、5匹のスピアーが現れる。雨のせいで火の勢いも弱くなってきた。それに新しく現れた5匹も、かなりの力を持っている。幹部といったところだろう。他にも羽音がたくさん聞こえてくる。

こちらがかなり不利になった。が、ここで連続で火花が上がった。

ドーン!!

突然の騒音にメガスピアー達の動きが止まる。ここでウインディがほえる。

こちらの手札を警戒したのだろう。逡巡したのち、メガスピアー達は去っていった。

初戦の遭遇戦は、向こうの戦力の大きさを確認しつつの引き分けで終わった。

17話 激戦2

まだ薄暗いキャンプ地は、木の杭でできた防衛陣地が出来ていた。

空を飛ぶスピアーには、平面の陣地はあまり意味をなさない。丈夫さをメインに特に空中行動を阻害する木の杭が、組みあがっている。安全性はともかく、大掛かりなアスレチックのようだ。そして無数の槍が立てかけてある。

前日の戦闘からたった一日でできたとは思えない出来である。

その所々にはカメラが設置されており、すべて生放送されている。

事情は事前に告知されており、グロテスクな光景になるのは確実だ。それでも放送するのは、どのような結果になったとしても、今後に役立てたいからだ。役立てるのが、私たちか、視聴者かはまだ分からないが。

「あー、あー、マイクテスト中。うんOKみたいだね。じゃあ行こうか！最後のライブに」

「ルチア、縁起でもないぞ。リラの作戦を信じる。私はそうやって生き残った」

「過大評価だねえ、リーダー。正直生存確率2割だね。戦力差が大きすぎる。ダイゴさん次第かな」

「リラ君は、プレッシャーをかけてくるね。単独突入、単独ボス撃破。相性がいいとは言え、厳しい状況には変わりないんだけど」

「なら、諦めるかい？」

「まさか！ やつと年長者らしい姿を見せれるんだよ」

すでに準備は整っている。連日続いた雨の影響もほとんどなく、戦いはいつでも起こせる。

「なぜそんなに冷静なんだ！」

アイの悲痛な叫びが、響く。振り向けばアイの泣きそうな顔が、目に映る。彼女の役割を考えれば、当たり前なのかもしれない。

「死ぬかもしれないんだぞ！ もう会えないかもしれないんだぞ！！ みんなで逃げればいい！」

「これ以上大きくなったスピーアーたちを止める手段はないよ」

「なら、せめて、せめて我も一緒に！」

「アイ。君は一晚でこの陣地を築き上げた。そんな寝不足状態で戦場には出せない」

「陣地内のさまざまなトラップを的確に作動させる人も必要だからね」

「生き残って情報を伝える人も必要だしね」

たった一人。残される彼女は、辛そうだ。しかし、戦場に寝不足で立ち、ミスをすれ

ば、そこから戦線は崩れるだろう。陣地構築も手は抜けない。この配置が最適なのは、彼女も分かっている。一晩でできることなど限られているのだ。

私はアイの前に立つ。

「アイ」

「聞きたくない!!」

「アイ。今後を考えればスピアー達の癖を知る者を残すものは必要だ。私たちも最善は尽くす。君も考えられる最善を尽くせ」

アイは、私を軽く蹴ると、そのまま背を向けて所定の位置に向かった。彼女も分かっているのだ。情報を残す意味も生産系を残す意味も。

リラが横に来る。

「いいの。あれが最後の言葉で」

「なにを言っているんだ？また数時間後には、ここで祝杯を挙げられるさ」

「だいたいね」

「ふう。さて、行こうか!!」

「「おう!」」

18話 激戦3

戦争は数である。たとえ一人一人が弱くても、数がいれば多少の兵器差は覆る。

戦争は質である。強力な兵器は、時としてすべてをひっくり返せる。

戦争は政治である。逃げばかり選択すれば、搾り取られるだけである。

だからこそ、この戦い逃げることはできない。人類にとっても、他のポケモンにとっても、スピアーたちにとってもいい結果にはならない。異常発生は最後には何も残らないのだから。

ここで止める。たとえどんな方法を使ったとしてもだ。

開戦の狼煙は、スピアーの巢に向けて大きな杭が飛ぶ。投石機を改造して作り上げた投杭機は、数十の杭は正確にスピアーの巢を含め周辺に突き刺さる。

ドーン!!!

直後、爆音が響く。爆弾。実は日本の教科書レベルの知識で作成できる爆弾を、アイが作れないはずがない。先制攻撃としては十分だろう。

無数のスピアーたちが見えてくる。規則正しく空を覆う姿は、空に絨毯を敷くよう

だ。あまりの戦力差に笑いたくなる。ここから先は何があっても止まることはできない。それでも、ここまで来て逃げることはしない。

「ウインデイ！かえんほうしゃ!!」

相棒の口から炎の柱が生まれる。その柱は群れの先頭を超え、中央すら超え後方ではじける。距離により威力が減ったこともあるが、これは後方に本陣があるのだろう。口ズレイド達を襲う時も、主力は後方にいた。リラの読み通り。

「作戦道理行くぞー!」

「チルル！空へ行くよ!」

「チルル!!」

チルタリスはルチアを背に寄せ、ウインデイの開けた空の穴に突っ込む。

S i d e l チア

ウインデイの開けた穴はわずかであるが、青空が見えている。ここにチルルと一緒に飛び込む。チルルの速度に振り落とされないように、しっかり首に手を回す。

先に上空で待機すれば、スパイアーたちはわたしたちを警戒する。でも開始早々制空権は取りたい。わたしが失敗すれば、地上に残るみんなは無残な結果になるだろう。

スパイアーたちによって、上空の穴はすでに閉じかけている。だから何だ！みんなの期

待に応えるのがアイドルだ。

「チルル！回転しながらブレイブバード！」

「チル!!」

「アイドルを舐めるなー!!!」

回転も炎もアイドルの派手な登場には必須なんだ！

こじ開けた穴を突き抜け、空に舞い上がる。ブレイブバードの名残の火の粉を振り払い、チルルは羽を広げる。背には朝日を感じる。敵であるはずのスピアーも戸惑いが感じられる。これがわたし史上最高最大のステージだ。

わたしはポケットから無数のボールを取り出し、放り投げる。もちろんただのボールではない。中には高濃度の殺虫剤が入っている。ポケモンであろうと、似た生物の特性は有している。これはユウが命を賭けて持ってきた情報だ。難しい理屈は分からないけど、使えるなら今は十分。

「チルル！ボールごとぼうふうを！」

「ル！」

ぼうふうは命中率が低いけど、これだけ居れば関係ない。ボールから噴霧された殺虫剤がスピアーたちにダメージを与えている。個体によっては倒せているが、雀の涙でしかない。

初動は十分だろう。

「さあ行こうか」

「チル?」

「大丈夫!チルルは自由に空を舞って!未来の最高のアイドルは、どんな足場でも踊ってみせるんだから!」

「チル!!」

わたしはアイ特製の撃退アイテムを取り出す。みんな死んだら許さないからね。

Sidereira

「君たちは軍隊よりも機械のようだね」

ボクを囲むスピアーは、同時に距離を詰めてくる。敵意は一定で、規則正しく攻撃してくる。上位存在がいなければ、工夫もできないようだ。そつと、一体のスピアーの針をそらせば、それだけで他のスピアーの邪魔になり、回避もしないため、陣形が崩れる。その隙をするりと抜ければ、スピアーたちはまとめて団子状態になる。

「ブースター、ほのおのうず。サンダースはスピードスター。シャワーズはもう積み終わった?」

「ブイ!」「シャ!」「シイ!」

「よろしい！シャワーズはだくりゆう。他は戻って」

積み技は積む余裕があれば最強の技である。これがボクの出した結論だ。策を使っても、最後にモノを言うのは自力である。スペックを上げる積み技をおろそかにすることはできない。

「シャワーズをメインに、サンダースは遊撃。ブースターは迎撃」

必要以上の火力は必要ない。各々の利点を生かすだけ。相性によりブースター単体でスピーアーに迫れる。サンダースの速度には誰も追いつけない。積み切ったシャワーズは鉄壁要塞のように僕たちの肝となる。後はボクがミスしなければいい。

確かに細かい。しかし、勝利の道は閉ざされていない。今できるのは時間を稼ぐことだけである。

「だから、君が頑張ってくれよアイ。安全圏に居ようと君が今回のメインアタッカーなんだから」

S i d e a i

そこは防空壕のような場所であった。そこには無数のモニターがあり、逐一戦場を監視している。そこで叫び声が響く。

「あー！もう！盟友は動きすぎ！もう少し落ち着かんか！」

「ろ、ロト。そんなこと言っても」

「反論いいから、2番、10番、310番作動!!」

「ロトー!」

画面の向こうでは爆発が起こり、殺虫剤がまかれ、粘液水が機動力を削ぐ。我の作成した罠が連動して、スパイアたちにダメージを与える。過去最大の創造物。上からの奇襲を防ぎ、様々な妨害をし、敵に大ダメージを与える。ここからの確に援護するのは、創造主である我にしかできない。それでも、あそこに立ちたかった。

「我をのけ者にしたことを一生後悔するといひ」

この防衛陣地のすべてを把握しているのは我しかない。後で何と言われようとも、全員で生き残るのだ。

S i d e
ダ イ ゴ

僕の仕事は単純。みんなが陽動している間に、敵女王を叩く。指揮系統が混乱すれば、勝利への道が開く。そう思って、孤軍奮闘していた。

攻められる意識があまりなかったからか、敵大将の周りには護衛はほとんどいなかった。いや、これは自信か。

なんたって、今僕は膝をついているんだから。

「まいったねこれは」

取り巻きはすぐに倒れた。後は大将メガスピアーのみ。前日に付けたやけどはまだ、癒えてはいない。これだけで、攻撃力は半減しているはずだ。こちらも多くは攻撃を加えた。スリップダメージもある。それでも、メガスピアーは堪える様子が見えない。

トレーナーのいないメガシンカしたポケモンは、身に余るほどのエネルギーでダメージを常時回復させている。当たってほしくない仮説だった。これを超えるには、高火力攻撃か同等のエネルギーをぶつけるしかないだろう。はつきり言っただちらも今の僕では用意できない。

1対1で負けることもないだろう。敵はメガシンカの影響か、単純な攻撃しか行わない。毒技しか使ってこず、僕のメタグロスには効果はない。ただ、時間をかければ負けるのは僕たち全員だ。数で攻められれば、生き残る手段はない。

「でも、みんな頑張っているんだ。僕だけ下を向くつもりもない」
「メッター！」

「みんなに負担ばかりかけておきながらだけど、大人としての責任を放棄したつもりはない。信頼して任せてくれたんだ」

初めての強敵サザンドラ。まだあの時は信頼関係はなく、積極的に意見を言うのは憚れる状況だった。でももう違う。誇りをもって、みんなの仲間だって言える。

そういえば、ユウ君とアイ君はよく変なセリフを僕に言わせていたな。こんな状況だからこそ、笑っていつてみようか！

「けつきよく、ぼくが、いちばん つよくて すごいんだよね」

首から下げたキーホルダーが、光り輝く。

S i d e ユウ

アスレチックのような施設を縦横無尽に駆け回る。直線スピードでは子供の私では敵わない。小回りこそが、最大の利点だ。

「うおー危ない！」

頭上にスピアーの針が突き刺さる。その針は私の胴体より太い木の杭に穴をあける。一つ穴が開いたぐらいで崩れはしないだろうが、やり過ぎはよくない。

「ていうか！お前絶対幹部クラスだろ！いたぶりやがって」

「ビビー！」

周りのスピアーよりも、動きがよく、判断が早い。周りのスピアーも攻撃に加わらず、私の動きを制限させる動きしかない。十中八九こいつが指示を出しているのだろう。

ウインディも邪魔が多く、すぐにこちらには来れない。だからこそ、命がけの鬼ごっこをしている。

「こういう役回りが多い気がするぞ」

「ビビ」

その辺に立てかけてある槍を使い、牽制しながら距離を詰められないようにする。振り回すのではなく、突くだけなら素人の真似事でも十分効果が出る。

ウインディなら匂いで何とかわかるだろうと、入り組んだ施設をかけ回る。向こうも頭に血が上ったのか、激情的な動きが多くなってきた。

そろそろか。

私はあえて、直線に走る。せっかく開けた距離が瞬く間に詰められる気配がする。そのままスライディングで、クロスに交わった杭の間を抜ける。私しか見ていなかった幹部スピアーは杭にぶつかった。

杭にぶつかり目を回している幹部スピアーに秘策をぶつける。

「紫外線ライト（強）

「ガウ!!」

さすが相棒。幹部スピアーが目がくらんだタイミングで炎を纏い、攻撃してくれた。

急所に効果バツグン。さしもの幹部も一発KOである。

「ただし、敵さんに乱れ無し。これは複数幹部がいるな」

「ガウ!」

「さあ、もう一戦だ。と言うところで、目の前が真っ暗になった。」

19話 激戦4

急に暗闇に包まれる。いや、転がっているのか。角度も深さもそこまでもなく、すぐに止まった。こんなことをするのは一人しかいない。

「おい！アイー！」

「残念ながらアイは居ないようだ」

「リラか！無事で何よりだ」

「ガウ！」「ブー！」「シャ！」「シィ！」

「みんなも無事か」

「まったく、汚れ一つついてなかったのに、初めてのダメージが味方とはね」

リラはすごいな。あの数を無傷で凌いでいたのか。こっちはいくつものモモンのみを消費したのに。さすがセンスが一番の参謀だ。

「それにしても大規模な仕掛けだね」

「まったくだ。緊急回避用か？私は問題なかったけど」

「ボクも問題なっ!!!」

急に大きな振動が起こる。あまりの振動に私たちは立つこともできず、地面に伏せ

る。あまりの衝撃に上からばらばら土が落ちてくる。このまま生き埋めになるのか。

そんなフラグが的中したのか、衝撃に耐えられず、一部に穴が開き、光がさす。

穴が開いた時に生まれた砂ぼこりは私たちをよけていく。どこまで計算しているのやら。

振動も収まり、時間をかけるわけにもいかない。すぐに確認するために、空いた穴からウインディの背に乗って脱出する。

「おいおいマジかよ」

「これはねえ」

私たちは広いクレーターの中にいた。比較的浅いが、広範囲にわたっている。防衛陣地のかけらもない。空には青空が広がっている。あれだけ居たスピアーたちが一掃されていた。

「アイのやつ隕石でも降らしたか？」

「ボクはこんな惨状で無傷のログハウスに驚いているんだけど」

確かに、ぼつんと立つログハウスは異様な。私の畑は一掃されているみたいだけど。

すると空からルチアたちが下りてきた。

「アイのやつ！本当に許せない！！無線で空高く上がるように指示出してきたと思った

ら、急に大爆発が！スピーアの壁がなかったら丸焼きだったよ!!!」
「爆発か。いろいろ組み合わせたんだらうな」

思わず目が遠くなる。地道にやっても勝てなかったのは確かだけど、やり過ぎだろ。するとログハウスの方から、声が聞こえてきた。

『敵主力が爆心地上空通過確認後大爆発！防衛陣地に入らなければ安全だとも思ったかバカめ!!盟友たちは私をのけ者にした罰だ！驚いたか！敵残存勢力は大幅減！次の策を待たがいい』

一方的に言って、切っていった。まるで嵐だな。

「策って言ったって、何も残ってないぞ」

「ここまで何もないと逆にすがすがしいね」

「やり過ぎでしょ!!!」

各々文句を言う。ただ、小休憩はここまでだ。大爆発に耐えられるだけの精鋭を中心に敵さんも向かってきている。依然、数は向こうの方が多し。ただ、先ほどよりも絶望感には小さくなった。目に見える希望はありがたい。

「みんな行くぞ！ウインディ、ほのおのうず」

「ブイズもまねっこのほのおのうず」

「チルル！ぼうふうで叩きつけて、制空権は取らせないで」

ここまでくれば、あとは3人で固まりながら、死角をなくしていくしかない。身を隠せる場所なんてもうないのだから。あとは、拘束技で数を減らしつつ、確実に倒していく。

一手でも間違えれば、全滅の詰将棋が始まる。

阿吽の呼吸とはこういうのを言うのだろう。すでに私とウインデイの間に会話は無い。それでもお互いに言いたいことは伝わってくる。一体感とはこういうことを言うのだろう。私が一歩引いてスピアーをおびき寄せれば、ウインデイが仕留め、ウインデイが下がれば、迫ってきたスピアーの姿勢を私が崩す。

視野も広がった。クレーターにより柔らかくなった土を蹴り上げれば、シャワーズが水をかけてどろかけのようにスピアーの邪魔をする。サンダースのスピードスターをチルタリスのぼうふうが後押しし、高速広範囲に攻撃を与える。これらを言葉を交わさずにできるのである。無駄はほとんど減ってきている。スピアーも倒せている。

それでも、スピアー達は削り切れない。すでに太陽は傾き始めた。日が暮れば、勝利はもう絶望的だ。タイムリミットが近づいてきた。

乱戦の中、背中合わせになった私とリラは、久しぶりに口を開く。

「時間が迫っているけど、何かいい案はないかな参謀？」

「意外と余裕があるよね、リーダー」

「前回の経験はあるかもね。最悪みんなで川に飛び込めばいいかなって」

「可能性の低すぎる策だね。でも、運命に身を投げるのも一考かな」

すでに勝利は不可能だ。こちらの殲滅速度では、スピアーの群れを削り切ることにはできない。ただ、アイのおかげで、逃走する余裕はできた。これ以上時間をかければ、水温も下がり水に飛びこむ最終逃走手段も使えなくなる。

さあ、賭けの時間だ。

「ウインディー！しんそくからの、もえつきる」

「ガウ!!」

自身のタイプを消す大技が、リーダー格に突き刺さる。すぐにしんそくを応用し、私の横につけているのはさすがだ。そのまま私は背に乗る。

突然の大技に動きを止めたスピアーたちに、ここえるかぜが4つ、突き刺さる。チルタリスとまねっこ三連発だ。大幅に速度を落としたスピアーたちに目を向けることもせず、逃走を開始する。

「リラー！」

「うん!」

ルチアはすでに空高く逃げている。私も、ウインディーに乗りながらリラを回収する。

人間の足では、追いつかれる。

混乱から回復したスピアーたちの羽音が背後から聞こえてくる。リラの腕に力が入る。

「ねえユウ。ボク達、生き残れるかな」

彼女自身こんな不確定な策に身をゆだねるのが初なのだ。人より頭の回転が速い彼女には、様々な不確定要素が渦巻いていることだろう。だからこそ私は笑う。

「ハハハ！すでに私は運命に一度勝っている。二度目がないと誰が言える！私にゆだねると良い」

「うん」

もう川までほとんどない。逃げ切れるかはギリギリか。姿勢を低くし、少しでも風の抵抗を減らす。ラストスパート、と言うところで予想外の声が響く。

「フロストロトム!! ふぶき!!」

「ロトー!!」

「え、アイ?!」

私たちを追ってきたスピアーたちは逃れられるはずもなく、ふぶきが直撃する。

あまりの事態に私たちは足を止める。なんで来たのか！逃げるぞと視線をアイに合わせれば、はまりの光景に言葉を失った。

逆光によりアイの顔は分からない。ただ、やり切った満足感に包まれていることだろう。

夕日を背にアイの後ろには無数のミツハニーと一体のピークインがいた。

「甘すぎるぞ盟友を！運命は委ねるものではなく、つかみ取る者！可能性が少しでもあるなら！この選択は必然である！」

「まじか！あの時のミツハニーが！」

「勝つ可能性も、その後戦える力がある可能性も低かったのに」

突然、上空から暴風が吹き荒れる。突然の援軍に対応できないスパークたちは、もろに受ける。仕掛け人はすでに、地面に降り立ちピークインに抱き着いている。

「ハニーちゃん!!!」

「バイ♪」

ルチアを嬉しそうに抱きしめるピークイン。ああ、姿は違えどあの時のミツハニーだ。

「受けた恩は返すだつてき、リーダー」

「ああ、ありがとう」

「バイ」

ピークインも格上との対決に勝ったばかりだろうに、それでも駆けつけてくれたの

か。

私は後ろを振り向く。すでに数の上で、こちらが有利になった。スピアーたちが一歩下がる。

「まだやるか」

「ビィイ!!」

すると司令官らしきスピアーがわめき散らかす。逃げる気はないようだ。まあ、スピアーたちには、最強がついているのだから、わからなくもない。ただ、それは彼らの最強が最強ならば、だ。

スピアーたちの背後にはすでに彼らが歩いてきていた。

「そっまでだ!!」

覇気の満ちる声が響く。まったく、この土壇場に間に合うとか、あんたは確かに最強だよ。

ダイゴさんの後ろにいた宙に浮いたメタグロスが、何かを放り投げる。すでにこと切れているメガスピアーだ。自分たちの大將がすでにやられている事実には、スピアーたちは逃げ腰だ。そうだろう、ダイゴさんの背後にはメガスピアーと同等の気配を放つメタグロスが控えているのだから。

まったく、いつの間にメガシンカを物にしたのか。

完全に立場が逆転した。ここからは殲滅戦にしなければならない。

「ビィイ!!」

今まで勝利しか積み上げてこなかったスパアーには、逃げる選択肢はないらしい。ミツハニーたちの戦力の低さが見破られたか。ここまで疲労した状態では、勝つたとしてもこちらに、少なくとも負傷者が出るだろう。あと一手何かほしい。そんな願いが届いたのか、戦場にくつつもの遠吠えが響く。

「『ウオオオオオオオン!!』」

「え?なに!ここで漁夫の利?!

「まずいね、これは」

「あ、あれはグラエナとポチエナ?!」

「いや、まさか」

仲間たちは、狼狽している。普通に考えれば、関係ない援軍なんて来るはずがない。

ただ、私には心当たりがあり過ぎる。

一匹のグラエナが近づいてくる。みんなが警戒する中、私は無防備に近づく。

「よかつたのか?家族どころか仲間までこんな危険地帯に連れてきて」

「ガウ」

ルチアのように言葉が分からなくても、言いたいことが分かる。まったく、ポケモン

「私たちは、義理堅すぎるだろう。わざわざ周りの群れをまとめてきてくれたのか。」

「まだやるかい」

これが最終宣告である。戦力の質でも、相性でも勝っている。もうスピアーたちには一矢報いることもできない。それだけの差が出来た。

スピアーたちは忌々しそうにこちらを一瞥して、去っていく。すでに、ポケモンたちは縄張りを作っている。頼みとなる強者もいない。スピアーたちが新天地で、大勢力を築くことはできない。

ああ、万感の思いが沸いてくる。周りを見れば全員が私を見ている。リーダーとして最後に一言。

「この戦争！我々の勝利だ!!!」

「オオオオオオ!!!」

無数の雄たけびが空に消えていった。

20話 訪問者

スピアーたちとの戦闘から早一か月。すでに私たちの生活は、以前よりも規模を大きくし、充実している。外敵がない状態でアイが止まるわけがないのだ。

ビークインたちは自身の住処の林に戻っていった。今は、蜜ときのみを交換したりと、良き隣人を築いている。

グラエナたちは、私たちが住処と食料を提供する代わりに、労働力として働いてもらっている。私たちの周りは、縄張りになっていた勢力が一気に減ったのだ。これ幸いと変なポケモンに占領されたくない。グラエナたちの縄張りにして、巡回してもらっている。私がひそかに友好をはぐくんできた事実は、あとでこつてり怒られた。

生き残ったスポミーたちは、住処を私たちよりに変え、規模の拡大した畑の管理をしてきている。新しくできたアスレチック型の防衛障地（アスレチック要素多め）で、ポチエナたちと仲良く遊んでいる姿は大変和む。あと一匹、根性で私たちに助けを求めたスポミーは、最もなついていたルチアの手持ちになった。すでにロズレイドに進化している。まさしく一瞬であった。ルチアと一緒にアイドルとして、配信ではレギュラーだ。

私たちはというと、それぞれ分かれて行動する事が多くなった。

私はグラエナや、やる気のあるロゼリアたちの教育育成に精を出している。もちろん仲間たちの手持ちの育成もする。激戦ばかりで経験がたまったからなのか、チート〈育成〉の能力が成長した気がする。ポケモンが本来覚えなない技も、相性が良ければ覚えることもできるようになったし、すごい特訓をいつでも行えるようになった。

アイは、その力を存分に発揮している。私たち全員にスマホ型の道具ボックスの配布し、一人で時代を進めている。太い線で繋げなければいけないが、ワープ装置が出来たときは、一同あきれたものだ。すでにモンスターボールの原型も完成させている。ただ、住居性が悪く、現在は改良にいそしんでいる。

ルチアは相変わらず配信を中心に活動している。ほぼ毎日配信して全国に情報を届けている。最近、集まった情報の整理も行っているのに、彼女の笑顔が曇ることはない。

新曲の提供などは行っているが、最近は配信に顔を出せていない。かろうじてダイゴさんが出るくらいで、コメントでよく質問されるらしい。

リラはブイズとグラエナを伴って、周辺の探索を行っている。日をまたぐこともあるが、まだ遠征することはない。現状他の人間には、まだ会えていないらしい。グラエナたちが自力でこの拠点を守れると判断できれば、遠征は決行するつもりだ。その時の情報集めも含めて、かなり精度よく調べてもらっている。

ダイゴさんは、他のメンバーをサポートしながら、技の考察をしている。例えば先制技の加速の仕組みを他の技に使えないか、インターネット上での突拍子もない技の再現などなど。すぐに実を結ぶことはないが、現実になったポケモンではこういうことも必要だと率先してくれている。

世間は良くも悪くも落ち着いてきた。勢力が固定され変動があまりない。ポケモンに対しては賛否両論だが、肯定的な意見が多いのは私たちの活動が実を結んでいると考えてもいいかな。否定してもどうしようもないのも一因だろうが。

そんな良くも悪くも安定してきた私たちに訪問者が現れた。30代の渋いおじさん

だが、リラに縄で縛られ、グラエナたちに威嚇されているのは何とかならなかったのか。

「わはっはは。いや！すまん。隠れて様子をうかがっていたら囲まれてしまったわ」

「「ギルティ」」

「これは意外な訪問者だな！冒険家ジンダイ殿ではないか」

冒険家ジンダイ。出身こそ福岡であるが、数々の秘境を旅しており、自身のブログに写真をアップしている。一か所にとどまることは少なく、一週間後には地球の裏側なんてこともある人物だ。

私とアイはゲームで登場した人物の行方を探っていた時期があつたため、一応把握はしていたが、あまり有名な人ではない。

その証拠に私たちが自身を知っていたことに、目を丸くしている。

「驚いた。まさか私を知っているとは？」

「だからこそ不可解だね。あなたは積極的に話しかけてくる人物だと思っていたのですが。なぜ隠れて様子を伺っていたのです？」

ブログには、ジャングルの奥に住む先住民と仲良くしている様子も上げられていた。そんな人物が隠れて様子を伺うのか。

「うむ。先日、ここより南にいるあるグループに身ぐるみを？がされそうになってな。

何とかポケモン？と一緒に撃退したんだが。やれやれ、こんな環境だとああいうグループも跋扈してしまうものだな」

「ポケモン!!」

「ユウもアイも落ち着きなよ。それよりそのグループのことを聞くべきだろう」

いやいや、私たちは知っているのだ。ジンダイという男は確かに一般ポケモンも持っているが、代名詞となるポケモンは伝説と言われるポケモンだ。見たい!!

「ははは。あとで見せよう! あいつは大きすぎて、今は少し離れてもらっているんだ」

大きすぎる! レジロツクか! レジアイスか! レジスチルか! いやあ、ついに伝説のポケモンと出会えるのか。アイも私と同様に目をキラキラさせている。

「はいはい。話が進まないから向こう行きましようね」

見かねてカルチアが私とアイを引きずっていく。

ああああ。謎のグループよりも伝説のポケモンを…。

21話 VS古の巨人

ジンダイさんからの情報はかなり、恐ろしいものだった。ここから南に二日ほど歩くと、銃で武装した集団がグループを作っているみたいだ。もう少しで、リラが一人で出会っていた可能性もあるのだ。

この日本で銃を大量に所有している組織が、国以外でまともなはずがない。

グループ名は月華。母体はもともといたやくざが中心となりかなり幅を利かせているみたいだ。一応統率を取れているようで、ポケモンはグラエナを付き従え、銃で応戦しながらポケモンを援護する戦い方をするようだ。

比較的若いものが多く暴走しがちだが、リーダ格のカゲツはうまく若いものをまとめ、若頭と慕われているらしい。

若頭ということは、頭が別にいるはずだが、ジンダイさんは会えなかつたようだ。

事前にこれだけの情報が知れたのは大きい。いざれ付き合い方も考えなければいけないだろう。ただ、今は別だ。難しい話は終わった。ならばポケモンバトルの時間だ!!!

『えー。マイクテスト、マイクテスト。みんな元気かな！アイドル兼実況のルチアです！』

『解説の魔女っ娘である』

『唐突に始まりましたポケモンバトル。急な生放送にみんな驚いているね。それでも視聴者が多い多い』

『暇人なのか？唐突なのは仕方がない。彼は急にここへ来たのだから』

『そう！この大混乱に一人の大人が旅をする！旅人のポケモンとポケモンバトル』

『対するこちらは、リーダー、参謀、ストーンだ』

『リンチじゃないかって？ノンノン。なぜなら旅人のポケモンは伝説のポケモンなのだ！！』

『伝説のポケモンとは生まれながらの異常個体』

『さあ！登場してもらいましょう！旅人さんです』

カメラがフィールドを向けば一人の男が現れる。今回の戦い、快く放送を許可してくれたジンダイさんだ。またすぐに旅に出るとのことで、あまり時間がなく急なスケジュールとなったが、お互いによい経験にしたい。

「紹介に預かった旅人のジンダイだ。こうはよろしく頼む」

『ちよ!!旅人さん!匿名性!』

「む?そうだったか」

『本人がいいのであれば問題ないが。対するは我らが誇るこの三人だ』

反対方向にいる私たちが写される。すでにウインディ、メタグロス、サンダーズが構えている。全員戦意は十分だ。

「ではこちらも行こうぞ!!」

ジンダイさんが特殊な笛を吹く。もともとは動物の調教用の笛らしく、かなりの広範囲に響くらしいが、その音を人間はとらえられない。

ただ、ジンダイさんの相棒には聞き届いたようだ。しばらくして地面が揺れ始める。

そのポケモンは地面が割れると腕が飛び出て、そこから全身を持ち上げる。

「行くぞ!レジギガス!!!」

「ギガガギゴ!!」

私たちの相手は、全盛期には大陸を引っ張ったとされる伝説のポケモンだった。

…ギガス様か!!!

この戦いは動画映えも気にするため、技名はちゃんと攻撃技を宣言することになって

いる。それ以外にはルールは存在しない。ジンダイさんが、かなり強力なポケモンだから3体1で問題ないと言うので、お言葉に甘えさせてもらっている。

もし、この世界の伝説のポケモンと一般ポケモンとの差がゲーム寄りであれば、こちらの圧勝になるだろう。私のチート越しで感じるレベル差は10レベル程度だ。ただ、アニメよりであれば、この戦いがどうなるかはわからない。

「レジギガス、はかいこうせん」

「！メタグロス前に出てまもる！」

特殊型か！レジギガスが両手で力をため、巨大なエネルギー砲を放つ。

確かにレジギガスの特異性はスロースターター。この現実でターンの概念はあいまいで、いつまでデバフがあるかは解らないが、攻撃力と素早さが遅い予想できていた。

先制攻撃はこちらからしようと思えていたが、当てが外れる。さらに威力もおかしい。

四本の足でどっしりと構えるメタグロスがずるとかなり後方に押される。まもるにもひびが入る。

「メタグロス！」

「メッツツタ!!!」

メタグロスは気合と共に何とか、はかいこうせんを受け止める。ただ、素早さの遅い

メタグロスがすぐに戦線に復帰はできない。

私とリラはお互いに合図する。

「ほほう！この一撃を無傷で受け止めるか！大半はこの一撃で倒れるのだがな！さて他

二匹は」

「上だ！」

「!!」

私が声を上げる。高く飛びあがったウインディは、太陽を背にレジガスに迫る。逆光で相手には直視ができない。

「はかいこうせん」

「かえんぐるまー」

反動はどうした。レジガスが右手で、はかいこうせんを放つ。伝説のポケモンには技の反動すらないのか。

落下エネルギーを味方につけたウインディのかえんぐるまが、レジガスのはかいこうせんに拮抗する。ただ、ウインディは押し負け、はかいこうせんの直撃を受ける。

「ウインディ!!」

「甘い！知識はあっても応用はまだだ。はかいこうせんを全力で打てば確かに動けなくなるが、放つ威力を調整すれば連発も可能なのだよ。そして私に二の矢は通じ

ん。もう一度はかいこうせん！」
「な！」

ウインディの影からサンダースが現れる。ウインディが壁になりサンダースが攻撃する。

もともとアニメでも強力なポケモンがはいこうせんを連発する描写はたくさんある。ウインディが迎撃されることも考慮に入れた策だったが、裏目に出る。空中では身動きが取れない。左手で放たれたはいこうせんがサンダースに直撃する。

「ならば、ボクはこう言わせていただこう！ジンダイさんは知識が足りないよ！サンダースにどげりからのでんじは」

「何?！」

煙の中からサンダースが飛び出し、レジギガスにダメージを与える。

油断したのか、レジギガスは無防備に受ける。サンダースは、そのまま流れるように後方に下がる。メタグロスも戻り、横には傷を回復させたウインディが立つ。

「これはまいった！まさかこれだけで結局、こちらは状態異常にダメージまでもらい、そちらはノーダメージとは」

「僕たちの実力は分かっていただけでしたかな」

「ああ、子供だけでこの環境で生き残った事実を過小評価してたみたいだ。手を抜くの

は侮辱になるか」

「来ますか」

「ああ！行かせてもらおう！レジギガス！覚醒！鋼の巨人と雷の巨人の力を！！」

「ギガガレジギガ！！！！」

「な！」

ジンダイさんとレジギガスが雄たけびを上げると、二人の間に光がつながる。メガシ
ンカのように見えるが、まったく異なる。

光が収まれば姿かたちはあまり変化がない。せいぜいレジギガスの体に走る黒いラ
インのうち二本がシルバーとイエローに輝いているぐらいだ。ただ、感じる圧力は先ほ
どの比ではない。私が持つチートは、防御と特殊防御と素早さが上昇し、タイプも鋼と
電気が追加されていることを伝えてくる。まさにレジスチルとレジエレキのいいところ
ろを手に入れたような感じだ。

「各地には巨人が眠っている。私は彼らに認められその因子を受け継いだ。その力を使
うことで私のレジギガスは強化される。さあ！来るがいい！」

「ギガガギゴ！！」

22話 VS 古の巨人2

私たちの目の前には覚醒したレジギガスが佇んでいる。その圧力はあの時の異常個体のサザンドラに匹敵か上回っている。今のまま、まともにより合えば勝ち目はないだろう。

ただ、この戦いは試合であって殺し合いではない。降参も退却もあり得ない。たとえ負けるにしても、ここでしか得られない経験だけはいただいでいこう。

「メタグロス！メガシンカ」

スピアー戦で手に入れたダイゴさんとメタグロスの絆の力。直接見せてもらったときは、圧倒的な力に恐れおののいたものだ。今はその力も心もとない。

実況の説明で、ジンダイさんもメガシンカの脅威と可能性を認識しようだ。

「メガシンカか。人間とポケモンの未来を担う素晴らしいものだ。ただし、容易く超えられる壁とは思わないことだ」

「速い!!」

ジンダイさんはメガメタグロスを先につぶすことを決めたようだ。一瞬でメガメタグロスの背後を取るレジギガス。その速さは先ほどの比ではない。速度差に翻弄され

容易く背後を取る。

「たたきつける。レジギガスの巨体で振り下ろされる攻撃は、メガメタグロスを地面に叩きつける。地面は放射状にひび割れ、威力を物語る。さらに空いた手でかみなりパンチ。そのまま踏みつける。タイプ一致技のオンパレードだ。メガメタグロスは地面に埋まってしまふ。」

「無茶苦茶させるか！ウインディ、フレアドライブ」

「サンダース、10まんボルト」

「両方にはかいこうせん」

あつけにとられるが私たちは攻撃する。しかし、素早さを得たレジギガスは鬼に金棒だ。サンダースの十万ボルトをやや遅れて片手で放つはかいこうせんを迎え撃つ。ただし、威力はレジギガスが勝つ。はかいこうせんは10まんボルトを破り、サンダースに直撃する。

くそ、特殊攻撃の種族値はサンダースの方が上なんだぞ。

ウインディにもはかいこうせんが直撃する。ただ、フレアドライブが壁になり、ダメージを軽減してくれる。

「しんそく」

「アイアンヘッドだ」

私はしんそくで距離を詰めようとするが、カウンター気味にアイアンヘッドが突き刺さる。頭だけで放たれるアイアンヘッドは、迎え撃つ分には出が速いのか。

押し負けるウインディに隙が生まれる。そこに打ち込まれるかみなりパンチの連打。それでも私のウインディは落ちない。

「なかなかの耐久力だな！」

「ウインディ！ だいもんじ」

ウインディの苦し紛れに放つだいもんじが、レジギガスの足元に打たれる。直撃しなかったが、さすがにかみなりパンチの連打は止まる。

「そのままだいもんじに突っ込み、もえつきる」

巨大な爆発が起こる。

これが私にできる最後のあがきだ。もらいびに追加してもえつきる。私の出せる最高火力がレジギガスに突き刺さる。

煙から現れるは余裕そうなレジギガス。

「よいポケモンバトルであつたな」

「まだ！ 僕たちは負けていない！ メガメタグロス！」

「むー！」

メガシンカしたポケモンがそう簡単に落ちることはない。メガメタグロスは、意識の

外から現れ、レジギガスの背後に迫る。これにも超反応したレジギガスが振り向こうとするが、ウインディの放ったたいもんじによって崩れた地面に足を取られ大きく体制を崩す。

「メガメタグロス、じしんだ！」

「その技は!!」

本来であればじしんは地面に放つ技である。ただし、レジギガスほどの巨体であれば、直接じしんすら叩き込める。さらに鋼と電気を取り込んでいるため、ダメージは4倍だ。

あの巨体のレジギガスが宙に浮く。そのままフィールドを超え、川に落ちる。その姿にジンダイさんや実況席は驚愕の表情を浮かべている。これは急所にも入ったかな。

これが伝説か。これほど強いポケモンでもゲームではネタ扱いされるのか。未だ見ない禁止伝説扱いのポケモンがどれほどの強さが想像することもできない。

パチパチパチ。ジンダイさんの拍手が響く。

「本当に見事だ。君たちならどんな困難にも立ち向かえるだろう。正直子供たちだけというのはかなり心配だったのだ。少々遠いが、私の知っている安心できるコミュニティを紹介するつもりだったが、その必要もなさそうだ」

「ありがとうございます」

「だからこそ、ここで理不尽を経験するべきだろう」

「え？」

不穏な発言である。と同時に、川の中からさらに巨大な気配が感じる。

「本当にほめたたえよう。まさか寝坊助な私の相棒が起きるまで善戦するとは思っていなかったよ」

「マジかよ」

ここまで来てようやくスロースターターが解除されるのか。いや、気づける材料はあったか。いくらサンダースが早くても、私の知る限り最速のポケモンであるレジエキの素早さを持つていれば、レジギガスが技の出で負けることはないのだ。

これが伝説か。

川から現れる全力の絶望に、私たちは最後の力で挑むのだった。

当たり前だが、蹂躪で終わった。まず素早さが負けていて、耐久の低いサンダースが一蹴され、メガメタグロスが全力のたたきつけるに地に落ちる。多少時間があつたウインディは多少体力を回復させていたが、レジギガスの連打に敗北した。

あの巨体が、試合を俯瞰的に見ているトレーナーの視線を振り切っている時点で、や

ばすぎる。質量×速さの威力はトラックの衝突も優に超えるだろう。

これを受けて気絶ですむポケモンのなんと不思議なことか。気絶状態で攻撃されれば死亡する可能性があるとはいえ、将来はポケモンの方が平均寿命が上回りそうだな。などと他愛もないことを考えていると、動画のエンディングも終わる。

「強くなるうなウインディ」

「ガウー」

すでに回復済みの相棒も闘志に火をともしている。この世界は強くなくては意思を通せない。この仲間が欠けることなく過ごしたいものだ。

その後は一拍程度でジンダイさんは私たちの拠点を離れる。この間にお礼として、知識の塊であるアイ特製のスマホをプレゼントし、レジギガスの育成をした。スマホを見たジンダイさんはたいそう驚いてくれたが、同時に忠告もしてくれた。これだけの技術を持つアイを狙うグループは数多くあるだろうと。忠告をありがたく受け取る。

時間がなかったため、そこまで育成できたわけではないが、じこさいせいを覚えさせることが出来た。ゲームにこの技があればなあ。もう少し時間があればすごい特訓もできたのに。いよいよ私のチートもチートらしく成長してきたものだ。

今後ジンダイさんは海を越え、韓国の方に行くらしい。しかも泳いで。さすがに無茶だろうと簡易的な船をアイが用意していたが、動力がレジギガスに引張ってもらえない。

レジギガスがバタフライで海を泳ぐ様はシユールである。何でも韓国には古の炎の巨人の気配がするらしい。新たな伝説ポケモンかと、見てみたい衝動にかられたが、さすがに我慢する。もし出会えたら出来る限りの情報を送ってもらおうように交渉した。

そんなこんなでジンダイさんは、私たちの拠点から旅立っていった。

出会いがあれば別れもある。そんなポケモンの代名詞のような旅をいつかしてみたい。

唐突な訪問者は唐突に去っていった。

23話 月華

ジンダイさんが去ってから数日。ついにジンダイさんの言っていた事態になった。

「げへへへ。ようやく見つけたぜ」

林の中から現れたのは、数人の男たちだ。その手には銃が握られている。

その姿を私たちはため息をつきながら迎え入れる。向こうはこちらの反応を気にせず続ける。

「おいおい！上玉ばつかじやん。ちよつと楽しんでいこうぜ」

「そうだな。おい！こんなところにいても未来は見えているだろう？保護してやるよ」
「ちよつと楽しませてもらおうかな」

ああ、彼らは私たちの事を知らないらしい。このあたりに設置した監視カメラとマイクでこちらの準備は万端だというのに。さらに彼らは銃の力を過信して、ポケモンを連れていない。いや、ポケモンに好かれることもなかったのかもしれない。本当に下種な人種とは、ポケモンはパートナーに成れないのかもしれない。

適当な考察もそこそこに私は、指パッチンを鳴らす。すると、地面の隠し通路からグラエナたちが現れ、銃を奪い取る。

突然の事態に男たちは対応できない。私は無慈悲に告げる。

「はあ、まったく。さつさとあなた達のリーダーを連れてこい。グループで来ていることは把握済みです。それとも戦いますか？」

様々な所から私たちのポケモンが現れる。アイによってこの防衛陣地改は、奇想天外な仕掛けが満載である。もし、もう一度スピーアー戦があつたとしても、無理なく押し返せるだろう。

すべてのポケモンの敵意のこもった視線に、男たちは背を見せて逃げていった。

「所詮は小物よ」

「しよぼ」

「アイ君、ルチア君、ここからが本番なんだから」

「グラエナたちも十分育つたし、そろそろ次のステップかな参謀？」

「うん。これからのことを考えて、人の組織との連携は必須だからね」

だからこそ、舐められてはいけない。私たちは所詮子供の集まりだ。さあ、本場はここからだ。

「すみませんでしたー！」

「「すみませんでした!!」」

「えー、なんでさ」

リラの呆然としたセリフがむなしく響く。

赤いモヒカンの男のリーダー、カゲツを中心とした数十人が、私たちに頭を下げてい
る。カゲツはアブソルを、しつたば達も多くはグラエナを連れている。

我らが参謀リラの反応もよくわかる。相手はどんな手段を使つてきてもおかしくな
い集団だったはず。事実、カゲツは覚悟を決めた顔でやつてきたのだ。すぐに頭を下げ
てくれば、何事かと思うだろう。私たちの覚悟を返してほしい。

ちなみにカゲツはハウエン四天王のカゲツだった。

話を聞けば、あまりよろしくない若い下っ端が暴走しただけで、カゲツ達月華は善意
で生存者を集めているらしい。リラの読心術も嘘の気配はしないようだ。

月華の中には意図的にポケモンと触れ合わない人もいるようだが、ポケモンに選ばれ
なかつた人もいるらしい。そういう人は性格がゆがんで暴走しがちだが、危険な外での
活動では積極的に行動してくれているため、やむなく採用しているらしい。

ポケモンが全年齢対象であるためか、そことなくセーフティを感じる。

ジンダイさんの時も巨大なポケモンに危機を感じ、攻撃してしまったようだ。攻撃した本人たちもかなり後悔している。

本拠地には万単位で避難民がいるようだ。そして私たちに接触したわけもここにあらうらしい。

「アイの力を貸してほしい？」

「正確にはこの全員だな。もちろんこの本拠地から引越す必要もない。必要なら人も出す。急ぎインフラ整備を依頼したい」

何とかだましましたしやってきたが、かなり限界が近いらしい。それでも彼らのカシラはできるだけ人を助けたいようだ。そんな人柄にカゲツもほれ込んで、今では外部の間違ったのに若頭とまで呼ばれるまで尽力したらしい。そんな中、私たちの事を知り、こうしてやってきたようだ。

「その割には、お粗末だったな」

「すまねえ」

アイの皮肉にも素直に謝罪している。カゲツのことは信用してよさそうだ。リラに目配せをすれば彼女もうなずき返す。実際人手は不足している。少なくともトップの人は良さそうだし、ここは乗るべきだろう。

「ありがとう！此処にはオレの信用できる部下を付ける。大家族で親戚が多くて警察の家系のやつだ。生真面目すぎるのが玉に瑕だが、こういう状況には適しているはず」

一人の女性が出てくる。その姿に私とアイは驚きを禁じ得ない。

「巡查シロと申します。よろしくお願ひします！」

「ジュンサーさん!?!」

挨拶して敬礼する姿は、アニメでよく出てきた姿そのままだった。何でも親戚一同似た顔をしている女系の家系らしい。この様子だと、ジョーイさんも居そうだ。

24話 月華2

月華の本拠地まではかなりの強行軍であった。道中の安全はかなり確保されているようで、ポケモンに乗って急いで向かうことになった。ポケモンを扱えないものは、固まって帰還する。それだけ、切迫しているようだ。

私たちもウインディとチルルに分かれ乗り、他のポケモンはアイ特製モンスターボール（仮）に入る。未だ住み心地は最悪で、一日で使えなくなる試作品だが、今回は十分だろう。

そして半日程度で目的地に到着する。いずれ安全になればポケモンを使った移動は車を超えるだろう。そんな動きだった。

崩壊した町から少し離れたところに彼らの本拠地はある。すでに食料の少ない街中よりも、少し離れたほうが安全で多少の食料もあるようだ。ただし、得体のしれないきのみを危険視しているグループに保存食を、それ以外には野生に実るきのみを食料にしているようだが、これもすでに限界に近いようだ。

「ふむ。しかし、きのみが摩訶不思議なのは今更だが、安全性はもうほぼ証明されているだろう」

「アイさん。それは経験則だろ。そんなんじゃないんだよ」

「む？我ら博士グループの発表を知らんのか？大学教授の大木戸博士を中心に、すでに殆どのきのみの分子構造は判明している。すべてのきのみに生物の害する毒はない。むしろ、特殊な分子構造は生でビタミンや炭水化物、加熱すると脂質やたんぱく質になると、塩以外の必須栄養素を全て補えると食糧事情をひっくり返す代物だぞ」

「アイ?!いつの間にオーキド博士と面識を持っているんだよ」

「盟友よ今更か？もう数年来の付き合いだぞ」

「二人とも漫才してないの」

「そうか僕たちの活動もあまり広がっていないのかな」

「非常事態に娯楽の中心の動画なんて見る余裕なんてないのかな」

「あー。月華周辺は電波が通ってないんだよ。すまん」

そんな会話を挟みながら、目的に到着する。乱雑なバリケードは巨大で、殺気だった人たちが防衛している。万単位で人がいるだけにかかなりの大きさだ。

カゲツの姿を見れば、大きな門がゆっくりと開く。中に入れば様々な視線が突き刺さる。

「好意も敵意もある視線だね」

「正確にはポケモンに対してだねルチア」

視線に敏感な二人が保証している。この様々な視線には好意の方が多そうだが、確かに敵意もあるだろう。自分たちの生活を奪ったポケモンを連れてくる私たちに対する複雑な感情を感じる。だからだろう。拠点をかなり歩いたが、ポケモンを連れてくる人はかなり少数だ。カゲツ曰く、これでもかなりマシになったらしい。

ただ、あまり悠長にもしてられない。住民はかなりストレスをため込んでいそう。ここから生活基盤を整えるには、ポケモンの力は必須となる。ポケモンと一緒に行動することで、悪感情はできるだけ払拭してもらおう。

というわけで、散開して行動しよう。

「私はきのみの育成。アイは生活基盤の整備。ルチアは住民の協力者を作ってくれ。ダイゴさんとリラは頭さんと交渉を」

「了解」

「おお！すつげえな。ならこつちも人を出そう」

そういつてカゲツはテキパキ人を振る。割り振られた人が適した人物であり、細かいところで能力の高さを見せつけてきた。

S i d e ユウ

「じゃあ今日も頑張りましたよ」

「「おお!!」」

私と共に働くのは農家が中心であった。気のいいおっさんたちはノリもよく、指示してストレスがない。彼らも、きのみというものに興味はあつたらしい。それに益虫の有用性も理解しており、慣れればポケモンとのコミュニケーションも、スムーズになってきた。日をまたぐごとにきのみの農場は大きくなり、3日ほどで食糧事情を改善できた。むしろ、農家の技術を私が教わったぐらいだ。

さすがに敷地内だけでは不可能で外に広がった。さらにきののみにつられてやってきた野生のポケモンは、農家の人たちと絆を紡ぎ良きパートナーになっている。ここの維持も拡張も彼らなら十分できる。たった5日でモノにするとはい。さすが本職である。

Side アイ

「はひゃひゃひゃ」

「おい! アイ殿がまたイカれたぞ!」

「おひよひよひよ」

「こつちもいかれてるだ!!」

我に割り振られた要員は、工学部の学生から工業系の社会人など様々だ。我らの中で

一番人が多いだろう。それだけ重要視されているということか。

前々から思っていたが、人の能力が前世よりも高すぎる。ちゃんとした道具や環境さえ整えてしまえば、彼らだけでも十分やって行けただろう。我が出来るのは道具の提供と時計のの針をちよつと早めるくらいだ。

すでに最低限の設備は整えられ、娯楽方面にも手を出し始めている。

博士メンツもそうだが、熱中すると徹夜は当たり前な人種が多いのはおかしい。カゲツ殿の常識人の部下が初日からツツコミ要因になっていたが、そのキレも5日経つても落ちる気配はない。

殆どが5徹目だが、まだまだイケそうだ。さあ！イつてみよう！

「いい加減に寝ろ!!」

S i d e ルチア

「え、本当にいいんですか?」

「いいのいいの」

わたしはアイドルとして、みんなを元気づける。こんな世の中だと、下向いて生きるだけの人も多い。そんな人が元気になればわたしもうれしいし、全体としてもプラスの

はず。ついでにポケモンたちと仲良くなってほしい。だからこそ、初めは一番雰囲気が悪いところと決めていたんだ。カゲツさんの付けてくれたマネージャーには悪いけどね。

到着すれば、あまりの雰囲気逃げたくなる。それでも、わたしはアイドルだから。アイ特製のアンプを使ってマイクからハウリングを鳴らし、注目を集める。

「さあ！とりあえず聞いてね！」

5日後

「今日もライブの時間だよ！」

「「おおおおお」」

いやあ。みんなが笑顔なのはいいよね。でもちよつと集まり過ぎじゃない。昨日アイが作ってくれた会場は満員だし、拡声器がなかったら暴動すら起きるよこれ。ポケモンパニック前でもここまでのお客さんは居なかったなあ。

でもそれがいい。さあ今日も元気にするぞ!!

Side リラ (&ダイゴ)

「カシラ、入るぜ」

交渉役選ばれた(いつも)ボクは、カゲツさんに連れられてダイゴさんと一緒に月華のリーダーに会いに行つた。

カゲツさんがノックすると若い声が許可を出す。扉を開ければ豪華な机と椅子に座る壮年のおじさんと背後にたたずむメガネのインテリお兄さんがいた。

これは想定以上かも。インテリヤクザもどきは別にいい。かなりこちらを見下していそうで、敵意も隠せていない。正直小物だろう。

ただし、ボスさんはかなりやばい。表面上はかなりにこやかだが、一切油断していない。ルチア関係で芸能界のお偉いさんと会つたことがあるが、彼ら以上の厄介さと苛烈さを兼ね備えている。そして確かに優しさも持つている。そのうえで、必要とあれば犠牲も気にしないだろう。

ボクは自分の特殊性に悩んだことは多いが、今日ほどこの力を持つていてよかつたと思うことはない。ボクのような小娘ごとき、簡単に掌で転がしそうだ。

これがパンデミックで一大勢力を作る人物。自然と喉がなる。

そんな様子にボスさんは、苦笑いを浮かべると表面上は優しく声をかけてくる。裏では一切油断していないが。

「ハハハ。私のことはカシラでかまわないよ。実際苗字が頭だしね」

「リラさん緊張しているのか？カシラは優しいから問題ねえよ」

そういう問題じゃないんだけどなあ。ダイゴさんもすでに警戒を解いているし。ここはボクがしつかりしなきゃ。

するとインテリヤクザの方から声をかけてくる。

「ふん。これだから化け物を連れたバカはマナーも知らんらしい。月華内で勝手に若頭なんて言われて調子乗っているのですか？」

「ああ？てめえこそポケモンに好かれることもなかった分際で」

「あんな化け物に背を預ける気が知れません」

へえ、カゲツさん若頭なんて言われていたけど、正式なものではないんだ。これはこのインテリヤクザを揺さぶったほうが情報が貰えそうだね。

「おい」

ドスの利いた声が響く。たった一言で場が鎮まる。やっぱり甘くはないか。

「残念ながらリラ君の警戒は取れないようだ。ウチに入らないか。君みたいな人材が欲しいね」

急に勧誘するのはやめませんか。ほら、インテリヤクザの視線がやばい。

こちらにも逃げ腰になるわけにはいかないだしさ。

「ボクはユウたちの参謀だからね。お断りさせていただくよ」

「残念だ。では遊びはここまでにして、内容を詰めていこう」

こうして食事会という名の交渉が毎日始まった。ああ、ボクの胃は無事に済むのだろうか。

ピチヨン

水滴がボクの顔に当たり。目を覚ます。あたりはコンクリートに包まれている。わずかな窓からは廃墟が見える。ボクは猿ぐわに椅子に縛られて身動きが取れない。ブイズも縛られ転がされている。何やらカメラが一台立っている。

ここは？ 確か交渉も5日目に差し掛かりかなり具体的な内容になり、やつと胃を痛める交渉から解放されると思って油断していたかな。せめてダイゴさんを連れていけば。

問題はどちらかだ。あのインテリヤクザらしい暴走の仕方だが、カシラさんが関わっていないとは言いい切れない。あの人ならプラスになるなら平然と行うだろう。

「ザザザ…いい気味だな」

どこからかマイク越しの声が聞こえる。あのヤクザは確定と。

「化け物使いは奴隷のようにわれわれ人間に従えばいいのだ。実際君の化け物も君が人質になれば抵抗しなかった。所詮化け物。それにしてもカシラもちやんと分かってく

れた。私の行動に理解を示してくれた。やはり次期頭は私なのだ。クククハハハハ」
笑い声を機にプツッリ切れる。カメラで僕の様子を監視しているだろう。力も入らない。相当強力な薬でも使われたかな。

最悪もある、か。後は頼んだよりーダー。

25話 月華3

ついに月華での生活も6日目に突入した。そして私たちは、とある廃墟に呼び出されていた。何でもリラとカシラさんとの交渉が成立し、その交渉のアイテムがそこにあるらしい。

交渉はリラに一任していたので、何を貰おうとしていたかまでは知らないが、リラが無駄なものを貰うわけがないだろう。

ただ、わざわざ雨の中呼び出さなくてもいいだろうに。後日ではいけなかったのか。さすがに6徹は無理だったのかアイは布団に沈んだが、ルチアやダイゴさんと一緒に向かう。

目的地は廃墟のビルが立ち並ぶ場所だった。少々月華本拠地から遠いが、ここに何があるのだろう。生き物の気配はするが、息をひそめている。私たちの連れているポケモンの気配に怯えているのだろう。私のチートによると、ゲーム換算でウインディは60レベルを、メタグロスは70レベルを超えている。それだけ強敵たちと戦い続けることを喜ばいいのか、悲しむべきなのか。それでも異常個体や伝説、準伝説に勝てる気がしないのは、それだけ数値以上のものが離れているのだろう。

目的地にはカゲツさんも居た。向こうもこちらに気が付き、何故か首をかしげる。

「なんでユウさんたちがここに居るんだ？俺はカシラに呼ばれただけなんだがな」

「私たちがカシラさんに呼ばれたんだけど」

この生活でカゲツさんともかなり親密になった。お互いにかなり砕けた会話になっている。そして、カシラさんも会った。何か底知れぬものを持っている印象だったが、表面上はにこやかで気のいいおじさんだった。だからこそ、騙す印象はない。

「それはねえ！私が呼んだからですよ」

ビルの影から何やらインテリヤクザっぽい人が現れる。誰かわからず首をかしげていると、カゲツさんから説明が入る。何でも月華のナンバー2らしい。カゲツさんがその地位にいないことに驚いたんだが。

そしてナンバー2さんは何用なのか。

「化け物使いはこれを見てください」

そうインテリヤクザが声を上げると、四方八方より武装した集団が次々と現れる。全員銃をすでに構えている。彼らのそばにポケモンは居なかった。

そして最後にはカシラさんが現れた。これは完全にはめられたか。

「なん…で」

「カゲツ。効率を考えればこれが最善なんだ」

無常に言い放つとカシラさんは口を閉ざす。代わりにしやべるのはインテリヤクザの方だ。

「邪魔なんですすよカゲツ。ついでに化け物を使役している君たちも。我々人間は生物の頂点なんですよ！なぜ駆除ではなく手を取り合うのか！全く分からない!!」

「どうでもいい内輪もめに私たちを巻き込まないでいただきたい。それにリラはどうした!!」

そう、ここにはリラがいない。こいつらが何かしたのは明白だ。

返答は大きなモニターに映し出された。ぐったりとした様子の縛られたリラだった。

「「な?!」」

「君たちは能力だけがありますからね。これからも私が使つてあげますよ。彼女はこの周辺の一室に監禁させてもらいました」

わざわざ隠し場所のヒントを晒すとは、よほどの自信家か。ただ、ここを何とかすればどうとでもなる。悪いがさつさとアイを連れて退散させてもらおう。

ダイゴさんとアイコンタクトを取る。

「おっと！無駄な抵抗をしないで頂きたい。ここにいない彼女も犠牲になりますよ」

「屑が」

アイも向こうに取られているのか。しかし今の状況ならともかく、いずれ挽回の機会

は無数に訪れる。それほどまでポケモンの力は大きのだ。ポケモンの力を過小評価しているこいつらにはわからないだろう。

インテリヤクザは何やら内ポケットから取り出す。なんかのスイッチか。嫌な予感がするぞ。ウインディ、しん

「それでもいざれ反抗されそうですからね。我々の本気を見せなければ」

ドゴーン!!!

あるビルが爆発し、吹き飛ぶ。モニターも完全に沈黙した。

「は？」

「おい!!」

「頭、落ち着いてください。人質はもう一人います。それにあの頭脳は今後の障害になります。ここで摘み取るのが最善ですよ」

私の理解を超えた。私の耳には雨音だけしか聞こえない。は？あいつらはナニヲ、ナニヲシテイルンダ。

理解した瞬間、怒りにより真っ赤に染まった。それは私だけに留まらず、ウインディにも流れていった。ヘイガニ戦からあさのひざしを常用していたウインディ。その身には莫大なエネルギーが内包していた。今までのウインディには力を使うことはできなかつた。ただ、怒りをきつかけとして、ウインディの中にあつた枷が強引に引きちぎ

られる。

巨大で青黒い炎が立ち上る。炎そのものからは熱は感じない。いや、炎に触れた雨は一瞬で蒸発し、折れた電柱が触れれば一瞬で溶解する。熱を完全に操っているのだから。

青黒い炎が晴れば、現れたウインディ。体格は二回りは大きくなっただろう。たてがみも含めてかかって白かった毛は真っ黒に染まり大きく増量している。所々青い毛がコントラストを生み出している。オレンジっぽかった毛は黒めの赤に染まり、ユウたちは知らないが配色はヒスイの姿に青黒さを混ぜた姿だ。

異常個体ウインディ。この世界で初めてのトレーナーのポケモンが異常個体に至った例である。

目の前が真っ赤だ。この世界に転生させてきたあいつらの精神操作のかけらも感じない。

ルチアやダイゴさんが何か言っているが耳に入らない。

ただ、殺すべき存在だけよく見える。

「化け物が!!討てえ!!」

インテリヤクザの掛け声で、ウインディに弾丸が撃ち込まれるが、意味をなさない。触れた瞬間に金属が蒸発してダメージにならないのだ。人間の科学では今のウインディに傷をつけることはできない。ウインディの選別の下、すべてを焼き尽くす。例外はウインディが選んだものとポケモンのみである。ポケモンという独自のルールは物理法則を超越するが、ポケモンを持たない彼らに例外はない。

ただ、焼き尽くすのみ。

「使い手を狙え!!」

小賢しい。ウインディほのおのうず。

青黒くなったほのおのうずが私たちの周りに展開される。銃弾は届かない。熱も私たちが感じない。後はもうコロスダケだ。

「この!落ちて着けて言っているでしょうが!!」

ルチアの頭突きが私に突き刺さる。予想外の攻撃に私も目を白黒させ、ウインディも技を失敗する。ほのおのうずが消え、私たちがさらされた姿に銃弾が撃ち込まれるが、強力なメタグロスのリフレクターと、サイコネシスの前に地に落ちる。

「ここ」で暴れてどうするの!!アイまで殺されるよ!いつもの冷静なリーダーはどこ行っ

たの!!」

ルチアのおかげで少し落ち着く。しかし、怒りが消えるわけではない。

「だからと言って拳を下ろせと言うのか!」

「そんなこと言っていない!すでにカゲツさんから部下へ緊急信号が行っている!時間はこちらに味方するの!」

カゲツさんの方を見れば頷いてくれる。さすがにカゲツさんを慕う部下は手下にできなかつたのだろう。この場にはいないのがいい証拠である。そもそもポケモントレーナーを見下しているみたいだし。

冷静になれば、確かにこちらに好転してくるだろう。だからこそ今度は無力感が沸いてくる。仲間をこんなことで失うなんて。私がつと。

ルチアの右ストレートが突き刺さる。

「この馬鹿リーダー!リラもアイも居ないからわたしが言うけど!ユウはリーダーだよ!!こんな戦場の真ん中でうつむいている暇はない!わたしたちが付いて来て正解だった!命を賭けて正解だった!その姿で見せつけるのが!わたしたちのリーダー!ユウだよ!!」

「……………まったく。気軽に命預けないでよ!」

「だから全員で背負うんでしょ!」

まったく女ってやつは強いなあ。気合を入れるためにも頬を叩く。

「すまん助かった！ダイゴさんもカゲツさんも」

「いやあ。改めてユウ君に背負わせていることを自覚させられたね。その謝罪はいらな
いよ」

「ああ（女って怖え）」

立ち上がれば、しかし、いまだ状況は変わらない。途切れなく弾丸が撃ち込まれている現状、メタグロスの四方の壁を取り除くことはできない。従ってウインデイも攻撃に移すことが出来ない。あなをほるでもその残った穴から反撃される可能性を考えると、安易には使えない。

かと言ってこのままにするつもりもない。

「どうするのリーダー？」

「横も下もダメなら上しかないだろう？ウインデイ！上空にかえんほうしゃ」

特大の青黒い炎が、上空の雨雲を突き抜け、吹き飛ばす。暗くよどんだ空は一気に快晴となる。これが目印になれば、カゲツさんの部下もすぐに来れるだろう。

フオオオオ——ン

晴れた大空に、聞いたことのない声が響く。ウインデイのかえんほうしやでその場に
いる全員が空を見上げていたからか、この甲高く気高い声に、姿に戦いの手は止まる。
空を優雅に飛ぶポケモン。その姿は自身の熱によるためか黄金に輝いて見える。
にじいろポケモン。ホウオウ。ジョウト地方に伝わる伝説のポケモンだ。

そしてその姿に呼応したのか、いまだ黒い煙が立ち込めるビルから黄金の輝きが満ち
おる。

「これは奇跡か」

「うっそ」

「虹色の羽は確かにリラの下にあったけど」

たしか、ブイズとの出会いでリラは虹色の羽を手にしていた。所詮はゲーム内でホウ
オウと出会える可能性があるアイテム程度の認識だった。

黒い煙から一人と三匹が現れる。

「さあ行くよ！スイクン！ライコウ！エンテイ！」

クーン！

まず地上に降り立ったのがスイクン。一瞬で周りに霧を発生させる。この霧には粘
性を付与できるのか、敵の動きを阻害する。

シャー！

次に降り立つはライコウ。目にもとまらぬ速さで走り抜ければ、電気により銃を使えなくさせ、さらに動きもマヒさせる。

ウオン

最後に降り立つはエンテイ。その声は熱を持ち衝撃となって伝わる。わざわざ殺さないように手加減したとしても伝説。手下たちは意識を失う。

いつの間にか戻ったライコウに乗ったリラが優雅に地面に下りる。いつも見慣れている私たちが、声を失っている現状だ。インテリヤクザも同様だ。しかし、カシラさんは違った。素直に両手を上げている。

「リラ君の好きにするといい」

「そう」

リラはそれ以上何も言わなかった。一番の被害者が一言で終わらせているのだから、私たちも怒りを飲む。

ただし、空気の読めていないインテリヤクザ。戦力差も状況も見ずに吠える。

「ふ、ふざけるな！ま、まだこちらには人質が」

「ほう？それは我の事か？」

いつの間にかフロストロトムの上に座るアイの姿が。無事だったようだ。本人はかなりご立腹のようだ。まあ、今回は知らずにすべてが始まりすべてが終わったのだから

当然か。

インテリヤクザは最後にカゲツさんに縋る。

「なあカゲツ！このままだと月華は終わるぞ！私と共に行こう」

「歯あ食いしばれ！下種野郎!!!」

カゲツの拳がインテリヤクザの捉え、衝天させる。

こうして怒涛の一件は幕を閉じた。

26話 月華4

あの怒涛の一日から一夜明け、月華の住民たちに、結局何も知らさることはしなかった。暴走したのが一部であり、大多数は無関係だった。たとえ、この一件がインテリヤクザの思い通りになったとしても、遠からず破綻していただろう。

ただし、月華の構成員は違う。今回のことを重く受け止め、ポケモンに好かれぬ人物は実権から遠ざけるといふ大胆な方針転換に出た。これは正式にポケモンと歩むとともに、大規模な組織でもポケモンと歩めるといふモデルケースになってもらった。

モデルケースとして恥じない姿を見せるため、構成員がモラルに反する行為をした場合は、かなり厳しめに対処することになった。脱退メンバーも居たが、全体では多くはない。いや、そういう人物はあの事件にかかわっていたのだろう。

もちろん私たちに対してもかなりの援助を約束してくれた。このご時世お金は意味がないので、労働力をかなり借り受けることになった。特に私も教育するが、ポケモンとチームを組み、周辺の治安維持部隊にはかなりの期待を寄せている。

農家部隊も様々な所で畑を作り、いずれは食料での争いが無い環境にしたい。

他のメンバーも思い思いの無茶ぶりをカゲツさんにしていた。

そう、新しく月華の頭としてカゲツさんが就任した。本人はかなり嫌がっていたが、周りの期待もあり本人の責任感もあり収まるべくして収まった。ただ、かなりフットワークが軽く、よく私のところに愚痴を言いに来ていた。リーダーとして弱みを見せにくいのは分かるが、実年齢10歳の小学生に相談するんじゃないやありません。

そして私たちの新たな力を得たポケモンたちの事もよく分かってきた。

伝説の三犬は、さすが準伝説の力を持っている。全員がゲームの設定と類似しながら拡大解釈した様な固有の能力を持っている。スイクンは霧を操ったり浄化能力ですべての状態異常を癒したり、ライコウは体内で常に高圧の電気を生み出し背に貯めることで最速の攻撃を可能にし、エンテイは地面からエネルギーを吸収し地面に足をつけていれば無敵の要塞と化す。

ウインディは私のチートによる数値上で体力が20、防御が20、特殊防御が20上昇している。上昇率はメガシンカには及ばない。ただ、異常個体の本質は能力にあつた。ウインディの力は熱を操ることで、応用すれば氷の技まで使える。イメージは攻撃するときだけ、追加で炎タイプと氷タイプが追加されるようなものだ。氷技は1.5倍、炎技は2.25倍まで威力が上がる。攻撃を受けるときは炎単タイプになるぶつ壊れ能力である。常に1/8の回復能力も持っている。

実際の戦闘でも相性差もあるだろうが、レベル的には格上のメガメタグロスに対して異常個体のウインディが圧勝するようになった。力関係はメガシンカよりも異常個体の方が強いことを実感できる。

対してスイクン、ライコウ、エンテイ達(準)伝説と異常個体のウインディはどっこいどっこいである。

つまりポケモンは、

一般ポケモン \leq 野生のメガシンカ \leq トレーナーとのメガシンカ \leq 準伝 \parallel 異常個体 \leq 伝説のポケモンという力関係があるみたいだ。

さらにこの上に、生まれながらの異常個体である準伝説のポケモンと叩き上げの異常個体では経験も違うだろうし、レベル差もあるだろうし、相性もある。

一概に最強を決めるのは難しいだろう。ただ、目安にはなる。

今回の出来事をぼかしながら、配信で伝えていく。また今回の経験で誰でもできるきのみ講座も開設し、少しでも食糧不足を解消させたい。

波乱万丈だったが、結果だけ見ればいい方向に向けたのだろう。

S i d e カゲツ

ユウたちはとつくに自分たちの拠点に戻っている。希望してきた何人か人を連れて
いるが、そろそろ拠点に着いたところか。

俺 は離れにある鉄の牢獄に来ていた。ユウたちは怒りを飲んでくれたが、彼らに配
慮して滞在中はここに来ることはしなかった。いくつかの大部屋で構成されているが、
他人との共同作業が彼らの罰になるだろう。もともと性格に難がある奴ばつかなの
から。

そんな中、一つだけ個人の部屋が用意されている。かしら、いや、元頭の牢獄だ。分
厚い鉄の扉に背を預ける。

「なあ、なんで事を起こしたんですか」

「……言っただろう。これが効率的だと。ここから先ポケモンとの融和は最優先だ。特に
月華は人数が多い。不和が広がれば全滅もあり得た。だからこそ癌は早急に切り取ら
ねばならなかった」

「でもあんたなら」

「時間は有限だ。どんな襲撃が起こるか分からない現状悠長なことはしてられん。バカ
者と一緒に心中して、希望を繋げられるなら本望だ」

「……………」

「あとは好きに道を作るがいい」

「…ああ」

鉄の扉からカゲツは離れる。見えないのは分かっているし、言葉にするのも頭として許されない。ゆえに扉に向けて軽く頭を下げると、出口に向かって歩いて行った。

「ユウ君の見せてくれた異常個体だったか。同じ異常個体でもサシであの時見た三つ首竜に敵うとは思えん。が、それを覆すのが知恵であり絆だ。人とは元来、群れることでその地位を保ってきた。そこに罅はいらないのだ」

扉の中で静かに独白するカシラ。パンデミック初日に、自身の優秀な息子と部下達を暴君に奪われた男は、それでも復讐ではなく希望への未来を望むのだった。

27話 肝試し

月華騒動から早一か月。そろそろ5月も半ばに突入する。ただし、こんな環境ではゴールデンウィークも存在しない。私たちも様々な所に出張して、休みなく働く。月華が安定したことで、行動範囲が拡大した。月華が周りを探索し、貧窮している場所があれば私たちは東に西に飛び回る。その道中で適当に木の実が育ちやすい土壌を作ることとで、九州全体の食糧事情はかなり改善しただろう。

九州の有名な組織のほとんどと私たちと面識を得ることが出来た。私は知らない人もいたが、アイ曰くリーダーのほとんどがゲームの登場キャラクターということで、能力の高さを思う存分発揮している。ただ、在野にもまだまだ有名人は多くいることだろう。そんな人達ともつながりを作ることとで、いずれは九州全体で一大組織ポケモン協会を作りたい。

現状では夢物語だが、完成すれば大人たちに運営を任せ、私たちもトレーナーとして大会に参加してみたい。そんな夢の実現のため奔走する中、カゲツから連絡が入った。私たちに依頼するのは珍しい廃病院の調査であった。

「調査を私たちに依頼するのは珍しいな。強力なポケモンがいるのか？」

『いや、初期探索はめんどくさそうだが人が人はいなかった』

「ならわざわざ私たちに依頼せずともいいのでは？依頼料は安くはないだろう？」

一応線引きとして、依頼には報酬を貰っている。アイテムや情報や研究結果など様々だが、ただではない。月華も余裕があるわけではないはずなので、自分たちでできる範囲は自力で行っていたはずだ。

『おめえら、前回の休暇はいつ取った？』

「……………10日前です」

『お前らの力が唯一無二なのはわかっている。野生ポケモンとの交渉も街の復興も今までは時間との勝負な所もあった。ただ、今はかなり安定してきている。ここいらで休暇まがいなことをしてもいいだろう。未だ10歳のガキなんだから』

「そういうえば10歳でしたね」

『おい！まあ、そんなわけだ。肝試しでも楽しんで来いよ』

「肝試しには早すぎる気がしますが」

せつかくの気遣いである。ありがたく頂戴しよう。

「そういうわけで来てみたわけだが」

「うん。僕も言いたいことは分かるよ。事前に貰っていた写真と違い過ぎるね」

事前に貰っていた写真には廃病院と言っても、ポケモンパニックで廃病院になっただけで、今からでも使えそうな病院であったはずである。そんな病院が何やらおどろおどろしい赤黒で染められ、黒いオーラが物理的に見えている。よく分からない現象で割れている窓からも室内の様子を見ることが出来ない。そして一番異様なのは入り口に「welcome」と書かれたカラフルな看板である。その横にはデフォルメされは魔女のアイが一人と一匹で入ってねなどとコメントしている。そしてアイは仕事の関係で現場に前乗りすると聞いている。今はどこにもいない。

「あの楽しそうな声色から察することが出来ただろうに。参謀失格だね」

「ねえ、まさか本当にここに入るの!!」

「「もちろん」」

「なんでみんな楽しそうなのさ!!!」

ルチアの悲痛な叫びが響き渡る。ただ、誰も反応しない。アイのことだ。ムカつくぐらい安全面は配慮していることだろう。

「ウインディ。一番に行くぞ」

「じゃあ二番目はボクだね。連れていけるのは一匹までらしいから、前回の任務で出番がなかったライコウに頼もうかな」

「メタグロス、お化け屋敷っていうのはね……」

「ねえ！なんで一人ずつ入る必要があるの！！みんなで行こうよ！！！！」

「「看板に書いてあるし」」

「イヤー!!!」

S i d e ユウ

病院内もかなり改造されている。看板には上を目指すように書いてあったので、素直に向かう。隣のウインディも一切怖がっていない。むしろ雰囲気を楽しんでいるようだ。

暗く薄暗い廊下に一気に青白い炎がいくつも現れる。唐突に生まれた炎に本来なら驚くはずが、私もウインディも戦闘勘ですぐさま正体を見破ってしまう。

「ヒトモシか。へえ、九州にもいるんだな」

「ガウ」

強すぎる感は、こういう場を楽しむことが出来なくなってしまうかもしれない。それでも周りに潜むポケモンたちは真剣に楽しそうに潜んでいる。その様子にこちらも楽しくなってきた。さて、折角の休暇だ。存分に楽しんでいこう。

S i d e リラ

「へえ。ゴーストタイプって愉快的なポケモンが多いんだね」

ボクは自分の特殊能力でお化け屋敷を純粹に楽しむことはできない。それは今までもこれからも変わらないだろう。昔ユウたちといったお化け屋敷もそれなりで終わってしまった。むしろ、怖がらせようと頑張る職人たちの心意気の方が楽しかったぐらいだ。

だからこそ、今回はとても楽しい。たくさんのポケモンたちが真剣に遊んでくるのだから。

そして、隣も面白い。自分は伝説になったのだからと気を張るライコウの内心はかなりビビっているのだから。かみなりを現していると思われるギザギザの尻尾がふにやりと垂れ下がっている所なんて、かわいらしいとしか言えない。

それはそれとして、こういう時だからこそ言えることもある。

「ライコウ。確かに君は強力な力を手に入れた。力を持つものには相応の責任もある。だからと言って常に気を張っていたら疲れちゃうよ。適度に気を抜かないとね」

最近ボクのポケモンたちは急激に力を手に入れた。それもどちらかと言えば外部か

らの影響である。自力で得た力でないためか自信があまりない。その分頑張りすぎる姿が散見できた。こういう息抜きは確かに必要そうだ。エンテイ、スイクンにも今度話す機会を設けてもいいだろう。

「だから」

バンバンバン
!!!!

「シャ?!?!」

急にガラス窓に人型の手が無数に現れる。突然現れた手形に驚いたライコウは、かみなりをぶつけると思いつき飛び上がって頭を天井にぶつけて悶えている。かみなりに無傷なガラス窓など言いたいことはあつたが、それよりもライコウの慌てふためき方に思わず爆笑してしまった。

その後機嫌の傾いたライコウを半笑いでなだめるのだった。

Side ダイゴ

僕の相棒はかなりの臆病なのかもしれない。恐怖のあまり自力でメガシンカすれば誰だつてそう思うだろう。自力のメガシンカは自分にかんりの負荷をかけ、さらに能力の上昇率もよくない。その分回復能力があり、すぐに体力を半分くらいは回復する。今

はその回復能力が欲しいのか、自力のメガシンカに固執していた。普段のクールな姿からは想像のできないものだ。

それにしても、相棒のこんな姿を僕は今まで知らなかった。それもこれも今まで日常生活があまりに少なかったからだろうか。これからはこんな生活も多くしていきたいなあ。

そんなつぶやきに、背後を警戒していたメガメタグロスが驚愕な視線で僕に振り替える。

僕はそんなメガメタグロスを撫でるのだった。

S i d e ルチア

「ぐぐぐ、みんなスイスイ行っちゃうし。アイドルがお化け屋敷が怖い？そんなことはあり得ない！」

「チルル！」

「だから行くよ！チルル」

「チルル」

そしてどちらも動かない。譲り合いの精神って大事だよ。そうなんだよ。だから

かれこれ10分は入り口で止まっているけど、大事なところなんだ。

そんなわたしたちに業を煮やしたのだろう。多分こんにやくだろう。ひんやりして滑つとしたものが首筋に当てられる。

「ピギャー!!」

わたしたちが地獄が手招きしている入り口に突入するのだった。

「ギャー! いろんな炎が追いかけてくる!!」

時には様々な炎に追われたり。

「突然電話が鳴った!!」

部屋に入れば突然電話の音が響き。

「窓から黒い手がどんどん現れた!!」

かぎづめ状の手が現れたり。

「骸骨の顔が急に!!」

天井からすり抜けたヨマワルの顔に驚いたり。

「人体模型がばらばらに」

もはや学校にあるはずの人体模型が置いてあるだけだったり。

様々な刺客に、わたしたちは行き絶え絶えだった。もはや走る余裕もすでない。わたしもチルルも地面にへたり込んでいる。

「いやあ！十分楽しませてもらったぞ」

「うんうん楽しかった!!」

野生のゴーストポケモンたちはすでに解散している。

仕掛け人の二人もずいぶん楽しそうだった。アイの横には健康的に日に焼けた私たちと同じくらいぐらいの少女がいた。名前はフヨウ。ゲームで四天王を務めていた少女である。

少し前に仲良くなった二人は、折角の機会と合流し今回のイベントを開催したようだ。二人の背後にはヨノワールとギルガルドが楽しそうにしている。ヨノワールはフヨウのポケモンだが、ギルガルドはアイのポケモンだ。ゲームでも最前線を走りぬいたポケモンだ。いつの間にかアイの戦力が強化されていた。そしてもう一つ私たちの戦力は強化された。

「アイ!!」

「うむ！いい反応がよかったぞ」

「アイ!!」

「まあまあついに壁を破れんだし。メガシンカおめでとう」

私のフォローはあまり意味をなさないうようだ。メガチルタリスもルチアも恨みを籠った視線がこちらにささる。あまり触らない方がよさそうだ。

フェアリータイプともこの追加されたチルタリス。もはや、チルトのノーマル飛行の面影は存在しない。メガチルタリスの実力はすでに背後にある完全に壊れた病院が証明している。アイも一応様々な防御仕様にしてはみたのだが、音攻撃の前には意味をなさなかったようだ。

いつの間にかアイとルチアのポケモンバトルに発展している。すでに十分ギルガルドもメガチルタリスも十全に動いているようだ。この二人はそのままにしておこう。そして、残った者たちで廃病院の後片づけをするのであった。

後日

カゲツから廃病院の魔改造について文句の連絡がきたが、十分楽しませてもらったといえれば引き下がってくれた。なぜか報酬はなくなっていたが。

28話 クラゲ進軍

梅雨はめんどくさい気持ちにさせる。雨だけでもめんどくさいのに、今年の梅雨はポケモンたちにどのような影響を与えるか分からないからだ。それを言ったら、四季全てが危険かもしれないが、それでも梅雨はかなり神経質に監視していたのだ。だからこそ今回の騒動の初動に気が付けたのだろう。

「メノクラゲの大量発生？」

『ああ、とある港町でメノクラゲが大量発生しているらしい。おかげで漁に出向できていないそうだ』

恒例のカゲツとの連絡会。その中で不穏なセリフが含まれていた。

「メノクラゲだけなら何とかかなりそうだけど」

『ゲンジさんとポーマンダが今回の収拾に赴いたんだが、敗北したそうだ』
「?!」

ゲンジさんとは四天王のドラゴン使いである。ポケモンパニック初期から港町を中心に活動していたおじさんであり、その冷静な判断力と実力で九州の海を守る存在である。

私たちもゲンジさんに初めて会ったときにドラゴンタイプの珍しさから、比較的人に肯定的なフライゴンを触らせてもらったが、それでも背には乗せてもらえなかった。そんな気の難しいドラゴンタイプを3匹（ボーマンダ、フライゴン、キングドラ）を操る真正正銘の実力者である。個々の実力はまだ低く（それでもレベル50は超えている）、メガシンカも取得していない彼が負ける要因は限られてくる。

「野生のメガシンカによる異常回復か、準伝説や異常個体や伝説の能力か」

『夜間に赤く輝く3つの光。体調は40Mほど。そして大量のメノクラゲを率いている。ここから導き出されるのは』

『『異常個体ドククラゲ』』

カゲツも予想はしていたのだろう。そして、彼らに対抗するには匹敵する力をぶつけられない。現在メガシンカを使えるものも少なく、使えるものも自分の町の防衛のため、離れるわけにはいかない。私たちに声をかけたのはそれが理由だろう。

『他の援軍も何人か声をかけている。頼めるか？』

「断れない依頼は依頼ではないぞ。報酬は奮発してくれよ」

『ああ！最高のAVを用意しよう！』

「それ止めるよ!!普通の報酬に当たり前のように紛れ込んでいて、女性陣の冷たい視線がやばかったんだぞ!!」

『中身は普通のアニメビデオだぞwww』

「なら目録にAVなんて書くんじゃないやねえ!!!」

ちなみに動物の構造や狩りの様子は、私のポケモン育成をさらに一段高いものにするので、やめるつもりはない。

「海だー!!」

「だー!!」

数日後、私たちはとある港町に来ていた。かなりの発展具合であり、元研究所を利用した工場は化学製品を中心にしており、莫大な利益を上げているらしい。そのおかげか、かなりの人口を誇っており、普通に街中にポケモンと人が共生できている。

「それにしてもよかったのかフヨウ。ここにきて」

「全国お化け協会（6人）は現在開店休業状態！つまり暇なのだ」

安定してきたとはいえ、そんな仕事で生活が成り立つのか。などと思っているとアイから補足が入る。霊という今まで存在が確認できていなかったゴーストポケモンたちに有効な手段を持っている者たちは大変重要らしい。街づくり初期は墓地の位置など大変お世話になる存在らしい。そして今は新しい街が生まれていないから暇なだけで、

人やポケモンが亡くなれば、すぐに仕事が舞い込むということだ。お坊さんの亜種のよ
うな仕事のようなのだ。

え、九州全土を6人で回すととなると、逆にかなりの激務になるんじゃないや。

私がひそかに戦慄していると、リラから質問が入る。

「で、どうするの」

「なんでも他の援軍をここで待つてゲンジさんの所に向かうらしい」

「その通りさ☆」

キラーン!!

そんな擬音語が流れるようなセリフが背後から聞こえる。ああ、こいつが来ているの
か。

帰ろうかな。

「叔父様?!」

「やあ! ルチア。そしてご一行! みんなのアイドル、ミクリだよ!」

「キューン」

ポケモンパニック前からトップアイドルとして存在していたルチアの叔父であるミ
クリとミロカロスである。その付き合いはパニック前からであり、私たちをTV関係者
に勝手に紹介した大バカ者だ。本人は善意しかないところがさらにたちが悪い。そし

て、ダイゴさんの同級生だということを知ったのは最近である。

「ミクリはどこでもアイドルだね」

「ダイゴだって石への愛は変わらないだろう」

何やらお互いに握手している。もう勝手にしてほしい。ミクリ独特のミクリワールドはあまり得意じゃないんだ。そしてこいつがいるならあいつもいるのだろう。

「アツハツハ！ヒースも居るのさー！これで注目も喝采もヒースの物」

「ラグー！」

はあ。この自信家もいると。ヒースとラグラージは何やらポーズを決めている。そしてこいつは何か突掛かってくる。何でも私たちの人気が気に入らないらしい。初対面の第一声が子役の寿命は短いものさ！なんて言うってくるのはこいつくらいだろう。

二人とも邪魔ばかりするなら邪険に扱えるが、非常事態には冷静に対応でき、能力も高く悪い人ではない。せめての抵抗としてため口を使っているが、むしろ二人とも楽しんでるふしすらある。

めんどくさいので参謀にでも押し付けようと探すが、リラはもう一人の援軍と話しているようだ。

「へえ？ 楽しそうな光景だね」

「……………」

「ナギならできるとよ」

「……………」

「その意気だよー！」

なぜ会話がつながるのか。一人気ままに旅をする少女ナギは、エアームドの背に乗ってよく空を飛んでいるので、寒さ対策か、よく分からないゲーム時の服装を常用している。このエアームドは他の個体よりも大きいのが、一応個体差であり異常個体ではない。

「ハイハイ！全員揃ったのでゲンジさんのところに行きますよ」

「「はーん」」

返事は立派だな。おい。

ゲンジさんの下に訪れれば、毒に侵されていたゲンジさんとポケモン三匹がいた。事前に聞いてはいたが、私のお手製のモモンのみですら、解毒不可能な猛毒を相手は使ってくるらしい。

リラのスイクンの状態異常回復により、毒を抜くことが出来たが、今回のバトルにゲンジさんは参加できないだろう。

ただ、戦闘情報は大いに助かった。

メノクラゲは数が多いが、そこまで脅威ではない。町の被害をキングドラ一人で抑えることが出来たみたいだ。

そして肝心の異常個体ドククラゲだが、毒を纏っていない通常の触手に触れただけでフライゴンは猛毒状態になった。そして技に触れるだけで異常個体特有の猛毒（超猛毒）に侵される。ボーマンダの翼にドククラゲのたたきつけるがかすただけで、超猛毒に犯されたようだ。

奇妙な点があり、どれらで避けてもどれだけ離れても一切毒技は使わなかった点だ。ここが特に大きな弱点になりそうだ。

作戦としては街に被害は出せないで、数と質のあるリラが防衛。同じ異常個体で壁役になれる私がメイン盾。熱操作で氷の足場が作れるとは言え、ウインディの補助役にルチアとナギ。メインアタッカーのダイゴさん。サブアタッカーのヒースとミクリ。アイはいつものごとく環境作りに動いてもらう。誰かが毒になれば後方で防衛しているスイクンに治療してもらおう手はずになっている。この隙間埋めに変幻自在のゴースト使いであるフヨウがいる。後は臨機応変に行こう。

29話 クラゲ進軍2

太陽も沈み、海は街の光により薄く照らされている。そんな薄暗い海に一つまた一つと赤い光が浮かび上がる。その数はどんどん増えていつの間にか海が赤で染められていく。沖の方にはひとときわ大きい光点が現れる頃に、先頭集団が姿を現してくる。

無数に等しいメノクラゲの大群であった。

S i d e ユウ

まずは情報通りか。異常個体ドククラゲとメノクラゲの間には大きな間が空いている。これは、巨大すぎるドククラゲの攻撃にメノクラゲが巻き込まれないようにするためだろう。

水上で高速で自由に移動できるようにとアイに作ってもらった水上ボートのエンジンをかける。すでに目の前をメノクラゲたちは通り過ぎていく。もうばれてもドククラゲとの距離が近すぎるため反転はしてこないだろう。

水上テントで隠れている時はバレるか不安であったが、アイはこのテントにも細工をしていたようだ。エンジンがかかるとともにテントが割れていく。

「行くぞウインディ！」

「ガウ！」

水上に四つの影が現れる。私とダイゴさんとヒースとミクリが同時に飛び出す。4人とも水上ボートは熟練者ではないのですぐに散開する。事故防止である、空にはエアームドに乗ったナギとメガチルタリスに乗ったルチャとロズレイドが飛んでいた。

同時に海上が明るく照らし出される。夜とは思えない明るさに視界は良好。海中に浮かぶ光源は半日は持つだろう。

今回の私たちの仕事はメイン盾且つ回避も求められる。当たれば超猛毒に犯されるだろう。ヘイトも稼がなくてはいけない。

「成長しても難易度が上がったんじゃないじゃ変わらず苦労することになるな！ウインディ！れいとうビーム」

青く輝く光がドククラゲの足元を凍らせようとする。これで触手を使えなくさせれば簡単に事が運ぶのに。

フラグを立てたつもりはないが、さすがの巨体である。20mの巨体は相応の力も持っていた。簡単に拘束を砕いていく。

さて持久戦の始まりだ。

Side ナギ

人は嫌いだ。無駄な会話になぜあそこまで執着できるのか。世界は意味のある会話だけしていけばいいと本気で思う。そんなことを思っていたからポケモンパニックが起こつたら、気の合うポケモンをパートナーにして、後は自由気ままに旅をしていた。

もう4か月分は一人旅を楽しんでいる。この旅で一番最初に思ったことは、人は一人では生きていけないということだろう。いやポケモンパニック前も恵まれていただけで、決して一人では生きてはいなかったのだろう。恵まれた環境が勘違いをさせていたのだ。

そんな勘違い娘が大ボカをするのも必然だったのだろう。

ある雨の野宿の時に、野生の縄張りに入った時だった。鋼の体により体重の重いエアームドが雨のせいで十全に飛ぶことが出来なかったため、野生の群れに殺される時だった。

雷鳴と共に三犬を連れた年下の少女に助けられたのは。絶体絶命だったからこそ、その姿は本当に輝いて見えた。

そんな彼女に今までロクに会話をしてきたことのない私ではとつさに感謝を伝えられなかった。彼女は自身の特殊性から、気にしないでと助け合いだからと気軽に言うてくれた。それから私が先日気まぐれで助けた村のお礼だとオレンのみをくれたのだっ

た。

今でも人はあまり好きではない。会話も得意ではない。でも大切なものとして認識できたし、いずれ自分の口から感謝を伝えたい。

だからこそ人助けもするし、こんなところで死ぬ気もない。

巨大なドククラゲは巨大ゆえに隙間も大きく、私には無数の航路が見える。その一つを通ればドククラゲは簡単に翻弄できる。背後を取れば大技を仕掛ける。ブレイブバード。

ドククラゲに当たる前にエアームドの背を蹴り宙に身を晒すことで、エアームドは私を気にせず全力で攻撃を仕掛けることが出来る。技を終えたエアームドが必ず拾ってくれるから、海に落ちることは考えない。海面ぎりぎりまでエアームドに乗り込む。

空は私にとって自由の象徴だ。人助けも自由だ。だから今日の空も素晴らしいものなる。

Side ルチア

え、すご。ナギちゃんの身のこなしを見たわたしの感想である。わたしがチルルの上に乗るのは見栄えがいいのもあるし、バランス感覚に優れている自信からくるものである。そのほかにポケモンはトレーナーが近くにいればいるほど力を発揮できるのだ。

しかし、一方トレーナーを庇うため攻撃や防御や回避がおろそかになりやすい欠点も抱えている。

ナギちゃんの動きはエアームドを完璧に動かすためのものだ。あそこまで飛行タイプのトレーナーとしての動きをされては感嘆しか浮かばない。

今すぐあの動きに追いつくことはできない。そもそもわたしの仕事はロズレイドによるマヒや眠りでドクケイルの動きを鈍らせることだ。

でも、あの動きには感動させられた。今は出来なくても必ずものにする。

「だってわたしは世界一のアイドルだからね」

S i d e ミクリ

「ミロカロス、重ねてみずのはどう!」

ミロカロスから放たれた複数の水のリングは、ドククラゲに当たる瞬間に重なる。速度の違うリングが同時に当たれば衝撃は重なり、大ダメージにもつながる。たとえ効果はいまひとつだとしても、無視できるものではない。少しでもズレれば意味のない技になるが、そんなヘマはしない。年下の姪に才能で劣る自分であるが、努力は裏切ること決してないのだから。

もつとトレーナーは技を鍛えることを優先すべきだと思う。進化は確かに強力だけ

ど、最後に頼れるのは積み重ねなのだから。様々な問題が解決したのなら、技を鍛えることを大々的に宣伝するのもいいかもしれない。

観客が少ないのは気になるけど、さあ今日も美しい姿を見せつけるとしよう。

S i d e ヒース

ムカつくムカつくムカつく。

まったく配信者一行は、相変わらず出鱈目すぎる。間に合わせで作ったという水上ボートは昔乗ったものよりも性能は数段上である。これを一瞬で作るのである。こんなものをばらまいては悪い大人に利用される一方だというのに。

初めて出会ったときから非凡さは見えていた。そして彼らはその非凡さを理解しきれていない。周りがみんなすごいからこそ、気が付かないのかもしれない。

だが、それではだめなのだ。人はそんな綺麗な面だけがあるわけではない。

だからこそ少し年上な自分が危険に真っ先に進まなければいけない。

そのはずなのに、今最も危険な盾役にユウがいる。10歳になったばかりの少年である。

ああ、現実には本当に思い通りにならない。何より、その事実に対し少し安心している自分に最もムカついている。

才能ないと言っているミクリもこちらから見れば十分才能がある。ポケモンの技の複数連打なんて考えつかないものだ。

凡人は天才の開いた道を進むしかない。

「確かに今が劣っていることは認めるさ。それでも未来でまで劣っていることを認めるつもりはさらさらないね」

凡人にできるのは虚栄を見せながら、それを本物にする努力だけだ。天才が開いた道を切り開くのは凡人の仕事である。ミクリから発想を貰った技の連続発動。

「ラグラージ！重ねてだくりゆう」

ラグラージのだくりゆうは本来より数倍は大きくなり、巨大なドククラゲすら飲み込みに成功する。

30話 クラゲ進軍3

Side ダイゴ

くつ、もうすでに戦闘開始してから数時間は経っている。この間にかかなりのダメージを与えているはずだけど、未だドククラゲが堪えた様子がない。ドククラゲの巨体はその分体力も多いのか。

この程度の連続戦闘に集中力を切らすトレーナーはここにはいないが、いい加減ドククラゲが学習してきた。初めのころは直接しんをぶつけて大ダメージを与えていたけど、警戒されて全て触手で叩き落されている。鋼タイプが毒を無効化できるから気にならず攻撃できるけど、有効な攻撃手段も少なくなってきた。超猛毒が攻撃だけでなく防御にも有効に働いて攻撃しにくい。

それでも有利に戦闘進めていたからだろう。油断が生まれた。今まで毒を攻撃に用いなかったドククラゲが、ついに触手に毒をまわりつかせる。そのままどくづきを放ってきた。

今まで使わなかった毒技。頭の中に警告が鳴り響く。普通のポケモンには絶対に当たらせるわけにはいかない。ウインディにめがけて放たれたどくづきをメガメタグロ

スが庇う。そのまま海面に水しぶきを起こす。

水しぶきはどす黒く変色し、その毒は海水で薄まっても脅威で広がっていく。これがドククラゲが毒技を使わなかった理由か。あまりに範囲が広がり過ぎて、危険すぎる。

毒を見たヒースもミクリもポケモンと共に離れている。氷により影響を受けにくいウインデイのみ前線に立つ。そして攻撃を受けたメガメタグロスは毒状態に陥っていた。

本来ならタイプ相性により効かないはずの毒技は、相性を突き抜けてメガメタグロスに毒を与える。ポケモンの絶対の理、タイプ相性を異常個体の特殊能力で抜くことが出来るのか。わずかな疑問と共に治療を受けるために交代する。

S i d e フヨウ

「やばいのだ。タイプ相性を超えるとかポケモンの根本をひっくり返されたのだ」

異常事態にしかし、フヨウに焦りはない。もともと不思議な体質で霊に對してかなりの感受性を持っていた。これを昔はかなりからかわれていたが、今は人もポケモンも友達がいっぱいできた。その友達は全員が頼りになる。ならば私は全力で事に当たればいいんだろう。

「ヨノワール行けるよね？」

「！」

大きな手でグッドを現す相棒。頼りになる相棒が問題ないと言っているのだ。考えることが苦手ではあるが、感覚は誰よりも研ぎ澄まされているつもりだ。

短期間なら離れている自分のポケモンとも十全に指示できる特異性は、友達にいつぱい褒められた私だけの特性なのだ。

「じゃあ行くかうか！」

無邪気な少女は、戦場に躍り出る。

Side リラ

スイクンもライコウもエンテイもメノクラゲたちを簡単に押し返すことに成功している。正直誰か一匹でもいれば十分押し返せるだろう。その程度の力しかない。それが逆におかしい。

ならばメノクラゲたちを束ねる異常個体ドククラゲも相応の実力でなければならぬ。

今までの経験上、群れの長は強くても群れの倍ほどしか強くない。

その割にドククラゲは強く、九州でも一流と言ってもいいポケモントレーナー達が複

数で当たってもまだ勝利できていない。

そしてメノクラゲたちの感情も気になる。最も大きいのは人間に対しての怒り、そしてドククラゲへの申し訳なきを感じる。理由を問い掛けてもへどろばくだんが返ってきて、会話にならない。人間を許せる段階は超えているのだろう。

そして、違和感はさらに大きくなった。ダイゴさんのメガメタグロスが毒状態になったのだ。腐食に類似する特性を持っている？ドククラゲの技は全てが相手を毒にするのだから、もつと早く毒状態になっていたはず。

すぐにメガメタグロスを治療すると、違和感をアイに報告してスイクンの背に乗ってドククラゲの下に向かう。メノクラゲ達は残った二匹で十分対応可能だ。今は一刻も早く彼らの下に行かなければならない気がする。

Side アイ

リラから通信が入る前から引つかかっていたが、ここで確信に至った。もともとドククラゲ達が港を襲う理由を考えていたのだ。人が漁をすることが理由なら、ここ以外の港も襲われてもおかしくはない。しかし、そんな事例は今まで存在しない。そして梅雨により降水量が増え、何かが海に流れ込んだ可能性は考えていた。

そして鋼タイプが毒になったことで確信に至る。ポケモンはポケモンの法則にかな

り忠実である。自分より何倍も重いポケモンに小型のポケモンがのしかかれても、気絶ですむのである。一方、物理法則には抵抗できても様々な影響が生まれる。

だからこそ、支援物資もそこそこに化学工場を調べていたのだ。

「これが原因かの」

「ロトー」

巧妙に隠されていたが、ついに見つけることが出来た。フルオロアンチモン酸。この世にある有機物全てを完全に溶かす最強クラスの酸である。この酸が梅雨の影響で外に流れでもしたのだろう。それが原因で本来ならあり得ない異常個体ドククラゲが生まれたとしたら、彼らの怒りも、ドククラゲが毒技を使わない理由も分かる。ボスであるドククラゲは仲間を同じようにしないために、控えていたのだろう。

おおかたポケモンの対抗策として研究しようとしたのだろうが、あまりに本末転倒な結果を生み出した。研究員は後でシバくとして、今はどうするか。酸その物は後でスイクンの浄化能力で対応するとしてドククラゲをどうするべきか。とりあえず、特殊なバツクに研究室ごと取り込む。

通信機で全員に情報を共有し、フヨウにこの研究所に呼び込んでもらう。ここは素直に派手に謝るとしようか。

複雑な研究所から飛び出せば、サマヨールがふわふわとドククラゲの攻撃を避けながらすぐそこまで迫っていた。優秀なのはいいが、仕事が早すぎる。ぎりぎりだったぞ。

やはりドククラゲの目的はこの工場のようなだ。巨大な触手を工場めがけて振り下ろしてくる。このまま壊させれば、ドククラゲは人間を見限るだろう。そして今後も暴れ続けるかもしれない。そんなことはさせない。この負の遺産は人間が壊してこそ意味がある。

「ギルガルド！キングシールド!!!」

「ギル!!!」

巨大な触手の前に飛び出たギルガルドは固有技キングシールドを展開する。巨大な盾が触手とせめぎ合う。巨体ゆえのパワーに押しつぶされそうになるが、ゲームでは接触を受けたときに攻撃を下げるほど物理技には特に強いキングシールド。

「ギルガルド!!!」

「ギル!!!」

一時の気合がなんとか異常個体の攻撃を一般ポケモンが逸らすことに成功する。しかし、次は不可能だ。だからこそ叫ぶ。

「いまだ参謀!!!」

「分かっている!!!」

海を風のようにかけてきたスイクンが、そのままドククラゲの体を駆け上がる。その間も浄化能力は全開だ。ドククラゲの触手攻撃の猛攻を掻い潜り、頭の頂上にスイクンが立つと、その身を輝かせる。その光はドククラゲを優しく包み込む。ドククラゲが全てを受け持ってくれていた毒性は今、スイクンによって浄化されていった。

突然の事態にドククラゲが止まる。此処しかない。

「ドククラゲよ！ 貴殿の怒り、真に正当である。しかし、この負の遺産は我々人間に処理させてほしい!!!」

そして、懐からスイッチを掲げると見えるように押した。

ドーン!!!

我が仕掛けた爆弾が一斉に爆発する。やはり派手なのはいい。唯一問題があるとなれば爆発が近すぎて、小さな私の体が宙に飛んだことぐらいか。

ああ、海が冷たくないといいな。

突然駆けてきたウインディと盟友に受け止められ、落ちてくる瓦礫も避けながら駆け抜ける。

「つたく。無茶しすぎだぞ！」

「カカカ！ 貴様に言われたくないぞ盟友」

盟友なら来ると信じていたしな。

こうして人間の自業自得な事件は終わりを見せた。

後日談

工場の責任者は首になり、新しい工場は環境に最大限考慮されるものに生まれ変わった。そして今回の事件の概要は瞬く間に広がっていった。インターネット上でも各国の言語で注意喚起し、ポケモンに頼らないポケモン問題の解決は不幸しか呼ばないことを伝えた。

各国でもやばい研究はされており、似たような事件も発生していたみたいだ。ポケモン問題の最先端を一応担っていた日本のミスに、責任を日本に押し付ける形で各国も追従するように研究の危険性を認めだした。まあ、ろくに成果を上げられていない東北に住を構える日本政府は苦勞するらしい。我々を見捨てた罰だ。

いろいろ問題が残っているが、一応解決となった。

そして、私たちにも小さな問題が発生した。

異常個体ドククラゲが私たちの拠点にいるのだ。

「アイ！なんで連れてきたー！」

「うむーボスと群れの強さに差があり過ぎると、頼り切ってしまいあまりよくはない。ゆえに誘ったら来てくれたのだ!!」

なぜか無い胸を張るアイ。なぜ自信満々なのか。言いたいことはあるが、ドククラゲも自分専用に調整された人工湖にかなりご機嫌である。

不幸になるものが居ないのであれば、この結果もまたいいのかもしれない。

「巨体ゆえに食費は倍になるな！」
たぶん。

3 1 話 死龍

人は慣れる生き物だ。その期間が半年を超えれば、十分環境に適應できる。

ただし、無謀を行えばその限りではない。

ポケモンパニックにて、唐突に力を入れた人物は魔がさすこともあるだろう。

そんな人間の無謀な冒険は、開いてはいけなない扉を開いてしまった。

いや、もともとその扉の鍵は開いていた。

たった一人の小さな子供と相棒の子犬の無謀な挑戦によって。

だからこそ、その責任は鍵を開けた子供たちが取るべきなのだろう。

ポケモンパニックが始まってから早半年が過ぎようとしていた。日本では人とポケモンは住み分けも出来て、ポケモンの樂園もあれば、人とポケモンの共存する街もすでに多くある。日本人の国民性なのか、こういう緊急事態時の一体感や探求性は素晴らしい。

日本ではポケモンの力を使った発電を大きい街では実用化されている。そしてなぜかその街の名前が原作の町の名前になっているのは、我々転生者たちの影響が大きい。

九州はアイが町のほとんどの復興に関わっているので、命名も行っている。別の地方も他の転生者が頑張って復興している影がよくチラっっている。

これが転生者たちの我儘なのか、あの私たちを転生させた人外の影響なのか、世界の修正力なのかは不明である。

なんにしても、日本が安定してきたのは事実である。余裕が出てきたともいう。その余裕が良かったかどうかはこれから判明するだろう。

「はあ?! 進入禁止エリア【流星の滝】に入って行っただけだっ!!」

ポケモンパニックが始まって初めての夏も終わりかけのころ、そんな凶報がカゲツから届いた。

進入制限エリアとはそのまま、人と安易に仲良くならないポケモンなどが、ポケモンだけで生活している場所である。そういう場所は環境が厳しく、人に攻撃してくるポケモンも多いので、基本的に侵入は自己責任となる。

侵入制限エリアの中に超危険なポケモンや毒などの危険な環境（ポケモン）がある場合、それらを外部に出さないために決められたエリアが進入禁止エリア。九州ではいまだ三つしか定められていない場所である。そのうちのひとつが【流星の滝】を含めた山と洞窟である。ゲームよりも大きな山で深く入り組んだ洞窟が特徴である。理由は気性

の荒いドラゴンタイプポケモンが多く住み、頂点に立つのがあの異常個体サザンドラである。

私たちの情報から、早々に危険地域と化し、入ることを禁止していた。その甲斐あつてか今までの山からポケモンが下りてくることはなかった。

『ああ。自分は選ばれたとか言つて、元からかなり問題のあるトレーナーではあつたが、知識の豊富さやポケモンの扱いなど先進的な部分が多く、要監視対象のトレーナーが進入した。最近できた弟子を連れて意気揚々と向かつたようだ』

発言的にも、もしかしなくても同業者か？ゲームにおけるサザンドラは、強くはあるが最強に名を連ねるポケモンではない。その油断が判断を誤らせたのか。

「……………拠点からすぐそこだしな。確認はしてみよう」

『いいのか？』

「この半年。【流星の滝】は周りにきのみを多く植えて、食料不足から人里に下りてくることを防いだくらいで、内部には誰も一切かかわっていない。現状どうなっているのか、人の侵入がどう影響を与えるのか、そろそろ調べなければならぬのは事実だ」

『九州で確認できた異常個体は現状20体。すべての異常個体が戦闘に特化しているわけではない。その中で数少ない戦闘特化個体がサザンドラだぞ』

九州の地図はほぼほぼ完成している。人間が把握できていないのは、進入制限エリア

や進入禁止エリアの詳細な地形ぐらいだろう。そこに住むポケモンも大体判明している。ここ二か月で一気に判明し始めた。

過程で、異常個体も多く見つかった。異常個体はどんな個体でも強い。戦闘に向かない異常個体トロピウスですら、自身の特殊能力によって周りの植物を急成長させ、各種状態異常込みでハードプラントを無反動で無限に同時に連続で放ってくる。このトロピウスは気性が穏やかで、とある進入制限エリアの主として君臨している。トロピウスの作るきのみは美味しく、それを狙ってグルメなポケモンがしのぎを削っているエリアになっている。

「アイ特製装備で、逃走ルートも選定する。幸いサザンドラは速くはない」

『何かあればすぐ応援を寄こすんだぞ』

「どうだろうな。だってあいつは私たちの」

初めての挫折の象徴なんだから。

他のメンバーも今回は快く？承諾してくれた。全員あのサザンドラに思うところはあるだろう。

今回の目的は人的救助。そのため速度が求められる。カゲツからの連絡から5時間

ですべての準備を終えた。

どうでもいいが、アイの技量がさらに上がっている気がする。アイのチートも激戦を経て、成長しているのか。どう考えても5時間の成果とは言えないものが私のバックの中に入っている。

そびえたつは流星の滝を含めた洞窟を持つ山。入り口は複数存在するが、その中で一番大きい入り口から侵入する。ウインディはあなをほるで新しい道を作りながら追従してくれている。たとえ逃げ道が直線でも足の速さで距離を作り、撒く。苦し紛れの一撃は同じ異常個体であるのウインディなら一撃は必ず耐えられる。

私とウインディをつなぐのは特別製の無線で、音量の大小で距離までわかる優れたものだ。つかず離れずを保ち、探索を開始する。

洞窟内は意外と静かであった。小さめの横穴が複数あり、その中にタツベイやダンバル、モノズなどのポケモンの気配はするが、出てくる気配は一切ない。むしろ怯えている。

正直、戦闘狂のポケモンが逐一攻撃を仕掛けてくる可能性も考慮していただけに、拍子抜け感すらある。もしその場合は、シユールストレミング並みの兵器がさく裂しただろう。

予想に反して最終進化ポケモンは一切いない。第二進化ポケモンすらほとんどいな

い。

これはかなりやばい。過去に見た好戦的な他の異常個体のポケモンの縄張りですら、フライゴンクラスの能力なら群れを率いて生き残っていた。

「やばいなこれは」

思わず、独り言をつぶやいてしまう。視線の先には首元を食いちぎられ息絶えたグリムガンの姿であった。

ポケモン同士で攻撃した場合、肉体に物理的な傷が生まれるのはゲームで言うHPが0になってからだ。

摩訶不思議なポケモンの法則であり、どれだけ力量が離れていたとしても一撃で殺されることのないのがポケモンであることが判明している。そのポケモンが死んでいる。つまり行ったのはかなり残酷性を兼ね備えたポケモンである。しかし、首元以外は目立った傷はない。私の知っているサザンドラなら捌り殺すくらいはするだろう。

サザンドラに何かあったか、それともサザンドラ以上の危険が何か生まれたのか。

ある程度歩くと広く開けた空間にたどり着いた。一つ分の村ぐらいならすつぱり入るだろう。そして、海外でしか見れないような巨大な滝が轟音を鳴らしている。あれが、流星の滝。ポケモンパニック初期に迷い込んだ人が撮った写真で、存在は知っている。

たが、実物は圧巻である。そして、滝から流れる水の中にもポケモンは居るようだが、全員息をひそめている。

原因も遠目であるが見えていた。相変わらず、いや記憶以上の覇気を纏った怪物だ。変わらぬ長い尻尾で体を支えており、もはや飾りにしか見えない8つの翼が開かれている。後ろ姿なため顔は見えないが、黒い炎が漏れている。そして、胴体には私がぶち抜いた鉄骨の後だろう大きな傷が残っている。

異常個体サザンドラ。様々な経験してきた私であるが、今まであったどのポケモンよりも格上の存在である。一対一ならジンダイさんのレジギガスにすら勝てるだろう。私のチートが力の差を感じ取らせてくる。

そしてそんな化け物に相対している小太りな同年代が一人。

「ふざけるな、ふざけるな。僕は転生して選ばれた存在なんだぞ！ さっさと助けてよマリルリ!!!」

無理だろう。地面には巨大な破壊痕がある。そのそばに青い耳が二つだけ残っていた。あれで生きていたら携帯獣学が根本からひっくり返る。

ただ、トレーナーとしては優秀だっただろう。なつき進化のポケモンは、仲良くなるとバトルもしてくれない。そして条件が同じであれば、ちからもち+はらだいこならじやれつくでサザンドラなら6体は落とせる。ただし、生物としての格が違い過ぎ

た。多少のレベル差なら相性で倒せるなら、とつくに私たちが倒している。

「くそ弟子!! てめえも助けやがれ! 拾ってやった恩を忘れたか!」

自業自得である。サザンドラに近すぎる少年はもう助けられない。完全にロツクオンされている。

そして彼の言う弟子もすぐ見つかった。倒されているボーマンダは気絶ではあるが死んではない。そのトレーナーも生きているが恐怖で動けないようだ。ゴニョニョが必死に引つ張つて逃がそうとしているがそもそも対格差もあり、ほとんど動けていない。

私は素早く状況をウインディに説明する。

「やめろー!!!」

「ガアアアア!」

小太りな少年はサザンドラの三つの黒い波動に飲み込まれる。どんなポケモンでも技を出した瞬間は隙が生まれる。

ウインディは素早くボーマンダと弟子トレーナーとゴニョニョを回収すると、別の道から駆けていった。

サザンドラが振り返ればそこにはもう誰も居ない。もう追いかけても無駄である。後は私か。

アイの特製隠遁道具によつて普通なら気が付くはずはない。が、あの狩人なら気が付くだろう。そして逃げられた怒りを私にぶつけるだろう。バカみたいな量の妨害道具を構え、未だ距離のあるサザンドラを観察する。

奴は普通に私が付いたと思う。私の隠れる方を一瞥すると、不満そうな気配を隠すことなく洞窟の奥へ消えていった。

緊張から解放された私は、壁から崩れ落ちる。安堵と共に湧き上がるのは疑問だ。私の知っているサザンドラなら攻撃するだろうし、そもそもこの流星の滝の環境があいつの性格に合っていない。弱者がいれば蹂躪するのがサザンドラだ。その割には未進化ポケモンが多く生きていた。そして玩ばれていない死体。私は一つの結論に至った。

「やつは戦いの楽しさを知ったのか？」

サザンドラのセンスならモノズの時から苦戦はしなかつただろう。そしてバトルの楽しさを知らずに本能のままに戦った。その中で楽しさを得ることが出来たのが痛めつける事だったのだろう。

ポケモンは遺伝子レベルで戦いを欲している。今までサザンドラにとつて戦いは蹂躪しかなかった。だが、そんな戦いを変えた存在がいた。それもかなりの格下だ。

「私のせいか」

格下であつても知恵を使つて渡り合つた。渡り合つてしまった。やつはそこで戦い

に熱を持ってしまったのだろう。だからこそ力を持つものに戦い、弱いものも向かってくるなら戦う。

最後に殺すのは奴が私を殺したと思っているからか。だから逃げるものは追わない。「責任は取らないといけないか」

このまま流星の滝にいても奴の戦いが満たされることはない。道中のポケモンたちは心が折られていた。外から来たトレーナーは弱くあつても戦ってはくれた。ならばいずれ奴が人里に下りることは明白である。

私は握りこぶしを作り、覚悟を決めた。

奴を止めるべきなのは、原因を作った私たちだ。

32話 始龍

私たちの拠点に戻れば慌ただしい様子であった。私たちの拠点も、人口は増えて村と言ってもいいレベルまでは人が住んでいる。住民はそれぞれポケモンと一緒に何やら広場に集まっている。その中心にいるのはルチアであった。

「みんな！準備はいい！！リーダーの吊い合戦だよ！」

「勝手に殺すな！」

とりあえずルチアの頭に拳骨を叩きこんでおいた。

今回のプチ騒動は、出迎えを派手にしようといったルチアの家だったらしい。住民全員が私の無事を知っており、のんびり歩く私のGPSもどきからの情報で危険性もないと判っていたらしい。

とりあえず、もう一発拳骨を叩き込んでおいて今回の情報交換を行う。

アイ曰く、弟子トレーナーは登場人物らしい。名前はヒガナ。そうでもないと言わなかった。ボーマンダなんて一級品のポケモンは使えないだろう。安堵から未だ気絶しているが、命に別状はないようだ。

そして私の方も情報を渡す。予想以上の予想外の情報に、全員言葉をなくす。それだけ私たちにとつて異常個体サザンドラは特別だった。この村だって、今では砦の役割も持っており、サザンドラが山から下りてきた場合の防衛ラインになる予定だったのだ。

「勘違いの可能性は？」

「ない。あいつは腹芸を好まない。罾があつても踏みつづす王者だ。そんな奴があからさまな落胆なんて見せるものか」

「参謀よ、策は？」

「……方針を転換しよう」

「と言うと」

「戦いの飢えを満たしたうえで、殺すではなく倒す楽しさを教えるのさ」
今まで以上によからぬことを考えているリラが印象的だった。

S i d e ユウ

「相変わらず圧巻な滝だなあ」

リラの作戦を聞いてから3日の間を置いた。各々準備を整え、今日を迎えた。起きたヒガナの騒動と指導もあつたが、万全の準備はできた。

各方面に情報を共有し、もしもの時には援軍の要請はしてある。最悪人里に奴は降りるだろう。援軍は必須だった。それでも、今回のサザンドラはできるだけ私たちで倒したいため、作戦の概要などは伏せている。

そもそも負ける可能性は低いのだ。レベルはサザンドラの方が高いだろう。一対一ならだれも勝てない。しかし、同じ強さのステージに立つ異常個体のウインディを持つ私、異常個体ドククラゲを持つアイ、異常個体と同等の力を持つ準伝説を三体も持つリラ。さらに一步スペックが劣るとはいえ、メガシンカできるメタグロスを持つダイゴさんと、チルタリスを持つルチア。すでに経験も十分な私たちが、束になれば勝つことはできる。

でもそんなことはしない。私たちもトレーナーとしてプライドも因縁もあった。これで今でも非道を繰り返していたらその限りではなかっただろうが、サザンドラは強敵を待っている。

「なんだ、前とは違うな。うれしそうな気配の質が全然違うぞ」

振り向けばサザンドラがうれしそうな気配を発している。もうそのレベルは狂気の域だろう。そんなに私が生きていたことがうれしいか。

懐からオボンのみを取り出し、齧って残りを二つに分ける。片方をウインディにもう片方をサザンドラに投げる。サザンドラも中央の顔が素直に受け取る。他の顔から

不満たらたらかな視線がささる。

おまえら腕の頭は思考能力がないってロトム図鑑に書いてあったんだけどな、と思いながらオボンのみをもう一つ取り出すと半分に割り、両腕の顔に投げれば嬉しそうに食べる。

この行為に意味はない。しいて言えばお互いに完全な状態で戦いましょうだが、ここからは何でもありの戦いだ。

お互いがそのつまりだからだろう。攻撃開始のタイミングは同時だった。

「かえんほうしゃ」

「ガウ!!」

「ガアアアア!!」

ウインデイのかえんほうしゃとサザンドラの三つのりゅうのはどうがぶつかり合う。青黒い炎と真っ黒なエネルギーが激しく衝突する。余波だけで周りの地面に亀裂が入る。

威力ではサザンドラの方が高い。ぶつかり合う技は少しの間拮抗するが徐々にあくのはどうが押しこめる。

もともと威力勝負するつもりはない。私とウインデイが散開すると、間にりゅうのはどうが突き刺さる。その攻撃はそのまま滝に衝突し、莫大な量の水を真っ二つにする。

宙には大量の水がはじけ飛んでいる。

「れいとうビーム」

私の指示が響く。基本的に私が指示を出すのは、要所要所に絞っている。そもそも一定以上のポケモンの戦闘スピードに人間はついてこれない。しかし、機転と言う点でトレーナーはポケモンバトルに大きく貢献できる。

ウインディのれいとうビームが水を凍らせ、凶器と化す。そのまま落ちてきた凶器をサザンドラはあくのはどうで迎撃する。安易に炎技は使わないようだ。体内のエネルギーをそのまま放つ炎技は出が速いが、過去ガーディ時代の特性もらいびを覚えているのだろう。

あくのはどうで一掃し氷粒が舞う。その中にりゅうのはどうが突き刺さる。目視できないはずだが、サザンドラのはどうは騙せない。氷粒を突き抜けるとそこにいたのは身代わりだった。隙をついた身代わりは消えてしまうが、サザンドラは無防備となる。

しんそくにより背後から強襲したウインディは、後方に飛ぶ。

「重ねてほのおのうず」

空中で放てる技には限りがある。しかし、組み合わせによっては隙無く放つ連続技になりうる。ミクリが考案した同じ技を重ねる技術。質量をもつ技ならばつかえるエネルギーが増大し、回転ならギアがかみ合うように威力を上げる。

簡単なようで難しい技術をウインディは3つ放つ。ミスれば格好の的だが、決まれば大ダメージとなる。

ほのおのうずとは思えない爆炎と共にサザンドラが炎に包まれる。しかし、気にするそぶりを見せずサザンドラが距離を詰めようとする。

サザンドラが視覚とピット器官に感覚を頼っているのは前回の戦いで解っている。この状態で突っ込んでくるとは、サザンドラも頭に血が上っているのか。

ウインディはルチア直伝のステップを刻みながら距離を詰める。目測を誤らせるステップは急に目の前に現れたように見えるだろう。そのままじゃれつくを叩き込もうとする。

バキバキバキ

地面を砕いてサザンドラの長い尻尾がウインディの胴体に絡みつく。

「なあ?！」

炎のせいで尻尾の目測を誤ったか。そして無理やり地面を砕きながら尻尾を前に出す機転とパワー。前回とは戦いの質が違い過ぎる。

そしてサザンドラの三つの首に集まるエネルギーにも驚愕する。

私のチートは育成。ゆえに直感的な知識と感覚は優れている。技の起こりでどんな技かぐらい瞬時に理解できる。

「ほのおのちかい、くさのちかい、みずのちかい、だと。サザンドラの覚える技じゃないだろ!!!」

ゲームでは同時に放てば倍になる技が3つ分。相互作用により威力は桁外れとなる。苦し紛れのれいとうビームも居に返さず、三つのちかいを至近距離で受けウインディは倒れる。

「ガアアアア!!!」

歓喜に震えたサザンドラの雄たけびが響く。咆哮が止まればこちらを見てくる。

「……完敗だな。しかし、次はそうはいかないぞ」

「その通り! ルチアの登場ってね!」

すでにメガシンカ、こうそくいどうの積んだメガチルタリスが主人をのせたまま、かぎ爪でサザンドラを持ち上げ戦場を後にする。

33話 次龍

Side ルチア

正直言って今回の戦い、全員で一気に倒せばいいんじゃないとも思っている所もある。わたしのアイドルとしての部分が冷静に数字だけを見るべきだと言ってくる。

そしてわたしのトレーナーとして、さらにユウちゃんたちの仲間としての魂が言っている。

もうここにはリーダーを犠牲にせずとも生き残れるわたしがいると。

最後にわたしのすべてが訴えている。

最後に目指すべきは大団円がいいと！

かなりの速度でサザンドラを掴みながら飛ぶチルル。ただ反撃は恐ろしいため、比較的硬い岩盤に叩きつけた。

ポケモンの技を介さない攻撃は、高レベルのポケモンにはあまり効果はない。ポケモンそのものが物理現象を超えかかっているのだ。だからと言って物理現状を逸脱しているわけではない。重力の影響はあるし、こうして叩きつけられれば脳が揺れ、すぐに

は動けない。

「ハイパーボイス!!」

メガシンカにより新たに得た特性フェアリースキンはノーマル技をフェアリータイプに変える。そしてサザンドラの弱点はフェアリーである。さらにアイドルでもあるチルルの音技は、他の技より練度も高い。

チルルの背から飛び降りて、再度指示を出す。

「もう一回!」

「チルル!!」

「ガアアア!!!」

ただ相手もなすがままというわけではない。すぐに体制を整えあくのはどう三連発を放ってくる。

さすがは怪物。相性は完全に有利なのに、どんどん押されていく。ただ、チルルだけ見てていいのかな?

「ロズレイド! やどりぎ、どくどく、しびれごな、やどりぎのタネ! 最後にベノムトラッ

プ!!」

「?!」

「ロズ!」

知ってるよ。今まで一対一しか経験がないんでしょ。だから突然背後に現れたロズレイドの対処はできない。

ロズレイドの攻撃は全て当たる。が、カウンターまがいに振られた尻尾が直撃し、跳ね飛ばされる。

「ロズレイド!!」

慌てて駆けよれば、目を回して気絶している。知ってはいたけど、一般ポケモンではいくら強くなってもこれが限界か。悔しさも後悔も湧き上がってくるが、今は戦闘中。途中退場なんてアイドルがやるもんですか。

馬鹿の一つ覚えと言われるかもしれない。それでも長所を最大限輝かせるのもアイドルなんだ。

「ハイパーボイス!!」

「ガアアアア!!」

先ほどの光景がまた広がる。何度放とうが、サザンドラのはどうの方が威力が高いため、いざれ押し負けるのはチルルの方。

それでも何度も続ける。

そしてついにチルルの目前まであくのはどうが迫ってきた。距離を測る。

「今!!エコーボイス!!」

「ルー!!!」

瞬間。巨大な一撃があくのはどうを突き破り、サザンドラに直撃する。サザンドラも驚いたことだろう。

種明かしをすれば、ここは洞窟で音が響く。たとえハイパーボイスであっても、音は残って響いていた。そしてエコーボイスは残った音を巻き込んで放つ技。今までの音技を上乗せして、相手見ぶつける。

「はあ、はあ、はあ」

「チ、ルル」

ただし本来の使い方ではないため、わたしにもチルルにもダメージが入り次は放てない。

わたしたちの渾身の一撃、少しは堪えてて欲しいけど。

「ガアアアア!!!」

瓦礫を突き破りサザンドラが現れる。まったく本当に力量不足に嫌になる。わたしたちのなかで一番相性がいいのがわたしなのに、倒すことが出来なかった。だけど。

「ごまーみやがれ」

舌を出して皮肉を言つてやる。

サザンドラが反応するよりも早く、サザンドラは念力により洞窟の奥に引きずり込ま

れていった。

「あーあ。勝ちたかったなあ」

わたしもチルルの大の字になって地面に倒れるのだった。

S i d e ダイゴ

今でもたまに夢に出ることがある。まだ付き合いが短く、責任を押し付けやすい年上の僕ではなく、たった10歳の少年が死地に向かつていったことを。そんなリーダーを無駄にはしないと必死に前を向こうとしていた少女たちの事を。そしてそんな中、何も支えることが出来ずにただ戦うことしかできなかつた自分を。

そんな悪夢とはおさらばさせてもらおう。

この洞窟は一直線であり、お互いに攻撃を避けることはできない。マガシンカと異常個体との力の差は歴然であるが、めいそうを6段階積み、サイコパワーを充満させたこの洞窟なら話は変わる。

サザンドラの最大の強みは遠近両方とも高いレベルで扱えることだろう。その反面防御能力は比較的低い。そしてこの狭い洞窟では接近しての攻撃は愚策になる。

タイプ相性が良くはないが、自分の有利なフィールドがどれほど恐ろしいか、流星の

滝の主に教えてあげよう。

「ラスターカノン」

「メッター！」

「ガアア!!」

不意打ち気味に放ったラスターカノンが、とつさに放たれたあくのはどうに相討つ。メガメタグロスの万全の技が異常個体のサザンドラのとつさの技と同等であった。三つの首から放たれる技は3倍分の威力になるとはいえ、こっちは万全の準備をしたんだけど。

ただこの連戦かつ環境の変化。先ほどまでの圧倒的相性の悪さから同等レベルで相性有利の敵。サザンドラの意識に油断が生まれる。もし、トレーナーがいれば簡単に気の引き締められるほどの小さいものではあるが、この場では悪手である。悪タイプにエスパークタイプの技が利かないことは事実だが、先ほどねんりきで回収されたことを忘れてたと見える。

「君にトレーナーがいたら手も足も出なかつただろうね！ミラクルアイ」

ミラクルアイ。悪タイプのポケモンにもエスパーク技が当たるようになる変化技。こんな技を野生が使うはずがない。それだけ使いどころの少ない技だ。つまり、サザンドラは生まれて初めてエスパーク技を食らうのだ。

「サイコキネシス」

サザンドラが壁に叩きつけられる。サイコパワーの充満している空間ではエスパー技は全て先制技に変わる。あの大きなサザンドラがくるくる回り、初めて受ける技に目を白黒させている。あの怪物でもこんな状態は初めてらしい。

しかし、苦し紛れに放たれたあくのはどうがメガメタグロスを打ち抜き、解放された。これがユウ君の言っていた狩人の本能ってやつかな。

お返しとばかりに口にエネルギーをためるサザンドラ。迎え撃つても破られるのが落ちだろう。

「サイドチェンジ！」

だからサザンドラとメガメタグロスの位置を変える。目標を見失ったサザンドラが振り向く。状況が分かっていなくても本能で敵の位置を把握したらしい。

ただし、振り向く動作が余分となり大きな隙が生まれる。

「バレットパンチ！」

先制技で急加速し、一撃叩き込む。振り向きざまに受けた一撃は、技を中断させるのに十分だった。

「ここが勝負所！コメットパンチ連打!!!」

メガシンカした影響で四本の腕があるメガメタグロス。そのすべてが光り輝く。

連打連打連打!!!

「崩れた！ここだ、直接じしん!!!」

体制の崩れたサザンドラに直接じしんを叩き込む。じしんの振動が強靱なサザンドラの外皮を貫いて内部にダメージを与える。

サザンドラの体がくの字に折れる。

「終わらせっ?!」

顔を上げたサザンドラの口には莫大なエネルギーがあつた。先ほど技をキャンセルさせたが、そのエネルギーが消えたわけではない。ここまで貯めていたのか。

攻撃はもう止められない。メガメタグロスは、カウンター気味にあくのはどうに飲み込まれた。

これが異常個体サザンドラ。こいつの執念を甘く見ていたか。

「まいったね。なら次の勝負だ」

懐からボタンを押せばサザンドラの姿が消え、次の所に転送された。アイ君特製の転送装置である。

僕の戦いはこれで終わり。ただ、ここで勝っておきたかった。次の彼女は勝負ではなく勝ちを優先するだろう。

僕にはその姿が、ひどく危うく見えたのだ。

34話 思龍

Side アイ

別にこの作戦に不満はない。私の、いや私の思いに蓋をすればこの作戦の成功率は高いと思う。それだけポケモンに触れてきたと思うし、この世界に慣れてきた。

前の世界よりも暖かくて優しいこの世界。本当の悪意ある人がここまで少ない世界で、なぜ世界大戦なんて起きたんだろうと歴史の勉強をしていて思った。前の世界なんて出る杭は打たれ、道化を演じなければ大人すら忌み嫌い、道化に対しても押さえつけてくる。

一方この世界は、能力の高い人が生まれやすいからか、かなり寛容な世界になっている。もちろん、人によって性格の違いもあるし、ルールを逸脱したら裁かれるけど、いつぞやのインテリヤクザがあのような性格でナンバー2に成れるほど組織という物は甘くない。

だからこそ我らのチームは居心地がいい。全員が全員を尊重し助け合っている。そんなやつとでできた私の居場所を壊す存在は絶対に許さない。

「正直、ここままで残ってくれて嬉しいよ。貴様だけは我の手で討ちたいと思っていた」
日本によくある細い木が乱立している山の山頂付近に我らは居た。サザンドラは急に外に放りだされた状況についていけないようだ。ただし、立ち直させるつもりはない。

「ドククラゲ！どくづきでたたきつける」

もともと木々によつて日の光は当たりにくい。だからサザンドラも気が付くのに遅れた。

ドククラゲの持つ超猛毒を纏ったたたきつけるが、地面に放射状の罅を作り、周りの木々を吹き飛ばす。

続けて第二打を放とうとするが、土煙を翼で吹き飛ばしたサザンドラがあくのはどうで迎撃しようとする。が、そんなことはさせない。横からキングシールドを維持しながらギルガルドがサザンドラの横顔に突撃する。

ダメージはない。そもそも異常個体に一般ポケモンが有効なダメージを与えられることは少ない。サザンドラなら急所にフェアリー技でも当てればダメージになるだろうが、我のメンツにフェアリー技を覚えているポケモンがない。

しかし、無意味ではない。ポケモンはポケモンの技の影響は受ける。横から殴られればさすがにサザンドラもあらぬ方向に攻撃を放ってしまう。そのままギルガルドは抜

けていく。

サザンドラの目線がギルガルドを追うが、その隙にドククラゲの第二打が撃ち込まれる。

勢いを逃がせない位置で同格の異常個体の攻撃。さすがのサザンドラも堪えてきている。

「そして超猛毒ったか」

今のドククラゲは、スイクンのおかげで昔のようにすべての有機物を溶かす猛毒性は持っていないが、それでも異常な猛毒性は、一度受ければ急激に体力を削っていく。

「ガアアアア!!」

自分のダメージに構わず吠えるサザンドラ。自分を鼓舞するためか気合を入れるためか知らないが忘れていいのか。ドククラゲの攻撃手段の触手は複数あるのに。

ドククラゲの攻撃は連撃が基本だぞ。

サザンドラの横合いから木々を吹き飛ばしながら、どくづきをお見舞いする。ただ相手も怪物である。長い尻尾を地面に突き刺し、勢いを殺すと反撃に出ようとする。

させるわけないだろう。転送装置を起動してサザンドラを数十メートル移動させる。

さすがに二度目は効果が薄いのか、的確にドククラゲを攻撃するが、向きも方向もおかしくなった攻撃だ。

「キングシールド」

強力なあくのはどうも受け流すようにギルガルドが流す。このために異常個体の仲間たちに受け流しの練習に付き合ってもらったのだ。

そしてこちらの手は三つあるのだぞ。

「ふぶき」

サザンドラの背後に隠れていたフロストロトムのふぶきが直撃する。ダメージを負いながら尻尾で薙ぎ払おうとするサザンドラであったが、すでにロトムは転送されてその場にはいない。

そして、サザンドラの背後から茂みの鳴る音がする。間を置かずそこにあくのはどうが撃ち込まれるが、もちろんダミーであり、技を放った後の硬直したサザンドラにドククラゲの一撃が叩き込まれる。

「ふん。我に三日与えられたのだぞ。この一帯には貴様をはめる罠が満載に決まっているだろう」

我の声も木霊したようにどことなく聞こえているはずだ。そこら中に設置した熱源のせいでピット器官も役には立たない。

サザンドラは倒れたまま攻撃を放ってきた。少しでも早く攻撃を打ち込みダメージを与える算段か。無駄だ。

ドククラゲの巨体が消え、あくのはどうが空に放たれる。

サザンドラが急に現れた陰に気が付く。

「ガア！」

サザンドラの振り向きざまに、またしてもどくづきのたたきつけるが撃ち込まれる。サザンドラは地面をバウンドし、斜面を滑り落ちる。

木のおかげで止まるが、立ち上がる気配はない。毒も回ってきたようだ。だからといって油断はしない。油断なくドククラゲに指示を出し、たたきつける。

力をしっかり貯めたため、今までで一番の土煙が上がる。

「ふぶきとシャドーボール」

「?!」

「ふん。業腹だが、異常個体の中でもトップクラスのやつだ。頭と胴体が離れるまで攻撃の手を止めるな」

私のポケモンたちも戸惑いもあったが攻撃してくれた。起き上がってきたときのために次の戦略を考える。

まだまだ山には仕掛けが満載である。ドククラゲを中心として必ず息の目を止めてやる。

S i d e ???

負けるのか。死ぬのか。せつかく楽しい戦いがここで終わってしまうのか。いやだ！いやだ!!いやだ!!!

そんなことは認めない！もつとこんな楽しい戦いを味わい尽くしたい

S i d e ユウ

スピアー戦でアイが爆発させた時に匹敵する振動を感じる。

この洞窟の細い道は崩れているんじゃないかな。

さらに過去感じたことのない重圧が離れていても感じる。

可能性はあった。

い つかアイが言っていた。異常個体はかなり狭い門であるのに対して、メガシンカは過剰なエネルギーとそれを操れる資質さえあれば誰だつてなれる可能性もある。だから手持ちを全てメガシンカ個体で埋めることは可能だと。

その時は聞くことはしなかったが、もう一つの仮説が私の中には浮かんでいた。

異常個体のメガシンカ

ウインディと修業した実感としては可能であるということだ。

ただし全く異なる理を両立しようとすれば、破綻してしまうだろう。事実、ウイン

デイはメガシンカしようとしたら大ダメージを受けてしまう結果になった。

できる可能性はあるのだ。そしてそれに至った存在が現れた。

「ウインデイ行けるか？」

「ガウ!!」

相棒の頼もしい返事がかえってくる。

正直予測が当たり、異常個体のメガシンカに至ったら、サザンドラに勝つ可能性は限りなく低くなる。

参謀の最初の作戦通りになることを祈るだけか。

35話 四龍

Side アイ

「ケホケホケホ。一体何が」

サザンドラのいた辺りから、莫大なエネルギーがほとばしった。我はとつさにキングシールドを指示出したが、あまりのエネルギーに全員吹き飛ばされた。ドククラゲの巨体がなければ、この山を越えて向こうの町まで飛ばされていたかもしれない。

衝撃を耐えきったギルガルドが地面に倒れて甲高い音が鳴る。

「ギルガルド!!」

幸い気絶しているだけのようだ。そして、ようやく辺りを見回せる。そこには木々もなく巨大なクレーターが生まれていた。そして、中心には異形の四龍が生まれていた。

8枚あった翼は2枚に減っていた。しかし、その面積は今のほうが大きい。翼のおかげか完全に宙に浮いている。

長い尻尾は健在だが、強靱な鱗に覆われている。

胴体は以前よりも一回りほど大きくなり、こちらにも鱗に覆われ防御能力が上昇している。

そして一番特徴的なのは頭だろう。胴体から延びる四つの首は半円を描くように生えている。すべての首が太く、以前よりも長い。

顔も大きく鋭くなっている。口から出ていた黒い炎はなくなっているが、無駄なくエネルギーを扱えているのだろう。

異常個体メガザンドラ

「分かっておったわ。ゲンシカイキという頂点がある時点で、ポケモンのステージにはまだ上があることぐらい。それを加味しても勝率は変わらないと思っていた。トレーナーを介さないメガシンカは苦痛と共に異常な回復能力と若干の種族値の変化を生み出す。これなら超猛毒の前に倒れるとな」

しかし、現実はどうだ。サザンドラが放つオーラは今まで見たことのないものだ。そしてかなり安定しているように見える。

不意にサザンドラの四つの首のうちの一つが顔を上げ、あくのはどうを放つ。先ほどまで3つの首すべてで放っていた技と同じとは思えない威力を、たった一つの首が放つ。

ドククラゲに向けられたあくのはどうは、とつさに防ごうとした触手を弾き飛ばしてドククラゲを吹き飛ばす。

たった一撃で特殊耐久に優れたドククラゲが気絶する。

あの巨体のドククラゲを宙にあげる威力もヤバイが、たった一撃で気絶させた事実の方がやばい。特防125は伊達ではないはずなのに。

「違うのか。重量のある飛行機が高高度を高速で飛ぶことで安定するように、異常個体とメガシンカの同時発動は成功できれば安定するというのか?!」

アイは自身のチートゆえの物理的な理論から、正解を導き出す。ただし、もうアイには何もできない。

手持ちもロトム以外戦闘不能。事前に仕掛けた仕掛けも全て吹き飛ばされた。後は他の仲間に託すしかない。

声を上げる。

「聞け参謀!!別に毒の影響からは逃れたわけではない。強靱な力で無理やり抑えているにすぎない。勝つ可能性があるとすれば後は貴様だけだぞ!」

「まったく。音を聞いて駆けつけてみれば変な方向にぶっ飛んでいるんだけど」
最後のメンバーが駆けつける。

S i d e リラ

まったく。アイのことだから、やらかすかもと思っていたけどこれは想像以上でしよ。

冷静にサザンドラを観察するがそのたたずまいから余裕が感じられる。

実際、異常個体や準伝説以上でないと、もうダメージすら与えられないだろう。昔見たメガスピアーのように大きな壁を感じる。

ここまで誰も死んでいなことから策はほぼ完結している。後は時間が解決するだろう。もし、ボクまで回ってくるなら倒してやりたいなとは思っていたが、これは想定外だ。

アイめ、可能性があるなら事前に伝えとけよ。情報がそもそも足りないのだ。

だからこそ、少し情報を集めようかね。

「さあ行くよ皆!!この姿になってから全員で初の全力の実践だよ!気合入れていこう」

「!!!」

一番前に立つのはエンティである。地面からエネルギーの供給を受けられるエンティを落とすのは容易ではない。四つの首から放たれるあくのはどうを守りながら正面から受ける。

守っていても、足の後が生まれ押されていく。しかし、こちらも準伝説。咆哮と共にあくのはどうを打ち破る。

「よし!スイクン!」

まずは第一関門突破。そもそも手数が多いサザンドラの攻撃をすべて避けられない上、受けのエンテイが機能しないと戦いにすらならない。

次はスイクンの霧による拘束を試みる。今のところサザンドラが移動する気配はない。それだけの力の差があり、戦いを楽しむために自ら枷を作っているんだろうけど、遠慮はしない。霧の拘束がサザンドラを包む。

「ガアアアアアア!!」

咆哮一閃。ただ吠えるだけで霧の拘束を吹き飛ばした。これで翼や尻尾で破るならよかったけど、想像以上に力もありそうだ。

ならば質量はどうか。スイクンが莫大な水を顕現し、叩き込む。技の分類ならハイドロポンプだろうけど、災害に匹敵する一撃ならどう。

サザンドラが直撃するが、鬱陶しそうに首を振るだけで動かすこともできない。飛行能力もかなりあり。この分だと飛翔能力もヤバそう。

「でも濡れたよねライコウ!!」

雷のごとく距離を詰めたライコウは、無数の連撃を放つ。比喻ではなく1秒に20回は攻撃しただろう。さすがにこれにはサザンドラも苦悶の声を漏らす。

つまり、強靱な防御能力はあの鱗由来で、内部は今までとそう変わらないと。

ついにサザンドラも攻勢に出る。尻尾を横なぎに払う。速度は速くないので、ライコ

ウに当たることはないが飛んでいるため出も早く、触れていないはずの地面に跡が残っていた。攻撃は一撃でも当たったらお陀仏と。

サザンドラは四方向にあくのはどうを放つ。二つはエンテイ、スイクンの牽制だった。

残り二つがライコウに迫るが、自慢の速度をもって躲していく。

強くなっても狩人としての勘は損なわれないのか少しづつ避ける距離が狭くなっていく。エンテイ、スイクンも援護に行きたいが牽制が援護を許さない。

そしてついにライコウの足に少し掠つてしまう。たったそれだけでライコウの体制が大きく崩れる。もともとライコウはかなりの慣性を身に受けている。バランスが崩れれば立て直しに少し時間がかかる。そこを狩人は見逃さない。

あくのはどうの直撃によりライコウが落ちた。

スイクンも耐久には優れているが、4つの纏まったあくのはどうの前に落ちる。

エンテイは最も耐え凌いでいたが、三つのちかいとそれをまとめる風の一撃の前に落ちた。

三犬になってから、負けを経験したことはなかった。ボクも知らず知らずのうちに慢心していたのかもしれないなあ。

「だから後は頼んだよりリーダー」

「おう！」

最後は頼れるリーダーに締めてもらおう。

36話 至龍

今回の作戦は簡単だ。サザンドラに殺すのではなく、倒すことでまたもう一度戦えると、まだ戦いを楽しめると教えることだ。

だからこそ、回復能力と耐久力に長けて因縁もある私が初戦に挑んだ。殺さなかったから、次にまた戦える。これを実感としてサザンドラに知ってほしかった。

アイが追い詰めすぎたせいで、何やら覚醒しているけど作戦に変更はない。なんとつてサザンドラの気配は楽しそうだから。こちらの意図を理解してくれたのだろう。最初に感じていた殺気は一切ない。もうサザンドラが、無為に殺しをやることはないだろう。

「だからと言って、勝てないから戦わないトレーナーなんていないよなあ!!」

「ガウ!!!」

「ガアアアア!!!」

力量差は明確だ。もともと力の差があつたが、それが広がった程度なんだ。ポケモントレーナーは負けず嫌いなんだよ!

ウインディがしんそくを使って距離を詰める。これをサザンドラは尻尾を使って受

ける。空を飛んだことで、自由になった尻尾を存分に使っている。

返しにサザンドラのおくのはどうが放たれる。これに吞まれるウインディ。自分の放つ威力は分かっているのだろう。サザンドラの気が緩む。

「ここだーじゃれつく」

「?!」

「ガウ!!」

黒い波動を突き破りながらウインディが現れる。突然の事態にサザンドラは、しかし、冷静に尻尾を使って防ごうとする。

とっさなため、防御の仕方が先ほどと一緒である。私のウインディにそれは愚策だろう。

躲しながらサザンドラの最大の弱点に叩きこむ。昔、私と戦った時に貫通させた鉄骨後は、メガシンカした後であつても鱗に覆われていない。それだけ大けがだったのでろう。みんなにここは責めないでくれと言つたかいいもあつた。考慮していなかった場所に4倍の弱点技を受けたサザンドラは吹き飛び、地面を転がる。

戻つたウインディも、肩で息をしている。1回分の防御能力ならエンティを大きく超えているウインディなら一発なら耐えられる算段だったが、かなりぎりぎりだったか。

そして、当然のごとく立ち上がるサザンドラ。

「たく、強いなサザンドラ」

「ガアア!!!」

サザンドラがとどめを刺そうと近づいてくる。

「りゅうせいぐん」

サザンドラにドラゴンタイプ最大の技が炸裂した。私もサザンドラも技の放った場所を見れば7人のトレーナーとポケモンがいた。

「よう！ユウ！やばそうだな」

「頼んでねえよ」

「頼まれてねえよ。俺様達が戦いたかっただけだ」

カゲツは相棒のアブソルと共に立っていた。まったく、あいつはかなり忙しいはずなのに直接来るなんて馬鹿なんじゃないのか。作戦がうまくいっているかどうかなんて部下にでも確認させればいいのに。

「想像力が足りないよ」

少し前にこちらで保護したヒガナとボーマンダ。師匠に感謝はしてもかたき討ちをする気はない。視線もいやらしかったし。などと saying いた彼女がここに来るとは。彼女も負けず嫌いなトレーナーであつたということか。

「いつぞやの借り、返させてもらうぞ」

相変わらず渋い男のゲンジさんとポーマンダ。ポケモンパニックは相互援助が基本だったというのに義理堅い。いや目を見れば、自分の知らないドラゴンタイプを前にしてキラキラしている。この人意外とドラゴンスキーだったのか。

「ヤッホー!!元氣してるのだー?」

この状態が元氣そうに見えるなら眼科にでも言ってくれ。フヨウとヨノワールが手を振っている。忙しい忙しいと言いながら、私たちの拠点にお菓子（ポロック）をよくたかりに来るのでそうは見えないが、本当に忙しいはずなのに来たのか。

「最高のステージだね!!」

ああハイハイ。そうですね。ミクリとミロカロスは謎のポーズを決めている。この人は単純に目立ちに来ているのだろうな。別に損得の判断が出来ないわけじゃないのに、目立てるならそんなものをぶん投げる性質は、何度苦勞をさせられたものか。

「やれやれ!世話が焼けるね」

すいませんね。ヒースとラグラージを見て周りは呆れている。この人がツンデレなのは全員が知っている。今回も心配でわざわざ見に来たのだろう。

「……………」

こういう場に慣れていないのは知っているが、何か喋れよナギ。エアームドが呆れているぞ。

今まで、こういう救援は頼んだことも陥ったこともなかった。私たちは救援する側だった。いざ助けられると何とも言えない気持ちにさせてくれる。

「じゃあ行くぞでめえらー！」

「……………指示しないで……………」

カゲツ、総スカン。ウケる。

「……………メガシンカ!!!……………」

次々とポケモンたちが光に包まれる。

カゲツのアブソルは、たてがみが天使の羽のように発達し、四肢が強靭になる。ゲンジさんとヒガナのボーマンダは、翼が大きく広がり繋がった。

フヨウのヨノワールは、体の模様が増え四つの大きな手が宙に浮いている。

ミクリのミロカロスは、美しいひれが複数生え、美しさと優雅さを兼ね備える。

ヒースのラグラージは、両腕が発達し、力強さを手に入れた。

ナギのエアームドは、翼が大きくなり、羽根が剣先のようになり無数に生えている。こう、一気にメガシンカをする場面にはなかなか出会えない。ゲームでは見たことない姿もある。

全員が一斉にサザンドラに挑む。ただのメガシンカでは今のサザンドラには一蹴されて終わりになる。そこを支えるのが、メガアブソルである。メガアブソルの角は少し未来の未来視の域にたどり着いている。サザンドラの攻撃を予知して伝達し回避させ、危ういシーソーゲームを成立させている。

ただ、力の差はどうしようもない。一匹また一匹と倒れていく。

「どう思う?」

「ガウ」

「そうだなこの因縁。最後は私たちの手で締めたいよな」

「ガウ」

「異常個体メガシンカの攻撃を受けて感覚はつかめたか?」

「ガウ!」

「なら行くのか」

最後のメガアブソルが倒れる。メガアブソルだけで10分は稼いでいた。避けてば

かりであったが、圧倒格上に対して大金屋だろう。

私はカゲツに話しかける。

「お疲れ様」

「ケツ！ かつこよく俺様が勝つてやろうと思ったんだがな」

「助かったのは事実だ。お礼は考えといてくれ」

「なら勝て!!」

「…ああ!!」

私はサザンドラと対する。

「決着を付けよう」

「ガウ！」

「ガアアアアアア!!」

横には白く輝く新しい姿を手に入れた相棒を伴って。

37話 止龍

ウインディが異常個体になった時は、怒りに吞まれ、黒い感情に支配されていた。それが姿にも反映されていた。しかし、ウインディはそもそも正義感の強いポケモンである。

援軍により絆を再認識したウインディの姿のメガシンカに影響を与えるのも必然である。

異常個体メガウインディ。

たてがみが太陽を模したように広がり、背筋を伝うように尻尾まで生えている。毛先だけは炎になっている。尻尾も長くしなやかになった。四肢の第一関節にもたてがみと同じモノが生えている。足には靴を履いたかのように炎が現れている。一番変わったのは配色であり、たてがみは真っ白に、胴体は鮮やかなオレンジ色になっている。一目見て神獸を思い浮かべることが出来る姿になった。

「ウインディ!!」

「ガウー!」

ウインディがサザンドラに向けて駆ける。今までの速度とは比にならない。サザン

ドラの時から分かっていたが、異常個体がメガシンカした時のステータスの総上昇値は200に迫る。さらに特殊な特性も複数手に入れている。

サザンドラは馬鹿正直に距離を詰めるウインディにあくのはどうを放つ。しかし、意味がない。当たった瞬間分解されウインディの力になる。

ウインディの新しい力の一つ目は特殊攻撃を受けたときに、体力を回復させ全能力を上昇させる。昔はあさのひざし、異常個体になってからは氷の操作とエネルギー操作を極めようとしてきた。その集大成の能力である。

能力が上がり加速するウインディは飛び掛かる。仕組みはわからずとも特殊技が利かないことを理解したサザンドラは、尻尾を地面に突き刺し無理やり体制を変え、ウインディの攻撃を回避した。常に尻尾で動いていた異常個体時代の名残かサザンドラの尻尾の扱いはうまいようだ。

宙に浮いたウインディを四つの首で攻撃しようとする。これをウインディは空を駆けることで回避する。

ウインディの新しい能力二つ目は足の炎を使って、空を駆けることが出来るようになった。

四つのかみくだくを回避したウインディは、じゃれつくを打ち込む。サザンドラはメガシンカしたとしても想定以上の攻撃にバランスを崩す。

ウインデイの最後の能力は攻撃時にタイプを追加する。これは使う技すべてに適用される。へんげんじさいやりペロの亜種のような能力である。

体内に余剰のエネルギーが無くなったからか、オートリジェネーションが無くなったり失った力もあるが、ウインデイはさらに上の領域に至った。

バランスを崩したサザンドラは自分の翼を大きく振り、砂埃を舞いあげる。

ウインデイは吠えることで土煙を吹き飛ばすが、土煙を破ってサザンドラの顔の一つがかみくだくを放とうとしている。

サザンドラの攻撃に関する嗅覚はどうなっているんだ。普通体勢を立て直す場面だろう。

噛みつかれ拘束されれば後はなぶり殺しになる。ウインデイは後方に逃げるが、残りの顔が時間差を置いて攻撃を仕掛けてくる。一気に攻めてくれれば隙を見つけてしんそくで攻められるが、連撃では攻撃に移せない。苦し紛れにかえんほうしゃを放つがサザンドラの鱗の前にあまりダメージは与えられない。やはり、衝撃の強い直接攻撃しかなさそうだ。

避ける避ける避ける。

が、じり貧には違いない。はめるなら今しかない。

「ウインデイ、だいもんじ!!」

サザンドラにだいもんじがぶつかる。距離が近かったため直撃するが、炎の壁を破り、サザンドラが攻撃を続行しようとする。しかし、目の前にはウインディは居ない。

サザンドラの意識に一瞬の空白が生まれる。そして真下から衝撃が来る。

種は何でもない。後ろに回避を続けることで、サザンドラの作り出したクレーターを越え、山の斜面まで誘導したのだ。そしてわざと斜面に落ちること、目の前から消えたのだ。

チツ、無意識に尻尾で防御していやがる。ただ、これが最後のチャンスだろう。

長い尻尾も長い首も四つの顔も懐に潜り込んだら、脅威は半減する。

じゃれつく連打。空中でも地上と同じように駆けられるウインディは、四肢や尻尾を使ってじゃれつくを連撃で放つ。対してサザンドラも自傷覚悟で反撃を行う。

そうして二匹は空高くどんどん高度を上げていった。こうなるとトレーナーにできることはない。ただ、見つめることしかできない。

たった数分間だっただろう。落ちてきたのは黒い龍であった。

地面に亀裂を落ち落ちたサザンドラは、もう立ち上がる様子はない。私のそばに下りるウインディも消耗していた。

「なんだよ。最後は毒でやられたのか？」

そう、同格との戦いで抑えていた超猛毒が体に巡り、力尽きたのだった。本来なら気

絶しているはずがまだ意識を残している時点で、やっぱり怪物だ。

「楽しかったか？」

「ガアア」

「また戦おうか」

「ガアア！」

私もウインディもサザンドラも無理をしてメガシンカに至った。その反動だろう。後で駆け付けた皆の話では、なかよく団子状で寝ていたらしい。

その後は人側にあまり変化はなかった。せいぜい「流星の滝」が進入禁止エリアから進入制限エリアに変わったくらいだろう。

異常個体メガシンカは完全に安定し、戦闘後も姿が戻ることはなかった。

流星の滝を含めた洞窟もドラゴンタイプのポケモンが多く生息するようになり、ドラゴンタイプ特有のプライドから鎬を削る危険地帯となっている。しかし、殺しは頂点に立つ四首のサザンドラが禁止しており、まれに洞窟の入り口に自分の力を見誤ったバカトレーナーが倒れている。

流星の滝を越えた先に座すサザンドラは、数多の竜と滝を越えることのできる強者を

待つ。私を含め、トレーナーが時々挑みに行っているが、未だ一対一では誰も勝っていない。

それでもサザンドラは満足そうだった。